

イラン（ペルシア）紀行

（下は古代ペルシアの想像上の動物「ホマ」）



平成7年3月16日～27日 12日間

（1995）

寺前信次

イラン（ペルシア）紀行 目次

まえがき	・・・ 1	ケルマン～シラーズ	・・・ 48
ペルシアとイランの語源	・・・ 3	シラーズの概要	・・・ 51
ペルシア・イランという		3月22日	52
国につて	・・・ 4	古代ペルシアの栄光の地の観光	・・・ 52
3月16日	・・・ 13	パサルガダエ	・・・ 52
成田～北京～テヘラン	・・・ 13	ナクシェ・ロスタム	・・・ 56
3月17日	・・・ 14	ペルセポリス	・・・ 58
テヘラン～レイ～コム		3月23日	・・・ 66
～カシャー	・・・ 14	シラーズ市内観光	・・・ 66
古都レイとホメイニ廟	・・・ 16	モスクの様式	・・・ 68
聖地コム	・・・ 17	続市内観光	・・・ 70
白色革命	・・・ 20	シラーズ～イスファハーン	・・・ 72
イラン革命	・・・ 23	イスファハーンの概要	・・・ 72
コムからカシャーへ	・・・ 32	3月24日	・・・ 74
3月18日	・・・ 34	イスファハーン市内観光	・・・ 74
カシャー～ナーイン～ヤズド	・・・ 34	イラン・イラク戦争の	
ナーイン	・・・ 35	背景と真因	・・・ 84
ヤズド	・・・ 37	3月25日	・・・ 88
ゾロアスター教	・・・ 39	イスファハーン～テヘラン	・・・ 88
3月19日	・・・ 40	テヘランの概要	・・・ 88
ヤズド～ケルマン	・・・ 40	テヘラン市内観光	・・・ 90
ケルマン	・・・ 41	3月26日	・・・ 93
3月20日	・・・ 44	続テヘラン市内観光	・・・ 93
ケルマン～バム	・・・ 44	テヘラン～北京～成田	・・・ 93
廃墟のアルゲ・バムの遺跡	・・・ 45	あとがき	・・・ 97
3月21日	・・・ 48		

まえがき

「烏兎匆匆」（ウトソウソウ）という言葉が今年ほど痛感したことはない。この言葉の由来は古代中国の「太陽に烏、月に兎がすむ」という伝説からきている。太陽と月とは日月、すなわち年月を表し、匆匆とは月日のたつのが速いことで、敗戦を迎えてから早や半世紀が経過した。節目の年だと思うと感慨無量である。

小林一茶は「人の世は露とおなじよ合点か」と詠んでいるように、天地宇宙は万古であっても、この身は再び得ることはできない。人生は長くても百年と言われているが、私も晩年を迎え21世紀まで生きられるか疑問である。

顧みれば競争の渦の世界から身を引いて既に20年の歳月が流れ、それ以来、私は平穏と自由をわがものとして思うままに生きてきた。「有生の楽しみを知らざるべからず、虚生の憂いを懐かざるべからず」というこの生き方こそ、まことの人生のように思っている。

老來の疾病はすべて壮時に招いたとも言われているが、私の両膝関節痛を少しでも和らげようと心した愚息は本年正月、保養のために太平洋に浮かぶ温暖なフィジ島に逗留させ、幸いにも避寒生活を送らせてくれた。

欲ばらないことを無上の宝とし、その心を保って俗間を超越すべきだと、私もそのことを知っていたながら、早春の風に誘われて病のように旅心が燃えあがって来た。そして淡い微かな期待が胸中に湧いてくると、それが次第に大きく膨らんでいった。

人は過去を変えることはできず、現在だけが自分の自由になる時である。将来を左右するのも現在で、老体はいつ異変が起こるかわからない。人生の価値は晩年に決まると思うと、現在に勝る時はないと焦ってきたのも真実である。

二人の人が死んで悔いを遺し、その一人は楽しむ気持ちを持ちながら楽しまなかった。他の一人はそれを知りながら履行しなかった、という記事を読んだことがある。年老いて大きな子供に返った今こそ、楽しむことに心を悩ましてはならないと思ったのも、自然な成り行きであった。

自分だけがこの世の唯一の慰めであり、救いであるという結論から、自分自身を開発向上させ広い教養を身に付けるためには、旅に眉を揚げ（意気をあげること）なければと決意した。

次は旅先の質の問題であった。昨冬は湾岸戦争に引かれてアラビア半島を一周し、昨夏は第二次世界大戦50周年を記念して、ポツダムやアウシュヴィッツを含む東欧7ヶ国に赴いた。黒海～カスピ海沿岸のロシアを始め中東のイスラム諸国に足跡を残していた私は、イランを訪れる機会を狙っていた。

イラン（ペルシア）は世界で初めて大帝国を建設した国柄で、太古の姿を見ることのできる類い稀な国の一つである。また白色革命から国王を追放してイスラム革命へと激変し、イ・イ戦争が勃発した現代史も亦、私には興味津々とした国であった。

しかし大正一桁生まれの我々年代の者にとっては、イランという国名よりもペルシアという国名の方が親しみが深い。国名の変更は1935年（昭和10年）のことで、私が初めてイランの名称を知ったのは第二次世界大戦中の「テヘラン会談」のあった1943年（昭和18年）のことである。

時は再び来らず、時は失うべからずと旅に備えて「作事謀始」（ことを始めるのに学習、検討すること）に努めた。しかし田舎の図書館には資料はなく、ただ百科事典だけを読破して概要をつかんだに過ぎない状態であった。

日本人は古来から東南アジア諸国への関心は高く知識も豊富であったが、西南アジア地域とは直接的な接触もなく、ペルシア（漢字では波斯）・イランの地理的条件、歴史や文化について文盲であったことは当然である。

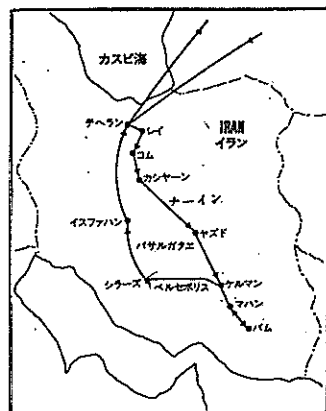
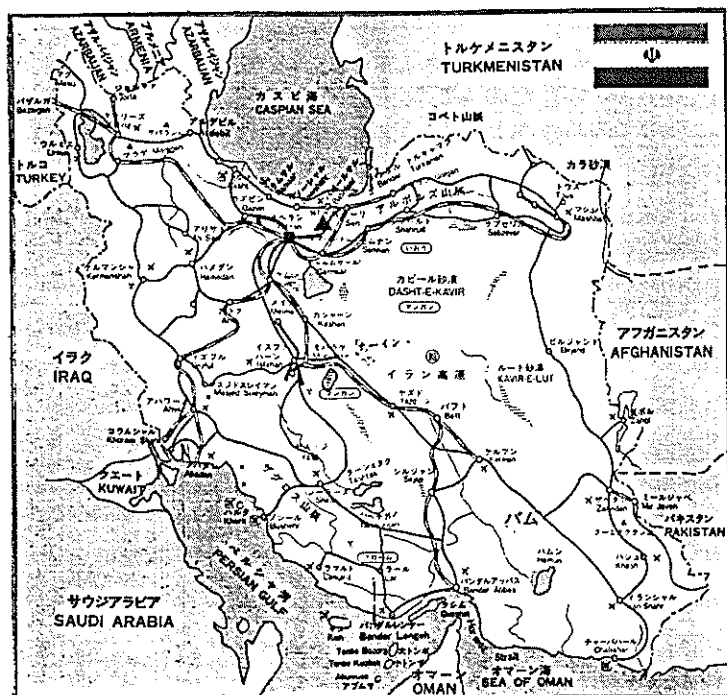
歴史的に観察すると、ペルシアは紀元前3000年頃のメソポタミア文明や、インダス文明の興隆の地に至って近く、紀元前6世紀には古代オリエント世界の統一を完成し、その後2世紀にわたって中央アジアからエジプトに至る広い地域を支配したのである。

世界文明の発祥の地に挟まれ、人類最古の文明の源に触れてみたいと、ペルシアへの期待を膨らませていたところ、参加申し込みの1ヶ月前に死者5500名以上、被災者220万という阪神大震災が発生した。

義援金は寄付したものの自粛ムードの中で旅立つのは心苦しく、気が咎めていた。しかし熟慮の結果、人の命ほどはかないものはなく、自分の人生は如何に平凡であっても、それを実現していくのは自分自身だと、旅への参加を決意したのである。

紀行文はまずペルシア・イランの語源と国の概要を記述し、白色革命やイラン（イスラム）革命、イ・イ戦争などは文中の適当なところに挿入することにした。

（下図の黄色の地が今回の訪問地）



「ペルシア」と「イラン」の語源

数千年の昔、南ロシアあたりに住んでいた数群の民族が東へ西へと大移動を起こした。西に向かったのがヨーロッパ諸民族の祖先で、東南に向かったのがイラン人、インド人などの祖先となったのである。

彼らを総称して「アーリア人」と呼び、また彼らの言語がお互いに似ていることから「インド・ヨーロッパ語族」（印欧語族）ともいう。例えば「母」のことをインドではマートル、イタリアやスペインではマードレ、イランではマダールと言い、数千年前に分かれたにも関わらず、言語の共通性は今日でも残っている。

前1500年頃、インド・ヨーロッパ語族に属するペルシア人がイラン地方に南下してきた。彼らはイラン高原の南部、当時のパールサ（parsa）、現代ペルシア語ではアラビア語化されたファルス地方（Fars）、（現州都はシラーズ）に定住した。（右下の地図参照）

前550年、パールサ族の王「キュロス」がメディア（イラン高原）、次いでバビロニア（メソポタミア南部・現イラク）王国を滅ぼし、オリエントの全域を含む大帝國を建てた。そして彼がアケメネス王朝の始祖となったのである。

アケメネス王朝の制覇によつてパールサ（parsa）がイラン全体の概念に拡大され、パールサのギリシアなまりからペルシアとなったと言われている。

（パールサの名は北方より移住して定着した部族名のパルスア（parsua）に基づくと言われている）

それ以降、このペルシアの呼び名がラテン語圏に入って広まり、ヨーロッパ側からペルシア・イランに対する他称となったのである。

イランは正しくは「イーラーン」と発音するが、この言葉はアーリア人を意味する古代ペルシア語の「アルヤーン aryan」が、「アイラーン」「エーラーン」となまって変化し、近代ペルシア語に入って「イーラーン iran」となった。

イランとペルシアの違いは自称、他称という別だけでなく、概念とニュアンスにおいて若干の相違がある。イラン系諸民族は広範囲に現住するから、イランはペルシアよりも広い意味に使われているようである。

1935年、レザー・カーン・パーレヴィ皇帝が、国名をペルシアからイランとすることを宣言して以来、ペルシアは7世紀にアラブに征服されてイスラム化する以前の、イランを指すのが普通となった。しかしペルシアはあくまでも他称であり、イラン人が自らをペルシアと呼んだことはない。

自称のイーラーンは本来はアーリア人の国という意で、イランの国語をペルシア語というのは、アケメネス王朝の地・パールサ地方の言語を基盤として発立してきた背景による。イラン語という時はペルシア語を含むイラン系の言語全体を意味している。



ペルシア・イランという国について

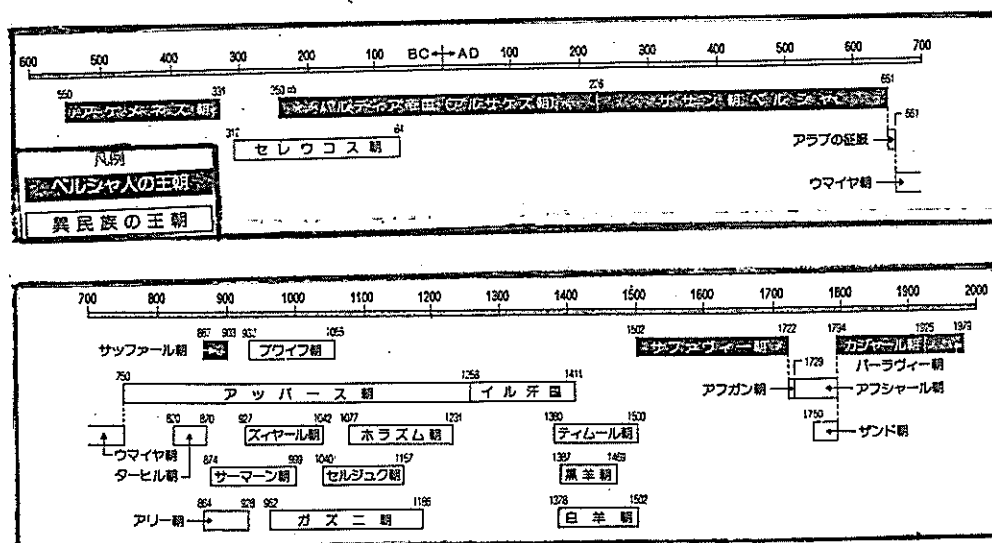
イランの歴史は古さではエジプトに及ばず、国家主権の継続性では日本や中国にはかなわない。だが、これほど歴史の浮沈に曝された国民は少ないのではないだろうか。

人類全体の運命の変動と長く結びつき続けた点では、イタリアとともに世界の双壁である。ペルシア・イランは常に世界のドラマの中で主役でなければ観客、執行者でなければ犠牲者、という重要な役割を演じてきた。

歴史の浮沈の数奇さが並はずれているペルシア・イランは、1971年に古都ペルセポリス（2頁地図参照）で、建国2500年の記念式典を開催した。しかしながらこの国は非常に輝いた独立と隆盛の時代の10世紀弱を除き、他の5分の3は隷属的逆境に置かれた民族である。

拡張主義の王朝の支配、外国に支配侵略されることの繰り返しであった歴史の概要を「イランの歴史的浮沈」「イランの地理的環境」「パーレウ・ィ王朝の出現」「最後の国王ムハンド・レザ・シャの統治」「宗教運動と王朝の崩壊」に分けて記述し、白色革命、イラン革命、イ・イ戦争などは一項を設けて記載する。

（ペルシア・イランの年表）



イランの歴史的浮沈（上記の年表と次頁の系図参照）

「アケメネス朝ペルシア」

紀元前1500年頃、中央アジアから南下してきた民族が、イラン高原のパールサ（現在のファルス地方）に定着したことは前記した通りである。

前550年、キュロス2世（大王）は、イラン高原にあったメディア帝国を占領してアケメネス王朝（前550～前330）を開き、次いでトルコのサルデイス地方とバビロン（メソポタミアで現在のイラク領）を攻め落とし、バビロンに幽閉されていたユダヤ人を開放して、エルサレムのユダヤ教の神殿の造営を許した。

その子のカンビュセス2世は前525年にエジプトを征服した。彼の死後、帝国は

しかしシャープール2世や次のアルダシール2世の時代になると、アラブ人やトルコ族の侵入を受け始め、又、アルメニアをめぐるビザンティン帝国やローマとの衝突によって、不安定な状態が続いた。

6世紀半ばのホスロー1世（531～579）のとき、ようやく国内秩序の回復に成功して外敵も一掃した。その領土は中央アジアからイエメン（アラビア半島東南部）にまで及び、ゾロアスター教を基礎に政治・経済・文化の面では最盛期を迎え、ホスロー王は東洋的聖王と言われた。

しかし王朝の末期には、再びビザンティン帝国などの侵攻や内紛による戦乱が続いて国力は消耗し、ヤズドガル3世（632～651）のとき、イスラム教を信奉する新興・アラブ人のサラセン帝国（イスラム帝国またはアラブ帝国）の侵攻を受けて滅亡した。

その後のペルシアはイスラム教の影響が決定的となり、ササン朝時代に栄えたゾロアスター教は一掃され、イスラム国家のイランの基礎が築かれた。

しかしペルシア人は民族意識は放棄せず、心の底ではアラブ人に征服されたことを肝に銘じ、現代になって現れたアラブとの軋轢は、この時からの深い根があるようだ。

「セルジューク朝」（4頁の年代表参照）

セルジューク王朝はイスラム教スンニ派を信奉する王朝である。9世紀にアッパース朝が衰退に向かうと、イスラム世界に地方勢力が次々と興った。

セルジューク朝もその一つで、11世紀、セルジューク・トルコ族は長・トゥカークに率いられてイラン東部に侵入した。族長セルジュークの孫・トゥグリル（1037～63）がガズニ朝（年代表参照）を破り、さらにブワイフ朝（年代表参照）をも破つて1055年、バグダート（イラク）に入城した。

アッパース朝（年代表参照）のカルフ（イスラム教の最高権威者）は、セルジューク朝の守護者としてトゥグリルにスルタン（イスラム専制君主の称号）の称号を与えた。

トゥグリルの跡を継いだアルプ・アルスラーン（1063～72）は国力を充実させ、小アジア（トルコ）でビザンティン軍を撃退した。又、アラビア半島のメッカやメディナをエジプトのファーティマ朝から奪還したが、続く対トルコ戦中に捕虜に殺されてしまった。

セルジューク朝ではマリク・シャーのときに最盛期を迎え、中央アジアから地中海沿岸まで勢力圏に収めた。商工業、交通網、灌漑網が発達し、学問、芸術も盛んであったが、彼の死後から衰退した。

セルジューク朝最後の王・サンジャル（1117～57）の時には、領土はホラーサーン地方（東部イラン）だけとなり、彼自らもトルクメン族（中央アジア）の捕虜となり、帰国後、失意のうちに死亡して大セルジューク帝国は滅亡した。

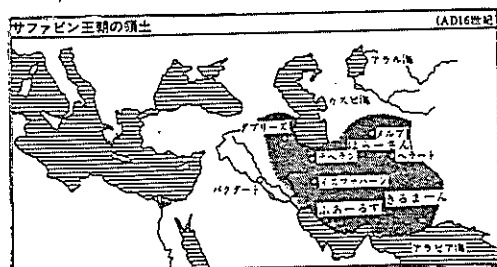
ペルシアにとって最大の災害となつたのは、ジンギスカンによって率いられたモンゴル軍の侵入（1258）であった。北部イラン農業の要であった地下水路（カナート）は破壊され、今日でも乾燥地域の農業に影響を及ぼしているほど徹底したものであった。

「サファウ・イー朝」(4頁年代表参照)

シーア派第7代イマーム(最高指導者)のムーサー・アルカジームの血を引くと伝えられるサフィー・ウッディーンの後裔、イスマーイール・サファウ・イー(1世)はトルコ系部族からなる「紅頭」の軍を率いて、1502年、白羊朝を倒してサファウ・イー王朝を建設した。

この王朝の建設によってイラン人は、アラブ人の侵入以来の外来民族の支配から脱し、自国の支配を自らの手に取り戻した。

サファウ・イーはイスラム教シーア派の信仰を国教として採用し、これまで隠れスンニー派を装って、密かに信仰を守ってきたシーア派を国民的信仰にまで広め、久しぶりに独立を回復して現在のようなシーア派の原型が作られ、イラン人によるイラン文化の黄金時代が出現した。(上はサファウ・イー王朝時代の領土図)



第5代シャー・アッバース1世(1587~1629)は国力の充実に尽力し、1598年には都をイスファハーンに遷し、オスマン・トルコを退けて内政・軍事・文化の面で同朝の最盛期を築いた。

都のイスファハーンは「世界の半分」とまで称賛されるほど繁栄し、中国の明朝やオスマン・トルコと並んで、その名声を西欧世界まで轟かせたのである。

しかし彼の死後、アッバース2世など愚昧な諸王が続いて内紛が絶えず、王朝は急速に衰退した。そして1722年、アフガニスタン人の侵入を受けてイスファハーンは陥落し、王朝は滅亡した。

「サンド朝」(年代表参照)

アフガニスタン人を追い払ったナーディール・シャーの暗殺によって、アフシャール朝(4頁年代表参照)の支配が崩壊すると各地にその武将たちが割拠し、イランの支配権をめぐって争いを展開した。

その中からファールス地方(州都はシラーズ)のサンド族のカリーム・ハンは群雄を退け、1750年、シラーズを都として王朝を開いた。自らをシャー(王)と称さず、執政と号して正義を尊び、寛容で勇気のある君主として人望を得て、イランに平和と公正な時代をもたらした。

他方、外交にも気を配り、当時ペルシア湾に進出しつつあったイギリスとの経済的発展にも努めた。

しかし彼の死とともに平和と繁栄の時代は終わり、後継者たちによる内紛とトルコ系のカジャール族の台頭によって衰微した。1794年、王朝はカジャール族のアガ・ムハマッドに敗北してサンド朝は滅亡した。

「カジャール朝」(年代表参照)

トルコ系カジャール族のアガ・ムハマッド(1779~97)は1779年、南部イランのサンド朝を倒してテヘランに都して王朝を開いた。

王朝の初期にはアフシャール朝(年代表参照)からホラーサーン(イラン東部)を

奪い、ロシアの侵入も撃退したが、19世紀の前半にはロシアとの再度の戦いに敗北した。

1828年、ロシアにコーカサスの併合と治外法権を承認させられた。そこで、かつてイラン領であったアフガニスタン方面で失地の回復を計ったが、今度はイギリスと衝突し、1857年のパリ条約でアフガニスタンの独立を認めさせられた。

一方、ロシアの南下侵略は著しく、1876年までに中央アジアを併合してしまった。また植民地インドの防衛を策すイギリスとロシアのイランをめぐる確執も激化し、両国によるイラン植民地化が進められていった。

ようやくペルシア人の政権を復活したカジャール朝のペルシアも、ヨーロッパ列強諸国の勢力争いの舞台とされ、利権を蚕食されたのである。

こうした情勢の中で、イラン内部では次第に民族的自覚が高まり、1905年には立憲革命運動が起こり、翌年には国民議会が成立した。

第1次世界大戦後、イギリスによる保護国化とソ連の侵入によって国内は混乱に陥ったが、カジャール朝の最後の王・アフマナット・シャー（1909～25）は、何ら有効な手段がとれず、1921年、コザック旅団の一将校レザー・ハーンがテヘランを占領して墮落したカジャール朝を倒し、1925年に新王朝を開いてカジャール朝は滅んだ。

次いで現れた「パーレウ・イ王朝」については後記することにする。

以上、アケメネス、ササン、サファウ・イのペルシア民族の三王朝は、ペルシア・イラン国家の隆盛時代を代表し、民族の伝統を継ぐ正統な王朝と見做されているが、他の王朝は他民族に隷属的な立場であったのである。

イランの地理的環境

以上のような波瀾の大きいイランの歴史は、地理的環境に基ずくところが多い。

東西1800哩、南北1800哩の面積は日本の約4・5倍で、国土の80%は標高1000～3000呎の高原をなし、砂漠ないし山岳の不毛の地で覆われ、住民は河川流域と溪谷の農耕地と都市に発展するのみである。

古代のイランは中央アジアの国境付近に少数民族が存在したが、概ね一民族で一国家を形成する単一民族国家であった。アラブ民族が23の国家に分裂し、トルコ民族が4つの自治共和国に分裂しているのと著しく異なっている。

イラン人が一民族として逆境に培われた民族意識も大いに寄与しており、イランの政治的浮沈は何よりも地理的位置から生まれている。

アジア、ヨーロッパ、アフリカ大陸の陸の橋である中近東の中で、イランは著しい特異性を持っている。中央アジアへの橋頭堡インドへの関門をなし、南はペルシア湾とインド洋を睥睨し、西はメソポタミアの肥沃な平原に連なり、北はコーカサス、小アジアに連なっている。（右の地図参照）



この陸橋はイランに損失と利益の両方をもたらした。政治的にはイランの大発展を可能にしたが、一方では外部勢力の侵略に曝された。

前記したようにアケメネス朝の諸王は、エジプトから中央アジアにわたって大帝國を建設した。しかしギリシアのアレキサンダー大王とアラブ人は、西や西方から侵入してきた。近代ではイギリスはイランをインド防衛の防禦線とし、ロシアは暖かい海への出口を求め、イランを国際紛争の焦点にした。

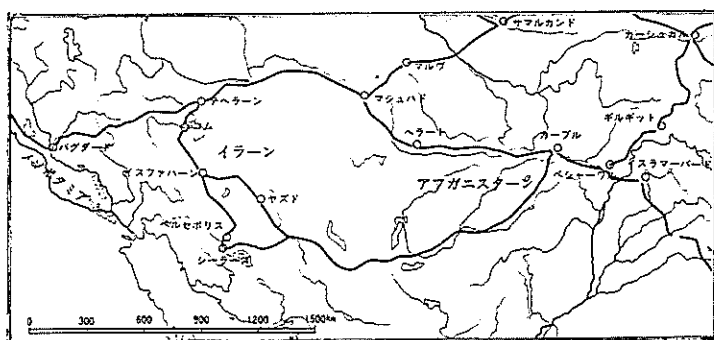
国土が異民族の侵略に曝され続けたことは、多くの人種や宗教を残した。前記した単一民族も多民族国家となり、近代国家として統一性を損なう不利益をもたらしたのである。

宗教的には人口の96%がイスラム教徒で、その90%はシーア派である。シーア派の信仰は一部では少数民族の分離独立運動の抑止に役立っているが、王政支配の反体制勢力として力をふるう基盤を作っている。

18万人の宗教家(ムラー)や、高級宗教家アヤトッラー(1200人と言われる)は長い被圧迫状態の中で、抵抗運動のエネルギーを培ってきた。それが19世紀には反帝国主義運動、20世紀には国王の宗教抑圧に抵抗する力の源泉となっている。

イランを侵略した征服者の進んできた道は商人や巡礼が通行し、商業路は侵略路でもあった。

歴史の曙時代からイランは中国と西方を結ぶ貿易路の中継地をなし、シルクロードの要衝でもあった。(右はシルクロード地図)



こうしてイランはイスファハーン、シラーズ、ヤズド、コム、テヘランなど、多くの商業都市が政治的浮沈を超えて繁栄した。

中継商業都市には大規模なバザール組織が発達した。バザールは遠隔地商業の宿場であると共に、金融の街、大商人の間屋街、手工業の工場街をかかえ、近代産業が発達するまでは経済の中核をなしていた。

バザール商人はまた民衆を支配する宗教家と組み、帝国主義時代には内外の政策を動かす政治力を発揮し、今日でも侮り難い力を秘めていると言う。

これらの都市は文化の培養地となった。輩出した多くの文人、詩人、宗教思想家、科学者は、イラン人に自民族をアラブ以上に文化的であるという誇りを持たせ、イラン人の民族意識に強い基盤を与えている。

以上は地理的環境からの考察である。

パーレウ・イ王朝の出現

イランはその戦略的な位置と莫大な石油生産のため、20世紀を通じて列強間の抗争の対象となった。

先ず19世紀に入るとイランはイギリスとロシアの帝国主義的侵略の対象となり、1907年にはドイツの進出に脅えて協商を結んだ英・露は、イランの国土をその勢力範囲に分断して半植民地的支配下に置いたのである。

その時に起こった立憲運動は、利権の譲渡を恣にする君主に抵抗する、宗教家の反帝国主義運動であった。また地方部族や豪族勢力の既得権を無視した、中央集権化に抵抗する反政府運動でもあった。

宗教界、大商人、地方部族長、大地主と、中央集権制を押し付けようとする王権との争いは、イランの歴史を貫く特色で、20世紀に入って俄かに国際性を帯びてきた。

1908年にペルシア湾岸で初めて油田が発掘されると、1913年にイギリス海軍は有名なアバダン製油所（ペルシア湾の西端）を建設し、イランをめぐる英・露の対立にドイツが割り込むという帝国主義の抗争となった。

第1次世界大戦後の世界的な民族運動の高揚が、イランでは初めて民族解放運動の立役者「レザー・ハーン」を生んだのであった。

1921年2月21日、レザー・メハーン大佐は当時、唯一の洋式軍隊であったコザック騎兵隊を率いて首都に進撃した。彼はイギリスにイランの財政管理権を認めたイギリス・ペルシア条約を破棄させ、又、友好条約と交換にソビエトの武力を撤退させ、国を瓦解の危険から救ったのである。

その後、一兵士から昇進したレザー・ハーンは陸相となり、1923年に首相に推された。当時、国外居住を続けていたカジャール朝の王に代わって1925年に元首に推され、レザー・シャーと称して王位に就き、「パーレウ・イ朝」を創設した。

この時、共和制を嫌う宗教界の意向に沿って国民が王政を認めたことは、今、振り返ってみると実に興味深いものがある。

レザー・シャーは、第1次世界大戦後、トルコ共和国を建設したケマル・アタチュルク（ケマナル・パシャ）と比肩される偉大な指導者であった。

彼は初めてイランに中央集権体制を作り上げた。この時までイランは部族長と大地主が実権をにぎり、僧侶と大商人が勢力をふるう封建社会であった。

また彼は税制を改めて財政を整え、巨額の軍事費を投じて軍を拡張し、その力によって地方部族を討伐して族長や豪族を政府の中央集権の支配下においた。

それにしても第2次世界大戦直前のイランの兵力が、3万2000人（1937年）に過ぎなかつたことは、1977年のイラン革命時の陸軍兵力34万人と比較すると、今昔の感がする。

彼はケマル・アタチュルクに倣い国営方式で綿紡績、製糖、セメント、食品業などの近代工業を興した。これらは白色革命（後記）期に民営に移されるが、これがイランの資本主義的な発展の緒となった。

又、彼は国内に2万8000キロの道路を開設し、延長1400キロの縦貫鉄道を建設した。この道路や鉄道の開発は国内市場を大幅に拡大し、イラン経済と国際経済との結びつきを上げたのである。

第2次世界大戦中、この鉄道は、ドイツを攻略するソ連軍に対する米国の援ソ武器

輸送路に使われ、援ソ武器の3分の1を運んだと言われている。

彼はまた教育を奨励し、女性の面被（ベール）を禁止するなど、イスラムの旧習の改革に手をつけたが、近代化の必要を否認する宗教界と王との摩擦は、この時から生じたのである。

前記した通り彼は1935年、国名を「ペルシア」から古代に用いられた「イラン」に改め、イスラム以前の伝統を強調した。

又、彼はイギリスとソ連の圧力を避けるため、ナチス・ドイツとの貿易経済関係を強化してこれに接近した。しかし1941年に独ソ戦が開始されると同時に、英ソは米国とともにイランを軍事占領し、レザー・シャーは退位させられてしまった。

そして彼が南アフリカに流謫（タク）されたのは、英・ソなどの諸国が彼をどれほど恐れていたかを物語っている。シャーは3年近い流謫の後、彼の地で1944年7月26日に没したのである。

最後の国王・ムハント・レザー・シャー

パーレウイ王朝の初代王・レザー・シャーが追放されると、1941年9月、息子のムハント・レザー・シャーが21才で父の跡を継いだ。新国王の生涯は、これまでの英・ソの南北対立に加え、石油に振り回される数奇な人生を送ることになった。

パーレウイ新国王はフランス人女性の家庭教師をつけられて教育され、さらに12才から5年間スイスに留学した。彼は国王になったものの政治の経験は浅く、占領軍としてテヘランを占領していたイギリスの傀儡に過ぎなかった。

第2次世界大戦中に即位した新国王は、連合軍に国土を占領された逆境に置かれていたが、大戦が終了するとともに、ソ連からも北部5州の石油権利の譲渡を要求され、石油問題に巻き込まれた。

この要求を拒否した議会討議の延長が、1951年に断行された「モザイク政府」の石油国有化紛争の導火線となった。

これらの石油紛争による経済破綻を救援したアメリカは、石油の利権を取得してイランに決定的な影響力を揮い始め、石油がらみのシャーの治世に凶運を呼び起こした。

シャーがブルジョア急進派を率いるモザイク政権を倒したのは、当初、モザイクをブルジョア勢力として支持しなかったツデー党（共産党）の協力が、遅すぎたことが有利に影響している。

紛争後、シャーは石油国有化紛争に目覚めた中産階級の要求を先取りして、土地改革などの改革政策を打ち出そうとした。しかし、3000家でイランを制していると言われる、大地主層を代表する議会勢力の抵抗で難渋した。

その結果、石油生産が回復した1958年頃の段階で、過剰投資によってインフレが起こった。腐敗選挙を恣にした政党政治家を、父に倣って彼は独裁的な行動で一掃しようとした。

彼は1961年5月から1963年9月まで議会を停止し、勅令によって選挙制度の改正を進め、土地改革を断行し、国民投票によって6項目からなる総合的な「国王と国民のための改革」（白色革命）を開始した。

しかし彼の白色革命には、ツデー党（共産党）などの急進派と、反王政宗教家や大地主層などの保守派の反対を、国家情報治安機構（s a v a k）で弾圧しつつ行くと

いう、不安な様相がまつわりついていた。

土地改革によって寺院の宗教領が没収されることを、私有権の侵害だと大反対運動を起こした「ホメイニ師」は、1963年6月に逮捕されトルコに追放された。

1963年～4年頃、経済開発が軌道に乗り始めてから、シャーの威信と権力は安定した。大地主層が姿を消し、中産階級が多数を占める議会では、新たに結成された「新イラン党」が議会の8割を制し、王の支柱となった。

王は1961年、ソ連から大幅な経済援助（ガスパイプラインや製鉄所建設）を得て、全方位外交の柔軟策を打ち出した。1965年には時の首相が反対勢力に暗殺されたが、代わった新首相の12年の施政下では比類のない安定経済成長を遂げたのであった。

これらの改革を「白色革命」と称し、これらの内容は一項を設けて後記する。

宗教運動と王朝の崩壊

石油収入の拡大によって白色革命は一応の成果を上げた。イランは20年以内に自由世界第5位の経済大国に成長し、イランの増大した軍事力を以て、「ペルシア湾の番人（憲兵）」になるという自信を呼び起こした。

これらの驚異的な発展は我々の記憶に新しいことだが、オイルショック後、背伸びした財政運営は社会経済発展に深刻な跛高と困難を起こし、王の独裁に対する国民の不安が高まってきた。

1978年の春になると、反王制宗教運動が急速に広がり始めた。1月7日、聖地コムでホメイニ師追放に抗議するデモ隊が警官隊と衝突し、これがきっかけとなって全国に暴動が波及拡大した。

ホメイニ師はイスラム的倫理の保持と王制打倒を目標として、イスラム共和国の樹立を呼びかけた。彼の秘められたカリスマ的指導性から、政治自由化の声とともに爆発的な影響力を発揮し始めた。

1978年8月、石油都市アバダン（ペルシア湾西端）の映画館放火では477人の死者を出し、9月4日にはテヘランで10万人デモ、7日には50万人デモと次第に膨れ上がり、事態は收拾できなくなっていった。

インフレからの救済を求めて賃上げを要求する全産業労働者のストライキが蔓延し、10月19日のアバダン製油所のストから、政府は戒厳令施行という強行政策に転じたが、大衆行動に打つ手を失った状態に陥った。

1979年1月16日、イスラム革命によって遂にパーレウイは王位を追われて国外に亡命し、王朝は滅亡した。そして1月31日、民衆のに圧倒的な支持を受けてホメイニ師は帰国したのであった。（右はパーレウイ夫妻の亡命姿）

上記の「イラン革命」については一項を設けて記述する。

イスラム共和制革命は人権闘争から宗教闘争に広がり、多くの衝突と人命の損傷を出した。しかし最終段階の衝突を除いては基本的には非暴力的な大衆デモと規律あるストライキの力で達成したのであった。

1980年9月22日に発生したイ・イ戦争も後記する。



3月16日

(木) 晴

成田～北京～テヘラン

春の彼岸が近づく北陸路の春陽も暖かを増し、積雪が消えた辺りの景色も穏やかさを帯び、野に咲き始めた草花も和らいだ色を浮かべていた。空を飛ぶ鳥たちのさえざる小さな音色が鼓膜を楽しませてくれる街道を、娘は私を小松空港へと運んで8:20発の羽田行の便に搭乗した。

13:30に成田に集合。中近東方面行の飛行便は定刻に出発した記憶はなく、今回も遅れに遅れ、予定より2時間後の16:45に漸く飛翔した。

イラン航空の日本人スチュワーデスはチャドル（ペール）を被り、その容姿は惚れ惚れするほど清楚で美しく、心が奪われるほどうっとりさせられた。勿論、乗客の女性はずべてチャドルを着用しなければならず、イスラム世界は飛行機内でも男性天国の延長であった。

見渡す機内は圧倒的に日本人が多く、次いでイラン人、中国人の順の乗客で、北京まで喋りどうしの中国人の声は耳障りであった。それに反して日本人やイラン人はおとなしく、国民性であろうか。

成田～北京間を4時間20分で飛行すると、久し振りに見る北京の街から灯が暗闇の中に点々と見えてきた。しかし日本の地方都市以下の照明で、経済成長したとはいえず未だ電力不足のようである。気温は0°、21:15着。

往事渺茫として記憶は薄れてしまったが、機内で1時間も待機させられていた時、鄧小平氏がイラン・イスラム革命に際して、「覇権を愛するロシア人がイランから皇帝を追いつかせた」と発表したことが、私の脳裏に鮮明に浮かんできた。目的は何であったのだろうか。

イランは中近東世界、就中、ペルシア湾岸地域の小さな土侯国の多い諸国の中では第一の大国で、人口3000万以上の国は僅かトルコとイランだけである。地理的にもカスピ海両岸で2000キロもロシアと接し、極めて重要な地帯を占めている。

イラン西部のペルシア湾一帯は第1次世界大戦以降、イラクとともに中東の最大の油田地帯として脚光を浴び出した。こうしたイランの産油国としての重要性は第2次世界大戦後は益々強くなり、我々の大きな関心事となった。

22:20、北京を飛び発って所要時間7時間40分の彼方のテヘランに向かうと、意外にも多数のイラン人が北京から搭乗して超満席の状態となった。それほどイラン人は経済発展中の中国に出稼ぎに来ているのである。

人なつっこいイラン人の一人が片言の日本語で話し掛けてきた。彼は日本で3年間ばかり働いて900万円も貯金して、土産品には電気製品を購入したと語り、日本ほど素晴らしい国はないと絶賛した。外交辞令でも悪い気はしないが、900万円は考えられない金額で、悪事を働いたのではないだろうかと思っていた。

万古不変の広大な宇宙を飛ぶ我々の一生などは一夜の夢に過ぎず、果てしない夜空に輝く星群を眺めて、俺たち人間は如何に小さいかを改めて悟りながら、うつらうつらの睡眠のうちに、出発から15時間後の0:30（翌日）にテヘラン空港に着陸した。気温は13°

空港ロビーに立って最初に私の目を引き付けたのは、ホメイニ師の大写真であった。

1979年2月1日、15年ぶりに帰国した彼を迎える300万人の大群衆の光景が
瞼に浮かぶと共に、日本経済を揺るがしたイラン革命は、対岸の火でなかったことを
思い出したのである。

英国に10年間留学したというガイドのアリー氏の出迎えを受け、一行25名はタ
クシに分乗して深夜の約5駅の街道を疾走した。栃木県足利市のプレス工場で働いて
150万円を貯蓄したと自己紹介した運転手は、日本車の優秀性を誉めちぎった挙句、
身元引受人を依頼してきたのは何処の国も同様であった。(入国には引受人が必要)

街道上の暗闇の広場にライト・アップされた塔の下部が見えてきた。これは私の知
識の中に詰め込んできた、ペルシア帝国2500年祭に建てた自由記念碑で(196
3年に建立)あった。

衆心帰一という意味で建てたと言われている塔を、凝視するように見詰めていると
「足下照顧」、即ち、足もとを照らしてこれで良いのかと自問しているように、私に
は見えるのであった。

車窓の外はどこまでも闇が走って、真夜中の市中は呼吸を止めたように深々と静ま
り返り、一期一会の縁だと期待を込めた私の眼光は、眠気を忘れて炯々と輝いていた。

年老いた我が身も漸くアジアの西の果てに辿り着き、イランの夢を包む最初の宿と
なったアザディ・グランド・ホテルに旅装を解き、疲労困憊の身をベッドに横たえ
たのは午前3時、意識朦朧の状態のうちに眠っていった。

3月17日 (金) 晴一時雨

テヘラン～レイ～コム～カシヤーン

(下図は経路図)

我々一行が5000年の歴史をもつイランの首都テヘランに、足跡を印したのは
3月17日金曜日の真夜中であった。12年前の1978年9月8日、テヘランで軍
とデモ隊が衝突した「黒い金曜日」と言われた日と、希しくも同じ金曜日であった。

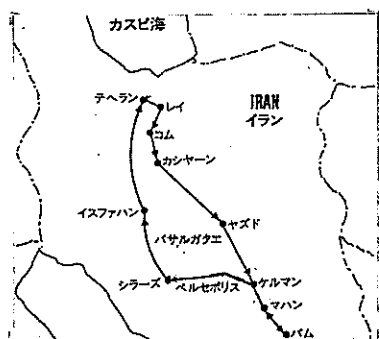
テヘランは古い歴史をもつイランでも比較的に新しい町で、首都に制定されたのはカジャール朝の1783年である。イランという国が古代文明の舞台だとすると、テヘランはイランの新しい文化の中心地と言えるだろう。

今となっては52年前のこととなり記憶は明確ではないが、テヘランという都市の名前を初めて知ったのは、兎も角1943年の「テヘラン会談」であったと思っている。

それは同年11月28日から12月1日にかけて開かれた米英ソ巨頭会談で、米大統領ルーズベルト、英首相チャーチル、ソ議長スターリンのほか、各国外相と軍首脳が出席し、米英中三国首脳の集まったカイロ会談に引き続いて行われた会談である。

この会談は第2次世界大戦中、米英ソ三首脳が初めて一堂に会した会談で、連合国側の一致協力関係と優位を世界に印象づけたのであった。

直接的な会談の成果は連合国側の作戦調整にあったようだ。地中海作戦、ビルマ奪



回作戦などの諸計画の調整に成功し、翌年には北フランスのノルマンジー上陸作戦を執行することが協議されている。

テヘラン会談を転機として、これ以降は連合国間の協議内容の比重が、戦争遂行上の問題から戦後処理問題へと移っていった。なおスターリンはこの時、ドイツ降伏後の対日参戦を約束している。

我々年代の者は別にして、一般的日本人にテヘランの名が知れ渡ったのは、恐らくイラン革命から米大使館人質事件、イ・イ戦争からであったのではないか。

6時45分のモーニング・コールに叩き起され、上記のような想い出を思い浮かべながら、22階の我が部屋の窓から空を見上げた。未だ生み出す春の気配が欠けていたが、冷たい冬の空は今日も眩しいほど青く澄み切っていた。

窓一杯に大きく映っていたのは白皚皚（ハクガイガイ）として白雪を被う連峰であった。日本アルプスを思わせる神秘的な光景が眼前に迫り、慄然とした威圧感に襲われている感じがしていた。

東から西へとテヘラン北方を走るエルブルス山脈は、北から南に向かって緩やかに傾斜し、南の麓に開けた扇状地に位置するテヘランは高原都市で、市の北部にあるホテル付近は静かな高級住宅街となっていた。（2頁地図参照）



ロビーにもホメイニ師の大幅な写真が掲揚されたホテルを、9時に出発したバスは、芽吹きのまだ早い枯れ木のように寒々とした、マロニエ並木の街道を南へと坂を下った。

人口700万の大都市は南に向かって発達し、高層ビルが群立する都会の光景を眺めながら四通八達した道路を通り抜け、郊外に向かう高速道路に進入すると、レース前の競馬馬みたいに興奮してきた。

殺風景な砂漠化した郊外は整然と植林され、その間にアパート群が続き、自動車の波が路面を埋め尽くして活気に溢れる景観であった。

朝の太陽が車内に蒼白い光を射し込んで冷えた肌に暖かみを与え、一直線に伸びる灰色の砂漠の沿道には、無聊を慰めるように花壇が設けられ、なんとなく心の休まるような気分になってきた。

ガイドのアリー氏はテヘランの概要を話し始めた。テヘランの「テ」は壁の意味で、「ラン」は地域（エリア）を表し、山の壁に囲まれた盆地の町というのがテヘランであった。目に映る大地は正に彼の言う通りで、興味深く拝聴を続けていた。

車窓に流れる沿道の工場という工場には、ホメイニ師の大肖像画が掲がっていた。それはアラビア半島の各首長国のような独裁国家の感じが強く、予想以上の強烈な印象を私に与えた。

イスラム共和国という政体のもとに新しい国造りが行われて来たが、それは一貫してイスラム教への回帰と、パーレヴィ国王の背後にあった米国、及びその文化への反発であろうか。

戦後の中国の毛沢東像やソ連・ロシアのレーニン像ばかりでなく、戦中の中国でも山間僻地までも蒋介石の肖像があったことを考えると、敗戦以前の天皇制日本も顔負けの光景である。出発して約30分を経過すると、砂漠の中にぶどう畑や小麦畑、野菜畑などが見え出した。そこが小さな農村の「レイ」であった。

古都レイとホメイニ廟 (14頁地図参照)

テヘラン東南10哩のレイは古代には「ラガ」と呼ばれ、ゾロアスター教(後記)の経典や旧約聖書にも出ている。前5000年から紀元後12世紀の間、繁栄したと言うから随分と長い間栄えた町である。

西のバグダット(イラク)から東のホラーサーン地方(イラン東北部)、その先のインダス川の上流地域(アケメネス王朝時代の版図)に至るまでの交通路の要衝にあたり、中国の史記にも「黎軒」(レイ)と記録されている。

レイは後のシルクロードの重要な隊商都市となり、マルコポーロの東洋見聞録には「レイは東洋における最も美しい町で、バグダッドに次ぐ」と書かれている。

11世紀の初頭には、中央アジア方面から移ってきたセルジューク・トルコ族に征服され、その都が置かれた。その後、ジンギスカンによって攻め滅ぼされてしまった。

レイはまた上記したようにイスラム以前からの歴史をもつ古い町だが、更に八代目イマーム・シザーの息子の廟が建てられて以降、巡礼地として発達した。

我々の乗車したバスは、黄褐色一色に包まれた土砂漠の中に建っているホメイニ廟の前で停車した。このような場所に廟を建設した理由には特別な意味はなく、土地が広く、一般人の墓地があったからだと言った。私の質問に答えた。

私の見たところテヘランに至って近く、上記したようなことから、この地を選んだと思いながら、数百ヤードもある広大な前庭を歩いて廟に向かった。

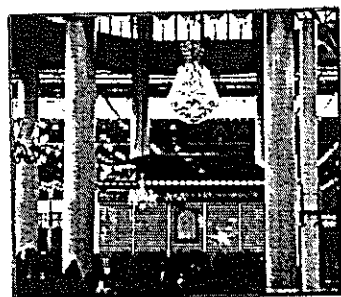
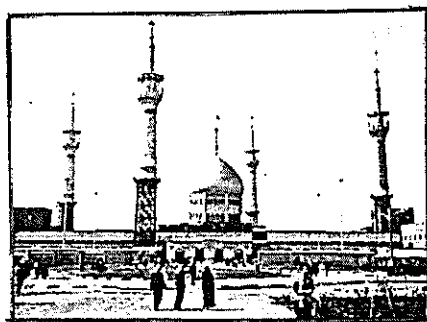
今日はイスラム世界の休息日である金曜日のため、1万人以上の老若男女が参拝に訪れ、自動車の波で埋まる駐車場の傍らに、敷物を拡げて休息する家族連れの様が見えていた。(上の写真はホメイニ廟の正面)

この廟は異宗教の我々にも内部拝観や写真撮影も許された。それはホメイニ師のカリスマ性よりも、熱狂的な国民の崇拜する光景を異教徒にも観せ、イランをイスラム化しようとする姿を外国人に認識させる目的ではないだろうか。

黄金色のドームを中心にして鳳のように両翼を拡げ、黄金色の4本のミナレット(尖塔)が天空に聳えたホメイニ廟は、一辺100ヤードもあろうかと思われる広大な建物で、一行はイスラムの掟に従がって靴を脱ぎ、襟を正して男は左、女は右から入った。

奥が霞んで見えないような廟内には、数え切れないほどの大理石の柱が林立し、床には豪華なペルシア絨毯が敷かれていた。その上を黒一色の参列者の列が延々と歩き、天井には幾千幾万個の灯が吊されていた。

灯の光が映る大理石の床の中央は、ホメイニ師の柩を収めた安置所となっており、鉄の格子に囲まれた安置所に押し寄せる人垣は幾重にも取り巻き、容易に接近できない有様であった。(右の中央が柩の安置所)



格子の中に安置した師の石棺は、高さ1疋、幅疋、長さ2疋ほどの白大理石でつくられ、薄暗い中に静かに安置されていた。一世を風靡した師の遺徳は永遠に偲ばれるだろうと、私も刮目して拝視していた。

彼の死後45日間で建てたというホメイニ廟を参観して、科学では割り切れない宗教の力を痛感した。そしてイスラム世界の数ある聖職者の中で、師ほど慕われるのは一体何であろうかと、考えさせられた。総べて運否天賦ではないだろうか。（右の写真は廟内の大理石の床と天井の灯）



歴史を繙くと、戦争は勝者の文明を押しつけ、敗者の文明を根絶した例が多く見られる。イランも7世紀にイスラム軍団によって征服され、それまでのゾロアスター教に代わってイスラム世界となったが、その理由をガイドに質問しても確答は得られなかった。

人の世は生まれた国に生きている限り、目に見えない網の目に幾重にも捕らえられ、到底、関わりのない者となり得ないのである。流れに任さなければならないのかと言う感想を抱きながら、廟を辞したのであった。

このとき、仏教で重視する「恭敬礼拝」という言葉を思い出した。恭とはうやうやしいことで、慎み深い心を態度で現すことである。敬もうやうやしいことだが、反対に心の中で忿怒することである。それらが「畏敬の念」だと考えると、その点では仏教もイスラム教も同じように感じるのであった。

しかしホメイニ師の鋭角的な顔からは、「円満具足」というイメージは感じられない。角がない穏やかなドームの円さと、神色自若とした師の顔とでは似合わない思いながらバスに乗車した。

アレキサンダー大王も東征のときに滞在した「レイ」、アラビアンナイトの千一夜物語で名高い、ハルーン・アル・ラシッドの出身地も「レイ」だが、レイの観光はホメイニ廟だけで終わり、再び砂漠の人となった。

聖地コム（14頁地図参照、テヘラン南東150km）

なんとなく心の休まるような感じを抱きながら、バスはコムに向かって砂漠街道を南へと驍進すると、直ぐホメイニ師の肖像を掲揚した検問所で停車した。、イランでは前もって、走行速度を申告して許可を受けることが義務づけられていたのである。

雲一つないからりと晴れ澄んだ空は、正に霽日青天（せい）という形容がぴったりで、解放感を味わうために時々車内で軽く体を伸ばしていた。

レイとコムの両聖地を結ぶ乾燥した砂漠地帯には莫大な費用をかけて植林され、さながら20年前の植林報国を謳い文句にしていた共産中国と同じ姿であった。（右はレイとコム間の植林風景）

ガイドは両地ともにホメイニ師と深くかかわる土地だから、緑化するのだと説明した。一般的な緑化の目的は住民のためだが、この国では総べてがホメイニ師の礼賛のためであった。

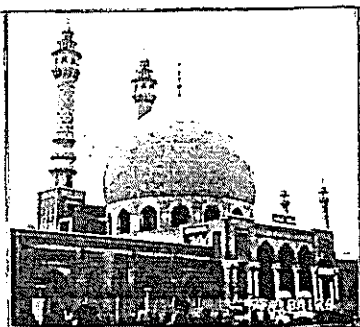


パーレウ^イ国王を追放した功績はどこまでも勝てば官軍式で、宗教一辺倒は白色革命を笑えない感じがする。

右手に建設中のホメニイ空港が見えてきたが、距離的にテヘラン市内から余りにも遠い感じがしていた。街道はそれ以外に網膜を刺激するものではなく、出発以来の寝不足は急速に緊張を弛緩させ、自然にうつらうつらとなってきた。

速度を落としたバスはインターを降りると、そこは干乾レンガで作った家が並ぶ小さな部落であった。殺風景な街を進むとお土産を並べた商店街となり、幾つかのドームとミナレットが聳える広場の一角で停車した。ここが有名なコムの「ファティマ」の聖地であった。

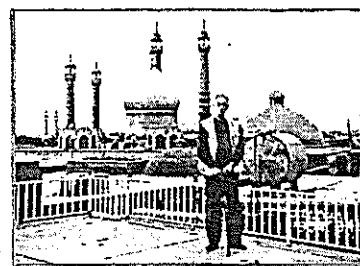
(右はファティマの正面入口とモザイクのドーム)



金曜日の礼拝に訪れた黒装束の信者の波は、広場を埋め尽くしていたが、我々外国人は歓迎されない聖地で、聖地内に入ることは残念ながら許されなかった。その上外国人女性まで場所の如何を問わず必ずチャドルを被り、全身を黒装束で纏わなければならないとは、本当に身勝手だという感じを受けるのであった。

広場に立った私は直ぐ、1978年1月、イランで最初に流血の暴動が起こったのは、このコムであったことを思い出した。その暴動が燃え広がってやがてイスラム革命を引き起こし、パーレウ^イ国王を打倒することになったのである。

「古人の言(い)く、聞くべし、見るべし、得べし」だと考え、早速ガイドに流血発生の場所を質問すると、彼は間髪を入れず金のドームの下だと応えた。しかし、聖地内に入れない我々はその場所を確認できず、ただ残念の一語でお仕舞いであった。



ガイドは我々を引き連れて、広場の一角にあったレストランの屋上に案内した。聖域に目をやると広大な建物が延々と拡がり、金のドームを注視しながら当時の状況を脳に描いていた。

(上の写真はレストランの屋上から金のドームを背景にして撮影)

イスラム教シーア派の信徒の間では、歴代の「イマーム」や聖人、殉教者の遺徳を偲び、その墓所に参拝する習わしがある。

イランでは東北部のマシュハド(2頁地図の右上)に9世紀の8代イマーム・レザー廟があり、これに次ぐ聖地がコムの第8代イマームの妹を祀る「ファティマ」である。(妹のファティマは兄を訪ねていく途中、このコムで病死した)

「イマーム」とは超人間的な存在で、カリスマを認められる人格者である。罪からも誤りからも無縁とされ、政権と教権を兼備し、聖なるイマームが統治権を持つことになっている。だからシーア派ではイマームとその血縁の子孫の聖者崇拝が発達した。

イスラム教はスンニー派とシーア派に大別されているが(他にもある)、シーア派は更にいくつかの宗派に分かれ、その中でイランは最大の宗派である十二イマーム・シーア派である。一般にシーア派はスンニー派と異なり、最高指導者(イマーム)を立てている。

十二イマーム・シーア派では、初代イマーム・アリー（マホメットの従兄弟で娘婿）から数えて、12人のイマームが相次いで世に現れた。

最後の十二イマームは生きながらこの世から姿を消したが、世の終末の日には必ず地上に再臨し、この世に正義を満たすと信じられている。

コムは首都テヘランに近い、イランの有力な宗教都市（現人口は郊外を含め約100万）として発展した。ホメイニ師も1963年の追放される以前には、コムの学徳ある宗教指導者で、師が教鞭をとった神学校も聖域内に存在している。

コムはまたイランに於けるシーア派の教学研究の中心で、最高位の学者はこの町に住み、シーア派世界の総本山の観がある。前記した通り今回のイスラム革命の牙城であり、発祥の地となった。

廟の内部には聖者の墓石が安置され、それを取り囲む柵が巡らされているという。参詣者はこの柵に触れ、聖者の遺体から放射する呪力を身に受けるとともに、個人的な願いごとを唱えるのであった。その通りレイのホメイニ廟でも信者は格子の柵に触れていた。

1963年1月、「白色革命」の是非を問う国民投票で国王側に軍配が上がると、ホメイニ師は40日間の服喪を宣言した（40日は普通、死者に対する服喪期間）。これに苛立った国王は降下部隊を聖都コムに送り込み、ホメイニ師ら抵抗派のイスラム僧を捕らえた。

〔白色革命は後記するが、流血を伴わない皇帝指導の社会改革と言うことで、白色革命と呼ばれている。農地改革、普通選挙、女性解放、文盲退治などの改革は宗教勢力にとっては、民族的実体と伝統的生活様式を破壊するとして反対した〕

翌年、国王は遂にホメイニ師の国外追放を決定し、師はこの時から15年間の長い亡命生活が始まったのである。

「神の革命」とも呼ばれる「イラン革命」（後記）は1978年1月7日、聖都コムで始まった。国外にいる宗教界の最高指導者・ホメイニ師を誹謗する記事が政府系の出版物に出ると、コムの神学生のデモ隊が警官隊と衝突し、数十人の死傷者が出た。

これを切っ掛けにして反王制運動が拡大し、2月18日には北西部の大都市であるダブリーズで死者100人、傷者1000人以上を出し、3月29、30日にはコム、イスファハーン、ヤズドなどの主要都市で宗教家指導のデモが広がった。

5月10日、コムの宗教最高指導者の住居に秘密警察が立ち入ると、事件は更に反抗を募り、6月5日にはホメイニ師追放15周年を記念して、全国大都市のバザールは全店のシャッターを下ろして抗議した。

細部は省略するが、国王は反王運動の鎮静を求めて弾圧の緩和姿勢を示したが、既にその措置は焼け石に水で、統治権を大幅に議会と首相に譲り、「君臨する君主」に後退した。

1979年1月16日、パーレウイ国王はファラ王妃とともに国外に退去し、1月31日、圧倒的、熱狂的な支持のもとにホメイニ師は帰国した。その光景は日本の茶の間にも放映され、我が記憶の中に刻明に残っている。

次に白色革命とイラン革命を記述することにする。

白色革命

流血を伴わない王室指導の革命的な社会改革と言うことで、一般に人々は「白い革命」あるいは「白色革命」と呼んでいる。その概要を記してみたい。

パーレウ^イ皇帝は第2次世界大戦中の1941年（昭和16年）、英ソ占領下のみじめなイランという小国の君主として即位した。既に初代皇帝であった父レザー皇帝の時代から、帝政ロシア〜ソ連のイラン干渉を怒り、父が英ソの圧力の下で退位させられたあと、占領下の祖国を引き継いだ新皇帝の胸中は、大国からの政治的な独立を願っていたことだろう。

ここに彼の民族主義の根源があり、それは自然であったと言わなければならない。彼が1953年にモサデク首相を失脚させ、自ら国家の実権を握った後、中央集権制の下に強力な近代化を進めてきた。

それは一重にイランを如何なる国からも干渉されない、政治的にも経済的にも、他国から対等に扱われる国家としたかったからにほかならない。そして彼はこれに成功し、少なくとも米ソでさえ一目置くようになったのである。

だが、彼の自叙伝によると、彼の民族主義はイランの国益を伸長するために手段を選ばず、独善的な民族主義となっていた。皇帝はこれを積極的民族主義と呼んでいる。

しかし独善的な民族主義はともすると、民意に反して遂行されることに気が付かなかったか、気が付いてもこれを無視したのであった。ここにホメイニ師の抵抗の根源的な理由があった。

我々年代の者にとってはペルシア時代を除き、イランの歴史の始まりはパーレウ^イ国王の時代で、中東最強の軍隊に守られ、「王の中の王」を名乗ったパーレウ^イ国王のイランは、偉大なる文明への夢を膨らませていた。

古代ペルシア帝国の後継者に相応しく、20世紀末までに西欧先進国と同格工業社会を建設することが、「偉大なる文明」の内容であった。

日本では明治時代の天皇制の下における富国強兵策が国是として決定されたが、大正・昭和と経過するうちに、日本を破滅に導く原因となった経験を連想するのである。

「白色革命」とは、1949年に策定された経済建設7ヶ年計画を焼き直した、上からの民主化計画のことで、当初の目標は次の6項目であった。

- ①土地改革 ②森林の国有化 ③国営企業の民間払い下げ ④労働者への利益還元
⑤選挙法の改正（普通選挙と女性解放・婦人参政権の実現） ⑥教育の普及

上記で最も重要な課題は①の土地（農地）改革であった。シャーは第2次世界大戦直後から、イランの政治的発展の癌である「大土地制度」の廃止を意図していた。これらは良いことづくめのように、どれをとっても反対の理由はなさそうである。

先ずシャー（皇帝）は1951年から皇帝領の土地解放を開始し、1960年には、一般の大土地所有制を廃止する土地改革を制定して強行した。1962年の初めには土地の所有の限度を、1ヶ村以内に引き下げるという厳しい制度が加えられた。

土地改革への国内の支持を背景にした政策を国民投票にかけ、絶対多数の支持を受けたシャーは、①農村医療隊の設置 ②技術教育の促進 ③農村裁判所の設置 ④水

資源の国有化 ⑤都市と農村の再建 ⑥官僚組織の再編成、を追加した。

以上の合計12項目が所謂「白色革命」と名付けられ、1960年以来のイランの相次ぐ社会経済開発の指標として、社会変革の推進力となった。

この白色革命は驚異的なものであるが、それを達成させたのは飛躍的に増大した石油収入であった。しかしイスラム宗教勢力や大地主らの反対も猛烈であった。

パーレウ^イ王制とイスラム勢力という白と黒の勢力が全面対決の時を迎えると、ホメイニ師は信者に対し、白色革命の是非を問う国民投票のボイコットを呼びかけた。しかし投票の結果は国王側に軍配が上がった。

イランは全農地の34%を全人口の0.2%が所有するという封建性が残っていた。部族の首長や大地主は首都テヘランや海外に住み、領地には管理者を置いて小作農民に耕作させていた。

イスラム寺院（モスク）もまた宗教領（ワクフ）と呼ばれる農地を所有していた（荘園）。モスクは地方の教育機関でもあり、病院の経営や慈善事業も行っていた。

だから小作を開放する土地改革は、イスラム勢力の屋台骨を揺るがすもので、文盲退治の公立学校や寺小屋式教育を担ってきたイスラム僧を失業させ、彼らの権威を失墜させるものであった。

土地改革の結果は全農地の65%を占める大地主、15%を占める宗教領などの大所有地は、種々の便法で一部の没収を免れたものの大幅に開放され、5万の農村中1万5000の村が再分配され、自作農は78万に増大した。

土地改革は、より多くの人が土地を所有する状況を作り出したが、生産増とはならなかった。この状態を変えるために国家は政策を転換した。新規の自作農が60年代中期に生産に失敗した後、イランは農業経営を、外国とイランの資本家による土地の大規模開発という形で奨励した。

しかしこの政策は多くの自作農と小作農を土地から追いやった。国家は独立自営農民を国営農場と生産者組織に、強制的に統合することに決定した。このことがイランの小作人階級の間の抵抗を増大することになったのである。

この結果、農民たちは失業者として都市に流れ込み、農村地方での不毛地化が広範囲にわたって拡大し、小作料を金納化された小作民層は窮乏を深めた。そしてオイルショック後のインフレは、低所得者層の生活を極度に圧迫した。

これらの計画は宗教勢力にとっても、民族的実体と伝統的生活様式をぶち壊すものとして、強硬に反対した。

「工業生産」では従来の軽工業に加え、化学肥料工業、製鉄業、電気機器製造業、自動車組立業などが発展し、生産は年率20%と増大していった。

「婦人参政権」を与えるという男女平等等の女性解放の方針は、女性は弱く保護すべき者と考えてきたイスラムの伝統的規範から、決して容認できるものではなく、宗教界は「神を恐れぬ計画」だと強く反対した。

又、インフレ防止策の不備、熟練労働者の不足、王族・高級官僚の腐敗などで遅滞した開発政策は、日常化した交通渋滞や電力不足などに現れ、生活の破壊を深刻にしていた。

パーレウ^イ皇帝の夢みた「20世紀末までに中東の日本になる」という構想は、ペルシア湾の覇者への道に短絡した。膨大な武器を買い入れ、世界有数の軍隊を擁す

ることが、一番の近道だと考えたことは最も危険な道であった。

そしてイラン軍の増大と平行して膨らんでいった国民の不満には、徹底した恐怖政治の鉄棒がはめられた。

莫大な軍事支出は財政赤字となって開発政策を圧迫していった。そして財政緊縮のために寺院への補助金は3分の2に縮小された。このことが宗教界の反王制運動の有力な起爆薬となったと考えられる。

しかし、これらの不満を爆発させた主な根源は、何といたっても王の独裁であった。王は独裁の必要性を次のように強調している。

「国民の4分の3が読み書きを知らないとき、改革は最も厳密な独裁主義によってしか実現できない。若し無慈悲でなかったら、農業改革さえ遂行できなかったであろう」と、旧地主層の猛反対を抑えて貫徹した、土地改革での苛酷さを弁解している。

独裁を不満とするリベラリスト、ツデー党（共産党）などの極左勢力を、王は悪名高い「国家情報機構」（SAVAK）を組織して弾圧した。1971年～72年の都市ゲリラを含む騒擾だけでも、この機構は2500人を投獄したと言われている。

これらの弾圧とともに在外留学生4万5000人の帰国を禁止し、独裁の最終的仕上がりとして1975年、シャーは全政党を統合した「復興党」組織して、単一政党制による支配を企て、リベラリストを切齒扼腕させた。これは戦時中の日本の大政翼賛会を思い出させる。

独裁者には自己抑制力が乏しく、シャーの独走の推進力となったのは軍事大国化の夢であった。この軍拡が革命の一般的な要因である財政破綻を引き起こしたのである。

イラン南部の海岸線には50以上の空港と30を超える軍事基地が設置され、核弾頭ミサイルを装備したポラリス潜水艦、空母、戦艦、戦略爆撃機など、アメリカを除くと世界で最も強力な各種兵器を完備していた。

国王は自国の緊張と自由欠如を肯定しながら、これは過渡期の不可避現象として目をつぶろうとしていた。しかし芽生えた反王運動は、宗教界を中心にしたデモとなって波及し、一見、強固に見えたシャーの権力も動揺して崩れ始めた。

反王運動の鎮静を求めた王は自由選挙、政治の自由化を表明したが、時すでに遅く、国民戦線が正式に結成された。

政治の自由化は宗教運動ともなり、憲法の遵守、政治犯の釈放、SAVAKの解体、挙国統一内閣の結成を含む「イスラム共和国の建設」を要求する、政治的な主張が高まっていったのであった。

以上、記述した白色革命からホメイニ師の登場となり、黒い革命とも言われる「イラン革命」に移行していった。

静かに世界情勢を回顧すると、米ソ冷戦構造の中で米国はイランを反共の防波堤にしようとして、膨大な軍事、経済援助を開始した。これに対し国王は「国家資本主義的社会改革」として「白色革命」を発表したが、結論的にはアメリカの反共戦略の犠牲になったのではないだろうか。

アメリカの経済援助のみならず、莫大なオイルダラーを湯水のように使い、20世紀中に世界の五大国の一つになるという国王の白い革命は、曾ての日本の池田首相の唱えた「所得倍増論」に比べ、「所得10倍論」以上に匹敵するだろう。日本の高度

成長がもたらした矛盾と歪みを遥かに上まわる膿を噴き出したのが、白い革命であったようである。

白色革命に引き続いて起きた黒い革命も、突然に発生したものではない。それを用意したのはイラン民衆であると同時に、皇帝自身であった。

皇帝の試みた上からの近代化の「白い革命」は、矛盾をはらんだ強引な推進であったから、必然的に「黒い革命」というか「赤い革命」というか、その下地を作った。

次に「ホメイニ師の生い立ち」を含めた「イラン革命」を記してみたい。

イラン革命 (黒い革命)

1978年以来のイラン革命は、一部には「神の革命」と呼ばれるように、イランのイスラム指導者ホメイニ師を反国王運動の最高の英雄に立て、整然と展開した。

1979年2月、国民戦線の指導者が同師の指名によって革命政府を組閣し、「イスラム共和国」を目ざしてイランの再建に着手した。国王が推進した近代化改革と工業開発計画はここに頓挫したのである。

イラン革命は日本を含む西側諸国に大きな衝撃を与え、イスラムが中東の政治運動の底流に大きな活力を保っていることを、今更ながら見直したのであった。

他の宗教と比較して注目すべき点は、マホメットが宗教上の預言者であると同時に、政治による国家の首長を兼ねていたことで、預言者＝政治指導者であった。

一般の多くの宗教では、教祖的人物と教団の運営者とはそれぞれ役割分担を異にし、別々の人物が立つものである。しかしマホメットは二つの役割を一人で兼ねて、大成功を収めた例外的なケースである。

同様にイスラム教団は同時に国家であり、当時、宗教共同体の発生は国家権力の誕生をも意味していたのであった。これらの一連の革命の状況は茶の間のテレビに放映され、その生々しい光景が臉に浮かんでくる。

パーレウイ国王という宿敵を倒し、イランの頂点に立ったホメイニ師は、イランの政治の路線を巡る戦いに乗り出した。ペルシア湾の長い歴史の中でも最も激しく劇的なものであったが、革命を率いたホメイニ師という人物の、生い立ちを知ることも重要なことである。

「ホメイニ師の生い立ち」

「アヤトラ・ルホッラー・ムサビー・ホメイニ」は1902年、イラン中西部の小邑、ホメイニに三人兄弟の末っ子として生まれた。その9ヶ月後に父親が暗殺され、ホメイニ師は重い宿命を背負って生まれたのである。(右はホメイニ師の肖像)

父親はマホメットの血を引く者にしか許されない黒いターバンを巻く聖職者であった。シーア派イスラム僧を中心に民族主義者と結んだ立憲運動が高まっていた頃、父親はイギリスに屈したカジャール朝の元で、甘い汁を吸う地主たちを鋭く批判して恨みを買ひ、殺されたのであった。



ホメイニ師は矢張りイスラム神学者の娘だった母に育てられ、その死後は敬虔な叔母に引き取られた。この間、ホメイニのムッラ（イスラム僧）のそばで勉学した。叔母は15才のとき亡くなり、兄と一緒に暮らすことになった。そのころイランは第1次世界大戦の激戦の最中であつた。

戦争が終わってみるとイランは事実上イギリスの保護国と化し、反英運動が次第に激しさを増していた。その中核となつたのが、聖地コムを最大拠点とするシーア派イスラムの宗教勢力で、ホメイニ師は神学生として1922年からコムで生活することになり、この闘争をつぶさに見守つた。

シーア派は反英運動で既に大きな実績をあげていた。カジャール王朝がイギリスに「たばこ」専売の利権を譲渡したのを怒つたシーア派指導者が、1891年、信徒に「たばこ」を吸わないように命じ、これが厳しく守られた結果、利権を取り戻すことが出来たのである。

娯楽というものがない時代に、数少ない楽しみである「たばこ」の不買運動を指示して、それが全国津々浦々にまで徹底したことは大した力であつた。

このようにイランでは民族主義運動は常に宗教勢力と連動する。国民といえば地方の村々の農民であり、シーア派の彼らはモスクの組織下にあつた。広い国土の町村ではその中心は全国にある8万のモスクで、僧侶は尊敬する指導者である。

学校がなかつた第2次世界大戦後まで、彼らは村人たちの読み書きの先生、医者、獣医でもあつて、中央地方の部族長の組織を除けば、動員力のあるのはモスクの組織網しかなかつた。

その中心である聖地コムにホメイニ師が学び、時代の空気を存分に吸つたのである。父親の死、戦争、ロシア・イギリスの干渉、反英運動など、イランの歴史と重なる体験がそのままホメイニ師の考え方の支柱となつた。

民心をよく把握して適切な指導力を求められる世界の中で、ホメイニ師は学問の深さとともに傑出した才能をみせ、コムに学ぶ1万人からの修行僧の中で人気を博し、自然に指導者としての階段を登っていった。

彼はもう一つの戦いを経験した。1921年、イランの実権を握つた先代皇帝のレザー・シャーが、トルコの英雄ケマル・アタチュルクの政教分離の政策に感銘し、西欧流の共和国を建設しようとしたのを、コムの聖職者が反対してその野心を粉碎したことである。

レザー・シャーはそれでもイスラム刑法、一夫多妻制を廃止するなど、シーア派の指導者と対決を続け、ここに王室とシーア派の反目の構図が固まつたのである。

1941年の第2次世界大戦の最中、イランがロシアとイギリスに分断占領され、レザー・シャーが退位してパーレウイ青年国王が誕生した頃、コムの有力な神学者であつたホメイニ師は、イランの政治は ①自由 ②独立 ③外国の支配の排除 の三原則に基かなければならないと主張した本を発刊した。

この本では「圧政者に対する抵抗は、イスラム教徒の第1の義務である」「国王の独裁国家の命令には何の価値もない。そんなものは燃やしてしまえ」と、戦うイスラム教徒を鼓舞する独特の考え方を示した。

外国の支配・干渉と、それと結んだ王制に対する激しい怒りの政治姿勢は、ここにその原型をみせている。それはホメイニ師が独自に形成したものと言うよりは、イラ

ン及び国民が忍ばなければならなかった歴史の非合理制の産物であることは、当時を振り返ってみれば理解できる。

イランはその後、モザイク革命を経て白色革命を迎えた。シーア派の最高指導者として浮上したホメイニ師が陣頭に立ち、白色革命と対決して強制的に亡命させられながら、遂に王制を倒してテヘランに凱旋した。

しかし問題は帰還してからの師の言動であった。師は「イランはコーランに背くものであってはならない」と、一切の妥協を拒否するかたくな姿勢をみせ、革命に結集した人々を慌てさせたのである。

ホメイニ師は、「7世紀に預言者マホメットが後継者アリーと一緒に統治していた10年間」、を理想としている。これはマホメットがメッカで迫害されて622年9月、メディナに逃れてから死ぬまでの10年間の教団生活のことである。

ホメイニ師の願いは将（マ）にその再現であり、イランを巨大なモスクと化すことであった。

王制を倒し、自らの主張である自由、独立、外国支配の排除を実現した後に、ホメイニ師が示した方針の祭政一致の神の国の再生こそ、ホメイニ革命の真髄であった。

この目的のためにホメイニ師は反対する勢力を、次々と切り捨てる血みどろの権力闘争を進めていくことになるが、そうした不退転の決意の裏には、師が編み出した哲学があった。

それは師と祖国イランの苦難の歴史を背景に、イスラム教を全面的に取り入れて、発展させる統治理論とも言うべき、イスラム法学者による政治であった。俗人でなくイスラム僧による国家の統治、すなわち「神権国家」である。

この考え方は、革命の過程で突然に思いついたものではなく、ホメイニ師は既にコム（Qom）の神学校の教授をしていた1940年代に、次のように教壇から語りかけている。

「イスラム政府は法による政府であるが、神のみが支配者で立法者である。神の支配はあらゆる人々の間に、そして国家そのものに効力を持っている」と。

即ちあらゆる人々は神の啓示を通して、或いは神の預言者マホメットを通して立法化したもの（コーラン）に、従わなければならないと言うのである。

7世紀に於いてはマホメットは全ての権限を一身に集めていた。彼は立法者であり、裁判官であり、統治者であり、世俗的権威と宗教的権威を兼備していた。しかし今は7世紀ではない。予言者がいない現代では誰が統治者であるのだろうか？。

イスラム法学者による統治がホメイニ師の考え方の根幹で、これを実現するために、「イスラム教の姿を大衆に伝え、労働者、農民、学生を戦士に仕立て上げよ。植民地主義の思想及び道徳上の影響力を打ち砕け。専制的支配を打倒せよ。イスラム教団で策動している本来、権限を持たない全ての政治権力を打倒せよ。それが我々すべての者にとっての義務である」と、激しい闘争の言葉を繰り出すのであった。

多くの宗教者が精神論や倫理を説くに止どまるのに対し、師は社会体制との戦い、正義、公正の獲得にまで推し進めている。それが実現できなければ、出来るまで戦おうと呼びかけている。

イランから強制亡命させられる前、白色革命の中でホメイニ師は、「私はいつでもこの胸を銃剣で貫かれる覚悟ができています。決して圧政者に頭を下げない」、と信者に語り、その通り彼は実行した。

以上のように詳しくホメイニ師の生い立ちと考え方を記述したのは、師が指揮したイラン革命が、こうした師の個性がどこまでも投影しているからである。

「イランを取り巻く環境」

革命の経過はともかくとして、何故このような革命がイランに発生したのであろうか、と考えると、イランを取り巻く社会的、政治的な環境を知らなければならない。それを整理してみると、次の四点に集約できるだろう。

①の特徴は、イランは単一民族国家ではないことである。（8頁の地理的環境では最初に単一民族国家書き、後に外国の侵略によって単一民族出なくなったと記した）

人種的にみても言語的にみても宗教的にみても、イランは多くの異った民族が集合して出来あがっている国家である。これは重要な特色の一つだ。

中近東の世界ではトルコは単一民族国家だが、アラブは単一民族国家を形成していない。イランはその中間と言えるだろう。勿論イランはペルシア語民族が中心だが、それだけで国家が形成されていないのである。

具体的にはロシアとトルコの国境付近のアゼルバイジャンの住民は、ペルシア語ではなくトルコ系のアゼリ語を話す。又、アゼルバイジャンは単に人口700万の多さだけでなく、イランの中でも重要な地位を占めている。（上図参照）

今日のイランを実質的に形成したのは、国民王朝といわれるサファビ朝の出現（16世紀初め）であったが、首都はアゼルバイジャン州の州都のダブリーズであった。

このサファビ朝は、イスラム教シーア派を初めて国教としたことで有名だが、トルコ系色の強い一族が興した王朝であった。そして最初にコムで暴動が発生すると直ぐダブリーズに飛び火して、全土に波及したことで重要性が証明される。

イランにはクルド族も存在している。イラン、イラク、トルコ、ロシアの国境にまたがって独特な文化を持った民族で、イラン系の言語に属しているが、独自の風習を持っている。

又、クルド族はスンニー派の影響を受けた民族で、その数も無視できないほどである。イランだけでも数百万人と言われており、他の三国を加えると1000万人を超えている。未だ独立していない民族としては、現在、残されている世界最大の民族の一つである。

これらの異民族、少数民族の複合体が実はイランの姿である。イラン革命が進行する中で、国王は「若しホメイニの見解が支配的になって君主性が廃止されると、イランは第二のレバノンになる」と述べていた。

レバノンも複合国家で、スンニー派やシーア派の他に多くのキリスト教徒もおり、紛争の絶え間のない国である。



②の特徴は、イランはイスラム教シーア派の信仰が根強いことである。

シーア派はシーア・アリーと表現されるように、アリーの血統こそが預言者マホメットの正統な後継者だという宗派である。その意味でシーア派は血統主義である。（アリーは18、19頁参照）

アリーは預言者マホメットの従兄弟で、預言者の唯一の娘であるファティマを妻としている。つまりアリーとその子孫には預言者の血が流れており、その血統以外には預言者の後継者はいないと言うのである。

ペルシアの歴史を繙くと、ローマ帝国と競い合う大帝国となったササン朝の最後の王・ヤズダギルト3世は、紀元637年、ユーフラテス川沿いの「カディスィーヤ」の戦いでアラブ軍に敗れ、現在のイラン中部の平原で決定的な大敗を喫した。

これによってササン朝の首都も陥落して滅亡し、その後、長くペルシア民族は異民族のアラブ（セム族）に支配されることになった。

伝説によると、ヤズダギルト3世の娘が奴隷市場で売られているのをアリーが発見し、自分の息子の嫁にしたと伝えられている。即ちササン朝ペルシアの王の血筋が、シーア派の中に流れていると言うのである。この強烈な血統主義はイラン人の誇り高い民族的な所産である。

ペルシア人は何時の時代でも、異民族の武力に屈しても決して完全に支配されることはなく、独自の文化的伝統を守り抜いてきた。物質文明よりも精神文明を重視したイラン民族は、宗教でも連帯感を結集させた。

アラブに支配されるまでのイランは、「ゾロアスター教」（拝火教）を国教としていたが、次第にイスラム教へと改宗が進んだ。しかしアラブのイスラム教をそのまま受け入れず、アラブが信奉する正統派のスニー派に反対するシーア派を信仰し、鬱憤を晴らすのであった。

「シーア派」という名称は分派行動を意味している。これは「アリーの一派」というアラビア語の「シーアット・アリー」をアリーと省略したもので、ここに正統派に抵抗するというシーア派の起源が隠されている。

ホメイニ師は「虐げられた人」「その人たちの思想」という表現を使っているが、シーア派の伝統は抑圧された者の思想であり、シーア派の発祥の時からその思想を持っていたのである。

③の特徴は反体制運動の伝統があることである。

イスラム文化を完成したバクダートのアップース朝（750～1258）に対する抵抗や、13世紀以降に成立したオスマン・トルコに対するサファビ朝イランの抵抗があり、イラン現代史の中にも強烈な反権力的、反体制的な政治運動があった。中でも有名なのは前記した「タバコ・ボイコット」運動であった。

この時代は、カジャール朝（1794～1925）というイラン正統王朝の最後の王朝の末期で、列強特にイギリスとロシアのイランに対する進出が、さまざまな形で行われていた。

この中でカジャール朝は深刻な財政危機に陥り、イギリス商人に対して50年間のタバコの栽培・製造・輸出の専売権を与えようとしたため、このボイコット問題が発生したのである。

これはイランに大論争を巻き起こして反対運動が燃え上がり、当時のシーア派の最

高権力者はタバコを喫うのを止めよという禁止令を出した。

これによつてカジャール朝は、専売令を公布する直前になつて取り消さざるを得なくなつた。これはシーア派の宗教界と民主運動が重なりあつた最大の抵抗である。

カジャール朝の頹廢が続く中で、王は財政危機にかかわらず奢侈に走り浪費を続け、ヨーロッパ旅行を企てては、その都度ロシアから莫大な金を借り、ロシアもそれを良いことにして權益をイランに押し付けていた。

これを繰り返して3回目の旅行のとき、借金する計画が国民に知れて民衆の大憤激を被つた。この反対運動が宗教界の運動と一緒に、国会開設運動になった。

国会開設に成功して憲法改正のための国会議員が選出され、国会が招集される最中に国王が病死した。その後を継いだパーレウ^{ペル}ィ朝創設者のレザー・シャーもまた、時代の動きを理解せずに反動的な行動に出た。

彼はロシアの力によって作ったコザック軍団を率いて国会を包囲し、大砲を打ち込んで大量の死傷者を出す弾圧を行い、第1次立憲革命は崩壊した。

崩壊するとイスファハーン（2頁地図参照）などの都市住民は蜂起してテヘランへ攻め上つた。1909年、ついに民衆はテヘランに入城してシャーを追放し、新しい青年国王を擁立して立憲革命を成立させた。

中東の中で、この時期に、これほど大きな立憲運動の例はない。これは中国の辛亥革命（1911年の孫文らによる清朝打倒）に劣らない運動であつた。

イランのこのような政治運動の歴史は、第1次世界大戦中の列強による事実上のイラン占領、その後のレザー・シャーによる軍事クーデターによって中断されたが、イラン革命でみせた民衆の反体制運動は、偶然ではないと歴史が証明している。

④の特徴は国際関係の重圧で、これがイランの運命を左右した。

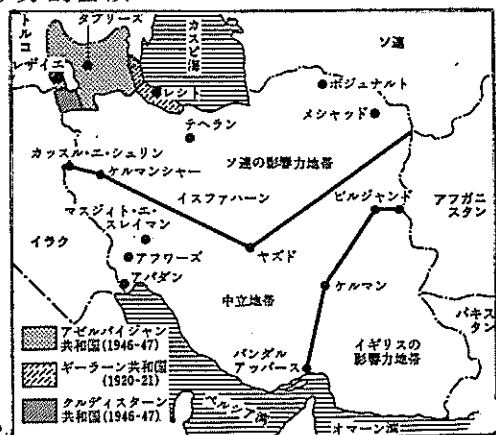
上記したカジャール朝の末期の立憲革命が不成功に終わったことも、ロシアを始めとした列強の干渉が原因であつた。1907年にイギリスとロシアがイランを分割する協定を結んでいたが、これが悪名高い英露協定であつた。

英露協定とはイランを北部、東南部、その他に三分割し、北部はロシア、東南部はイギリス、その他の地帯は中立地帯とし、有事の際にイランを分割占領するという秘密協定である。

実際に第1次世界大戦が勃発するとイランは中立を宣言したが、その中立は全く無視され、イギリスとロシアは秘密協定のとおり分割占領してしまつた。第2次世界大戦に於いても似たようなことが起こつた。

第2次大戦ではイランは始め中立を表明していたが、イギリスとソ連の圧力を受けて結局、英ソはイランに軍を進めた。即ち北部5州はソ連、南部はイギリスとアメリカという形で、事実上占領された。（右図参照）

その結果、イランはアメリカのソ連に対する武器援助の運搬路として重要な役割を果たし、それによつてソ連はナチス・ドイツの進撃食い止めることに成功した。何れにしてもイランが重圧で侵略された事は否定できない。



更にソ連は戦後もイランに居残り、アゼルバイジャンやクルディスタン（全頁地図参照）にソ連の支援する共和国を樹立させ、一時期これらがイランから独立を宣言する事態にまで発展した。

パーレウ^ウィ王朝についても同様なことが言える。初代皇帝のレザー・シャーは一介のコザック兵から身を興し、1921年のクーデターに成功して、国防大臣から更に権力を握って王朝を樹立した。この際にはイギリスが強力に支援している。

第2代皇帝もまた同じであった。1951年頃からイランは非常に政治的に不安定となり、モザイク首相が出現して石油産業を国有化すると、モザイクはシャーに廃位を迫った。

1953年に皇帝はイランを逃げ出したが、その後、アメリカのCIA（中央情報局）の支援と米英の圧力によって呼び戻された。即ちパーレウ^ウィ王朝の成立・復活は全て外国勢力によって成し遂げられている。

「イラン革命はなぜ起きたか」

以上のような環境を背景にして、イランになぜ革命が起きたかを考えると、パーレウ^ウィ王朝の正統性が甚だしく欠如していたことが大きな原因と思われる。

イランの誇り高い国民性や正統主義の伝統から見ると、一介のコザック兵から身を立てて、しかもイギリスの力によって王位を獲得した王朝を、イラン人が果たしてどこまで容認できたであろうか。

国家存亡の危機に2度にわたる外国勢力の圧力と、便宜的な都合によって作り上げられた権力の非正統性や、体制自身の底の浅さを、この王朝は最初から持っていた。

この基本的な要因に加え、以下の三つの具体的な原因が上げられるのではないか。

第Ⅰはシャーの行ってきた専制政治の破綻、第Ⅱはシャーの行った白色革命と急速な近代化、第Ⅲはオイル・ブームによる経済的、社会的な混乱。この三つが国民に反体制的な気運を醸成していると考えられる。

第Ⅰの専制政治は前記した通りで、非常に非人間的な圧政が行われてきた。それを代表するのがSAVAK（秘密警察）などで、残酷な抑圧がイラン民衆の激しい怒りと呼んだのである。

第Ⅱの白色革命と急速な近代化は、イランに大きな問題を与えた。白色革命は王自らが提唱した上からの革命で、農地改革、森林国有化、国営工業の民間払い下げ、労働者への利潤還元、婦人参政権といった人気取り政策と同時に、伝統的な勢力の排除にも腐心していたのである。

農地改革によつて大地主制を出来るだけ取り崩して小地主制を作り、これをシャーの政権の支持基盤にしようとしたのであった。しかし、何れも不成功に終わり、实际的に農地改革は殆ど行われなかった。

農地改革はイラン全土の15～20%が対象となったと言われるが、それによって大地主制は僅か数%が少なくなっただけで、依然として農村には300万世帯、1500万人の人たちが存在し、その60%は土地を持っていなかったのである。

農業生産は全く停滞し、70年代に入ると都市への人口流出が始まった。そして都市に流れた人々は、大きな貧富の格差の中で苦しい生活を強いられたのである。

第Ⅲは農地改革の失敗に追い打ちをかけたのは、オイル・ブームによる経済的、社

会的な混乱であった。

石油価格が4倍に上昇した以降、経済成長率は25%という狂気に近い急速な成長であった。イランに今までになかった原子力発電所を24基も作り、6車線のハイウェイをペルシア湾まで走らせ、テヘランに大地下鉄をつくり、日本の新幹線の技術を導入して大鉄道網を作るなど、恐るべき開発計画を次々に打ち出した。

軍事費もまた大変な勢いで膨れ上がり、国防費は12倍にも拡大した。これがイラン経済に破滅的な状態を与えない訳がなかった。

こうしてイランは枯れ草に火をつけたようにインフレの大火が押し寄せた。そして次第に供給不足が起こり、港湾、輸送、労働力、水、電力など悉くが不足となった。要するに停電によって50%も物が作れない状態に陥ったのである。

上記したような状況の中でイラン革命は起るべくして起きた。イランの政治的な伝統であるシーア派的な、又、歴史的な政治運動と結び付き、イラン革命は成功したのではないだろうか。

「シーア派の戦闘性」

イラン革命の背景と原因は上記の通りで、1979年1月、シャー打倒に成功したイラン革命は、その後、シーア派の体制を急速に深めていった。

(右の写真は1979年1月16日、イランを脱出するパーレウイ国王夫妻)

革命政府は革命後の政体を「イラン・イスラム共和国」として国民に提案し、圧倒的多数で可決された。

ホメイニ師は「国民がのぞんでいるのはイスラム共和国であり、単なる共和国や民主共和国ではない。民主という言葉は西洋主義だ」と徹底的に排除した。

宗教勢力の大攻勢によって国民戦線は、民主国民戦線などの左派や中道派は追い詰められて敗北した。そして主権在神、イスラム法学者が指導権を握り、国民投票によって新憲法は99.5%の圧倒的多数で成立した。

このホメイニ師を頂点とするイスラム共和党の流れは、1979年11月4日の米国大使館人質事件で一挙に加速したが、これらの報道の我々の目に焼きついている残照は、今でも私の網膜に残っている。

(右の写真は占拠されたテヘランの米大使館)

以上のようなシーア派の戦闘性の流れを更に明瞭にしたのが、1981年9月22日に勃発したイラン・イラク戦争(スンニー派對シーア派)だ。

仏教の諺に「宗旨の争いは釈迦の恥」というのがあるが、世界の何れの宗教にも争いは絶えず、誠に嘆かわしいと言わなければならない。



「イラン革命とは何であったか」

一体イラン革命とは何であったか。それは専制政治に対する民衆の一大蜂起であった。革命を指導し、革命の過程で激しい権力闘争を繰返し、勝利をもたらしたのはホメイニ師の主唱である。

その主唱とは、イスラム法に精通したイスラム法学者によって国民を統治することである。これは預言者マホメットの時代、即ちイマーム（シーア派の最高指導者）の統治のもとで、神の法であるイスラム法が完全に施行されていた最良の時代の体制を意味している。

シーア派のイマーム（最高指導者）は、アリーの血統者だけに継承される超人間的な存在で、カリスマを認められる聖なる人格である。この「イマーム」は政権と教権を一身に兼ね備える建て前があり、聖なるイマームが王権（統治権）を持つことになっているのが、シーア派の特徴である。（正統派のスニー派にはない）

要するにイラン・イスラム革命の目指したものは、1200年前の（マホメットの時代）体制を現代のイランに樹立することである。それは大衆的民主主義と神の不謬性という保守主義の共存であり、進歩と復古の恐るべき共存ではないだろうか。

その戦闘性、革命性はイランに限定せず、周辺諸国にも革命政府の樹立を呼びかけていた。圧政と貧困の解消のために専制的支配を打破し、イスラム政府を樹立しなければならないと説いたのが、イラン革命であった。

（以上はホメイニ師の我が闘争宣言による）

この主唱は似たような政治状況にある周辺アラブ産油諸国に深刻な影響を与え、宗教的な戦闘性の革命の輸出は大きな脅威となった。

私が昨年2月に訪れたペルシア湾のクウェート、カタール、バーレン、アラブ首長国連邦、サウジアラビア東部地区には、シーア派の住民が多数居住していた。

これらのアラブ諸国は、曾てのイランと同様の専制政治を敷く王制（首長制）を今でも残し、その治安力や軍事力は極めて弱体であった。これらの国がイラン革命の輸出に戦々恐々としていたのは当然である。

フセイン・イラク大統領がアラブの大義をイ・イ戦争の開戦の理由としたのも、イラクが周辺諸国に代わってイラン革命の輸入を防止するという、大義名分があったからである。

1988年7月、8年余に及んだイ・イ戦争も、イラクのクウェート侵攻によってイランの主張通りに和解したが、1989年6月3日、一世を風靡したホメイニ師は世を去ったのである。

以上を以てイラン革命の項目を終わりたい。

コムから カシャーンへ

まさにイランの運命の開扉ともいふべきコムを訪れる機会を得たことは、活字で読んだ歴史や物事よりも意義が深く、老齢になった私でさえも興奮に燃えていた。

世は移り変わってホメイニ師が教鞭をとっていた神学校には、今ではアメリカ人のイスラム教信者が勉学のために来ており、この世は「色即是空」で、因と縁によって存在しているだけである。

コム郊外のレストランで昼食を終えた我々は水無川が流れる灰色の市街を離れ、約100km東南のカシャーンへとカビール砂漠の街道を驍進した。

そのとき突然、物凄い驟雨に見舞われ、一行を歓迎する兆しのように稲妻が走った。これこそ人生の吉凶や禍福が予測できない塞翁ケ馬の諺と同じく、春の砂漠の現象であった。

行き交う自動車はヘッドライトを照らしていたが、通り雨は暫くして晴れ上がって前方の空に七色の虹の橋が架った。すると今度は千波万波の砂嵐が大軍のように押し寄せ、視界は100mぐらいとなった。矢張り砂漠は生きていたのである。

突如として発生した砂嵐が、見る見るうちに大地を包んでしまう光景を目撃した者は、砂漠が如何ほど土地の住民の精神性に、強い影響を与えているか推察ができるだろう。（右は砂漠の中を走るカナート）

荒々しい中から再び静けさが戻ってきた青空の下に茫然と広がる砂漠の光景は、無限の可能性へ挑戦しているようで、その中に一条のカナートの盛り土が伸びていた。（カナートとは砂漠の中で水を得るために造った深い地下水路で、中国や中央アジアでも見られる）

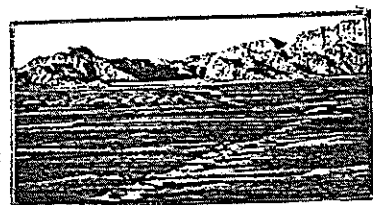
見渡す限りの砂漠は灼熱の太陽に燃える時もあれば、凍てつく雪に閉ざされる時もあるだろう。雪が降れば涸川は水をたたえ、雪が降ればそのあとで大地は鼓動し始め、ひそかに待ち侘びる草木の緑をよみがえさせるのであった。

自然は時には人間の前に立ちはだかり、時には限りない恩恵を与えている。このような季節の繰り返しを過ごして生きてきた人々は、さまざまな生活の知恵をたくわえてきたのである。

必要最低限の生活用品だけを荷にして砂漠を遊牧する人々は勿論のこと、定住して家を構える人々の生活も砂漠地では実に簡素である。そこから生まれた知恵の産物が絨毯や陶器であった。

旅行社から配られた「旅のしおり」を見ると、今日の目的地のカシャーンは有名な絨毯と陶器の町だと説明されていた。しかし強行軍の今次旅行では実際に見学する機会は得られなかった。

いつ頃からであろうか。砂漠の民は冬の極寒から身を防ぐために、家の敷物、天蓋、四周の壁となる絨毯を織り始めた。彼らが率いる羊から毛を紡ぎ、それを植物の葉や



根や果物で染めて織り上げたのである。

生活必需品の陶器もイスラム芸術として見過ごすことはできず、青や藍に幾何学模様を張りめぐらしたモスクは、洗練された陶芸の技法が利用されているのであった。

イランは全イスラム世界の美術工芸の宗家であった。ササン朝ペルシアの工芸は中国を経て日本に伝わり、わが国の正倉院御物にも多くその影響をとどめているほどである。

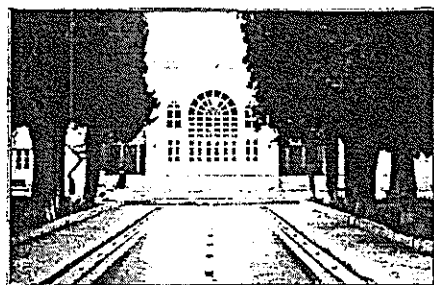
ササン朝を滅ぼしたアラブは、美術工芸などの文化面では全くの後進民族であったから、イスラム世界となった現代のイランも、文化ではペルシアの伝統を受け継いでいるのである。

コムを出発して約1時間10分、バスはカビール砂漠の西端に位置するカシャーンに着いた。一行はホテルに立ち寄らずに直ぐ郊外にある「フィン・ガーデン」（王の庭）の見学に訪れた。

空高く真っ直ぐに伸びた糸杉に囲まれた「王の庭園」は、砂漠の中の庭園とは想像もつかないほど、鬱蒼として茂っていた。

アッパース1世（4頁年表参照）が創建した広大な庭園には水路が縦横無尽に走り、清流が滔々として流れる光景は、砂漠でなくとも誰しも勿体ないと感じるのであった。

（右の写真は「王の庭」の正面の水路）



この溢れるように流れる水は、カシャーンの南部を東西に走るサーグロス山脈の支脈、カルカス山脈にあるケルクシュ山からの地下水が、湧き出ているのであった。

そのためカシャーンは人口40万に達する砂漠の町・オアシスとして発展し、街の周辺一帯は豊かな緑に染まっているのである。

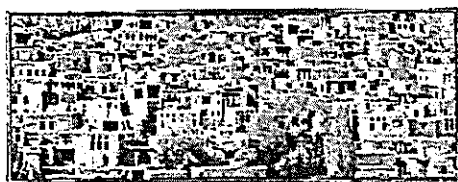
庭園内には300年前のサファウィ朝の建物、この地方の宰相であったアルミ・カビールが使用していたという浴場ばかりでなく、200年前のカジャール王朝時代の建物が立ち、最奥の建物には壁画まで残っていた。

広い庭園内を回って最後の見学となった博物館には、次に訪れる遺跡の出土品が展示されていた。日は没し薄暗くなって引き上げる時間となった時、ガイドから特別ニュースが流された。

それは入院中だったホメイニ師のご令息が、死去されたという悲しいニュースであった。日本でいえば皇族の死去に当たる重大ニュースで、神権国家のイラン国民の嘆き悲しみは想像に余りあるものがある。

「王の庭」を去ったバスは土で造った建物が並ぶ市街地を通り、町外れの葡萄畑の中にある先史時代の遺跡の見学に移動した。しかし皮肉なことに降雨が激しさを増し、足もとは泥んこの状態となって、遺跡の参観は明朝に延期されることになった。

完全に暗くなった雨の降りしきる中を走ったバスは道路端で停車した。車はホテルの玄関に横付けにできず、肅然と降る雨が頭上の木の葉



をたたく音を聞きながらロビーまで歩いた。

砂漠の中のホテルだからと覚悟はしていたが、今まで経験したことのない劣悪な設備で、風呂好きの日本人にはシャワーだけでは飽き足らず、蚊が出るのかペープまで用意されていた。（前頁下の写真はカシャーンの街の高台の景観）

旅心をやさしく包んで疲れを癒してくれる部屋に入り、「腹が減ったら飯を食い、眠くなったら寝るだけだ」といった禅語を思い出しながら、無心で身体を横たえた。

3月18日（土）晴

カシャーン～ナーイン～ヤズド

桎梏（シコク）の環境におかれた砂漠の街・カシャーンのアルミ・カビール・ホテルの朝は、鶏と烏の鳴き声に叩き起され6時に目を覚ました。

快晴の朝の光が大地を照らす中に麦畑が筋条の緑を作り、南に聳えるカルカス山脈は白皚々の雪をいただき、旅情をかきたてるような景観を呈していた。

（右上は白雪を頂くカルカス山脈の光景）

市街に視線を移すと、曲がりくねった狭い道路の両側に、特徴のある煉瓦造りの建物が見えていた。今まで体験してきたイランの旅では、初めてお目にかかる円屋根の住宅であった。

早速、好奇心にかられてホテルを飛び出し、小さな円屋根の内部を見たい一心で、家の人にジャポニだと言って見学を申し出た。

互いに低く折り重なるように建てられた家屋は、非常に厚い壁と最小限の開口部で作られ、人々は砂漠の極暑と極寒から身を守っていたのであった。

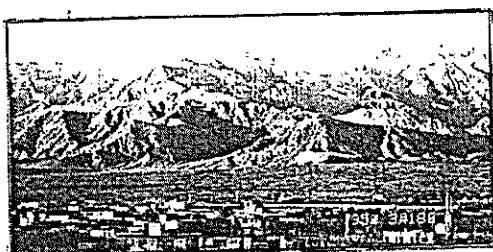
中央部の高くなった円屋根の部分は、家の中の一部に高い空間をつくり、大人たちでも自由に行動できる空間を設けたのである。（上は砂漠地帯独特の円屋根家屋）

朝食を終えた我々は昨夕見られなかった「テベ・シアルク」遺跡へと向かい、町外れの緑地帯に入った。晴れ上がった大地の、空の青と土色の二色しか見えない風土のなかに、土盛りしたような小高い丘が見えてきた。

この辺りは今から6000年前の遺跡であった。小高くなった丘は土を捨てたために出来たもので遺跡ではないが、全貌を観察するために全員が登攀した。

目に映るものは丘の土と果樹園に麦畑だけで何もなく、オアシスの街カジャール市街が朝日に照り出されていた。（上はテベ・シアルク遺跡の丘と果樹園）

テベ・シアルク遺跡は6000年前、中央アジアからきたアーリア人（3頁参照）



が、家屋の形を作って居住した最初の遺跡だとガイドハ説明した。約1000kmにわたるカビール砂漠の南の縁を走り、イラン高原からアフガニスタンに通じるこのルートの中で、水の豊富なこの地一帯は生命を維持する条件が整っていたのであろう。

遺跡を去って「アガ・ボゾール・マドレッセ」という名の175年前に建てられたモスクの見学となった。イスラム世界の観光はモスクに始まってモスクに終わり、一々明瞭に記憶することは困難である。このモスクでは上が大学で下がモスクと言うことだけが脳細胞に留まったが、我々が思う大学ではなく、小さな神学校に過ぎない。

カシャーンはアッパース朝時代に城壁が建設され、都市として発展してセルジューク朝以降は陶器を始め、美術、学芸の都としての名声が高くなった。サファウィ朝下では絨毯、絹織物の生産で有名になり、現在でも多くの絨毯を産出して織物業が盛んである。（4頁年代表参照）

カシャーンの街を一步離れると直ぐ砂の原っぱであった。茫々として広がる景観は無限の可能性への挑戦意識を掻き立てていたが、殆どの風景には優しさが無い死の世界ばかりで、これを殺風景と呼ぶのかも知れないと眺めていた。

寝不足からくる充血した双眼をこすりながら、忙しそうに眼球を動かし続け、無限の時間が空しく流れていくように感じていても、ひとりバスだけは一目散に目的地に向かって突っ走っていた。

車内には必ず何人かのおしゃべり好きのオバタリヤンがいるもので、今日もまた中味のない会話が騒いでいたが、他の一行の人たちは寡黙で他人に迷惑を掛けず、朴念として行き交うトラックを眺めて無聊を慰めていた。

瞳の焦点が遠くにぼやけてしまいそうな遠景は常に回転し、人為が及ばない大自然に対面していると、自然に快眠を楽しむように昏睡状態に引き込まれていった。

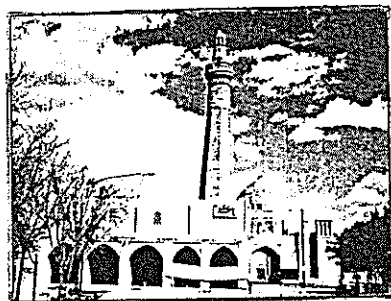
快を取ったように眼を覚ますと、大きな翼をもった鳥という意味のカルカス山脈が迫っていた。その街道の分岐点から右に進めばイスファハーンに行くが、我々の乗車したバスは直進してヤズド街道を疾走した。

変化の乏しい砂漠の旅は決して楽ではないと見詰めていると、ラクダ草の生えた砂地の中に、集落の接近を告げるように羊の群れが現れてきた。

ナーイン

カシャーンを出発してから約3時間を経過して、漸く街の中心に人工池のあるナーイン（人口約4万）に辿り着いた。旅行社のガイドブックに記載されていないナーインは、10世紀頃から存在する絨毯、香水、果実が有名な街であった。

このオアシスの町には芽吹きした街路樹が疎らに植えられ、舗装されていない街道を通して灰色の広場に下車した。一行は高さ25mのミナレットが立っているモスクに案内されたが、これは10世紀に創建されたもので、通称は金曜日のモスクと呼ばれていた。



このモスクはイラン最古のモスクの一つだと説明されたが、一見したところアラブ風の建築様式であった。中庭は三方が回廊で閉ざされ、残る一方は列柱で支えられた円天井となっていて、ここが礼拝する部屋であった。（前頁の写真は金曜日のモスク）

イスラムの安息日である金曜日には、コーランの説教を聴きに信者がやってくるから、金曜日のモスクと呼ばれている。金曜日のモスクはその町で一番大きくて、美しい由緒ある寺院である。しかしモスクには当然ながら正式な名称がある筈だが、ガイドも添乗員もその名を知らず、勉強不足も甚だしいと呆れるばかりであった。

一応の見学が終了すると、添乗員はモスクの前に停車しているバスの集合時間を、11時5分と指示して自由行動に移った。我が孫娘のような添乗員の指揮下に進んで入り、一行25名の掌握に協力する約半数の人たちは、時間を厳守してバスの座席に座って待機していた。

その時、添乗員が残余の人たちを引き連れてモスクから右の方に行く姿が見えた。しかし、30分を経過しても彼らはバスに戻らない。真面目に時間を厳守した人達の不満の声は、喧喧諤諤（ケンケンカカ）となつて車内は慄然（ゼン）としていた。

35分を過ぎて漸く添乗員たちは戻ってきた。誰かが大声をあげて添乗員を叱責した。当然である。彼らはササン朝ペルシア時代の城址の見学に行ったのである。

紀行文を綴ることが旅の目的でもある私はそれを知り、取り返しのつかない無念の余り、目前にいた我々に一言なぜ案内しなかったのかと、叱声を張り上げた。時間と人員を常に掌握しない引率者は失格だと、今後のこともあり追求した。

若い添乗員の育成の為にも注意することは遠慮すべきではない。後日の自己紹介の際、一行の者を前にして叱るのと怒るとの差異を説明した。叱るのは注意であり、怒るのは感情が入って何時までも恨みを根に持つことだと。

老人は人生経験も豊富で教育も受けており、世に慣れていて落ち着きもある。暑さも寒さも世の善悪もわきまえて交際の仕方も心得、愛情の条件を満たす術も知り尽くし、統率の要領も経験している。若者たちより一日の長がある老人の言を、添乗員は素直に受け取るべきである。

すっかり悄気（シヨゲ）でしまって不愉快な思いをさせられたが、「ならぬ堪忍するが堪忍」だと、それ以上は追責せず、バスはモスクを去って市内に移動した。

昼食は街道の横道にあった隊商宿のレストランで撮ることになった。その玄関の横の塀に、昨日死去したホメイニ師のご令息の死を悼む、黒枠の写真と弔旗が掲載されていた。（右は写真と弔旗）

彼は享年50才の未だ若い聖職者の一人で入院加療中だったと聞いたが、全国民あげて追悼する光景を眼にすると、異教徒の我々にはイランはホメイニ帝国の感があるのであった。



イスラム世界では聖職者はもちろん公人であろう。日本流に解釈すれば「公」は「ハ」と「ム」から成っている。「ハ」は去る或いはなくすという意味で、「ム」は私のことである。即ち公は私情を去ることで公職者の資格だと字句の解釈をしていた。

ヤズド (32頁地図参照)

乱世の英雄になり得ても治世の名帝に成り得なかった、幾多の歴史を思い浮かべながらナーインを離れ、再び砂漠の人に戻ってヤズドまでの150kmの道程を一目散に邁進した。

バスの中に射しこむ早春の太陽の光を浴びながら、自然の風景を鑑賞するというよりも、自分も自然の中に溶け込み、春を楽しんでいるような感じで黙然としていた。

沙砂漠が急に砂利砂漠に移り変わり、再び沙砂漠に変化する光景を繰り返す彼方に、昔の崩れかけた隊商宿が現れると、輝く陽光を反射する辺りの小さい草まで、温かい喜びを表現しているように見えていた。

時々、独特の円屋根の小さな部落が車窓に流れ、砂漠の中の子供が多く羊の群れを追う光景を眺めながら、たとえ家畜であっても、それを支配することは素晴らしいことだと注目していた。

ヤズドの手前40kmの地点で、調子が悪いのかバスは一旦停車してまた発進し、再び停車した。そこは町外れのパンク修理店の前で、見ると後車輪のダブルの一本が擦り減っていた。街道を走るトラックの数は想像以上に多く、パンク屋は商売繁盛で大忙しである。

パンクともなれば修理に小1時間はかかり、下車して背伸びしながらパンク屋を覗くと火花が散っていた。人生も火花のような瞬間に過ぎず、長い短いを争ったり、勝った負けたと騒いでみても何にもならないと、砂漠の中で見る花火は人生の教師のように見えていた。

ヤズドに接近したとみえて畑や植林した樹々の緑が眼に映り、オアシスの街らしく若葉の芽生えた街路樹が一直線に伸び、珍しく道路の両側に街灯までついていた。

外界から隔離されたカビール砂漠の苛酷な広がりの中で、14～15世紀が黄金時代であったヤズドは、古来からゾロアスター教の聖地として発展し、絨毯などの繊維産業によって栄えてきた。しかし18世紀前半にアフガン族の侵入で繁栄は失われた。

マルコ・ポーロの「東方見聞録」には、「由緒深い立派な都市で、この地はヤスディと呼ばれる絹布が多量に製造される」と記されており、我々は先ずゾロアスター教の信仰の殿堂である「拝火神殿」を訪れることになった。

ところが時刻が午後5時を過ぎて閉門となっていた。しかしガイドの交渉によって拝観が許され、幸いにも白い帽子に筒袖の白衣、白いズボンを着用した祭司の説明を受けながら神殿に入った。

幅10㍎、奥行5㍎ほどの祈りの場の神殿は静まりかえり、その奥の鉄格子で遮られた内陣には銅製の火炉が据えられ、聖火が静かに揺らめいていた。聖火は薪(楡こ)を火に投じて絶やすことがないのである。

(右の写真は拝火神殿ま燃える聖火の火焰)

お祈りのときは祭司が永遠の聖火の傍らに立って聖句を朗読し、信者は鉄格子ま前にひざまずき、祈りは火焰



をとおして主神に捧げるのである。仏教の仏壇の前と違わないような雰囲気だ。

この拝火神殿は1956年の建築であったが、聖火は1000年前にヤズドに移った以前から燃え続け、紀元前1200年前から現在まで消えたことがないと祭司は説明していた。

祈りの場にはゾロアスター教の絵や、ロシアの神殿の写真などが掲げられていたが、残念ながらカメラのフィルムの巻き戻しが出来なくなり、失敗してしまった。奥歯がうずくような落胆である。

拝火神殿を去った一行はヤズドの町の金曜日のモスクを参観することになった。このモスクは14世紀の創建でイラン屈指の建築物だと言われている。すらりと天に向かって伸びる2本の尖塔は、俗にイスラムのエッフェル塔と呼ばれ、円屋根は黄色地のモザイクで装飾されていた。

大きなモスクの近くには隣接して神学校があり、将来の聖職者を養成していた。太陽は西山に傾いて蒼茫とした空間が辺りを包み、学校の見学を見送ってホテルへと急いだのである。

憩いの場となったサファイエ・ホテルはヤズドの街の西端にあり、オアシスの松林に囲まれた閑静なモーターホテルであった。ここもまたバスは玄関に横付けになれず、長い暗い道を歩いて3部屋つづきの平屋で一戸建ての一室に着いた。

旅装を解いて夕食の食堂へと歩きながら眺めた夜空の星は美しく、松の枝にひびく松籟は風趣を添え、暗い闇の彼方に街燈の灯が寂しく見えていた。

食事が終わってモーターの特殊な良さを味わいながら部屋に戻り、7時のニュースを見たいとテレビをつけると、熱狂的な大群衆が画面一杯に映っていた。

ホメイニ師のご令息の死を悼む狂喜じみたテヘラン市内の光景で、筆舌で表現できないほど想像に絶するものであった。

(右はホメイニ師のご令息の死を悼むテヘラン市内の大群衆、テレビ画面を撮影)

黙然と沈みきったわが国の追悼の姿とは全く異なり、悲しみを行動で表現して哮(ワ)き立て、集団は狂信的で、暗雲が太陽を覆ったような感じを受けるのであった。

又、悲しみにふける映像は一晚中放映され、イランの熱血的な宗教の背景に驚愕を覚えながら、床に就いたのである。



ペルシア絨毯の模様

「ゾロアスター教」

これはゾロアスターZoroaster（人名）がイラン北東部で創唱した宗教である。

その主神「アフラ・マズダ」の名を採って「マズダ教」、又はその聖火を護持する儀式の特質によって「拝火教」とも呼ばれ、中国では南北朝時代に伝わって「祇教」（ケキョウ）の名で知られている。（ゾロアスター教は世界最初の宗教）

ゾロアスターの活躍時期については、前2千年紀中頃から前7～前6世紀にわたる諸説があり、定説が得られていないようだ。そしてアラブによるイラン征服（7世紀前半）までイランの国教の地位を占め、その聖典は「アベスター」と呼ばれる。

ゾロアスター教は歴史的に以下の3段階に分かれる。① アベスター中に見られる創唱者自身の教説、② アベスターの残余の部分に出るインド・イラン共通時代の神々の復活した段階、③ 中世ペルシア語文献に記述されている教義。

「第①段階の教義」は、ゾロアスターによれば、世界は相反する根源的な2霊である「スパンタ・マンユ」（聖霊）と「アンラ・マンユ」（破壊霊）の闘争の中にあり、各人は自由意志でその両霊のいずれかを選択し、「善」と「悪」、「光明」と「暗黒」の戦いに身を投じるとされ、終末的な色彩を持っている。（悪神は破れて暗黒の中に追放される）

この戦いに於いて最高神「アフラ・マズダ」と信徒を助けるものは、創唱者の死後、アムシャ・スパンタ（聖なる不死者）と呼ばれることになり、それには6神格があると言われている。

この6神格は物質世界にそれぞれ、火、水、大地などの特定の庇護物を有している。信徒は特にこの火、水、大地の3要素を汚すことを避けなければならないのであった。

「拝火教」（善神の象徴の火を崇拜）の言葉が示すように独特の祭祀形式や、鳥葬・風葬のための「沈黙の塔」を発達させ、3要素を汚さない方式が採られたのである。

ゾロアスターの教説は、当時の多神教を「アフラ・マズダ」を最高神とする、倫理的一神教に統合しようとするものであった。

「第②段階」ではゾロアスターの死後、インド・イラン共通時代の神々が、ゾロアスター教の神殿の中に復活している。

「第③段階」のササン朝期の二元論的教義では、「アフラ・マズダ」は「スパンタ・マンユ」（聖霊）と同一視され、直接「アンラ・マンユ」（破壊霊）と対立することになった。

この結果、両者をともに超越する根本原理として、ズルバーン（時）を定立する、いわゆるズルバーン教が勢力を得たのであった。

シーア派の第4代イマームのアリーは、ササン朝最後の王ヤズダギルドの娘から生まれたとする口承が流布し、多くのゾロアスター教徒がシーア派イスラムを受容する原因となり、イランのイスラム化がすすんだ。

他方、10世紀以降、ゾロアスター教徒のインドへの移住が行われた結果、ボンベイを中心にインドに、約8万人のゾロアスター教徒がいると言われている。

イランにはヤズド、ケルマンを中心に約2万5千人、さらにパキスタンに約5千人の教徒が数えられる。私もカラチ近郊で「沈黙の塔」を見学したことがある。

3月19日

(日) 晴

ヤズド～ケルマン

夜明け間近の薄明は山肌を浮かび上げらせ、鳥の囀(サエ)りが今日の好天を告げていた。

昨夜のホメイニ師令息の死を悼む映像は、私に早かれ晩かれ生死いづれかに、運命は決まるのだと思わせたが、旅は夜明けともなると、人の心を澄み切った気で一杯にさせるのであった。

8時に出発したバスは、ヤズドの最大のポイントである「沈黙の塔」へと進んだ。ホテルを一步出た所の砂漠の直線道路を疾走すると、すぐ突兀とした岩山の連山に突き当たり、幽明を異にするような風景が展開してきた。

正面には写真で見覚えのある沈黙の塔の山が、砂の大地から天に向かって泰然として聳え、その右側手前のやや低い丘の上にも、円形の要塞のような煉瓦造りの沈黙の塔が見えていた。(上の写真の上段は古い沈黙の塔、下段は新しい沈黙の塔)

「沈黙の塔」は、かつては死者の丘・鳥葬の丘であった。ゾロアスター教では火、水、大地(土)を清浄なものとしており、大地を人間の屍でけがすことを忌み嫌ったのである。

ゾロアスター教の信者たちは、白布に包まれた死者を担いで沈黙の塔の丘に登り、鳥葬にすることを伝統としてきた。しかし現在は法令によつて禁じられている。

死者の霊のほかは何もない、静かに沈黙したような高い処に葬るから、沈黙の塔と呼んだのであろうか。鳥葬はチベットでも行われており、風葬は四川省やニューギニアでは実際に見たことがある。

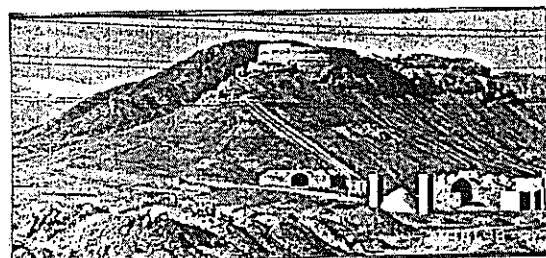
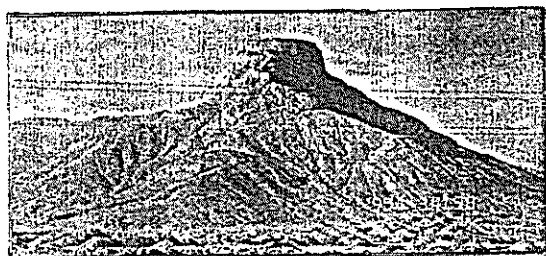
一段と高い峻険な山道の古い沈黙の塔の登攀は容易でなく、我々は右側に見える低い沈黙の塔(新しい方)に挑戦することになった。私も杖を頼りに鳥葬の懐古趣味にかられ、臍下丹田に力を入れて登った。

気宇壮大な丘から悲しい屍臭が伝わってくるような錯覚を覚え、息苦しく打つ動悸は魂をゆさぶるようで、今朝見上げた青空の晴れやかな気分は吹っ飛んでしまった。

漸く幽鬼のさまよう沈黙の塔の丘に辿り着き、涼気に蘇生の嘆息を吐き出して安堵の深呼吸を繰り返した。丘から見渡す景観は荒涼とした寂寥感がみなぎり、自ずから鬼哭啾啾(キョクシュウ)といった感じが迫ってきた。

この沈黙の塔は今から35年前まで使用され、鳥葬にされた人骨は穴の中に埋められたと説明された。この霊地に登って昨日の拝火神殿の聖火と重ね合わせると、深々鞠躬(シツシキキョウ 深いおじぎ)して純一無雑(偽りがなく邪念がない)の心境になっていくのであった。

ゾロアスター教では、死後その死者は神の審判によって天国と地獄に区別され、前



世に善を積んだ者は天国に行き、悪を重ねた者は地獄に行くと言っている。仏教の地獄・極楽の思想はゾロアスター教の影響を受けたものかも知れない。

沈黙の塔を下り、四方から襲いかかるような乾燥した砂漠街道を「ケルマン」に向かって疾風のように飛ばした。円屋根の土の家屋や古代のキャラバンサライ（隊商宿）の残骸、羊の放牧の光景などはカビール砂漠の常景で、時々、目に刺激を与えたのは自動車事故の惨事であった。

「訊問は智の本、思慮は智の通」と言われるように、知識を広めるためにガイドに質問して無聊をなぐさめていた。

イランの国民感情として最も嫌いな国はと聞くと、当然のように米国、イスラエル、南アフリカ、イラクだと応えた。しかし第1次世界対戦以来、イランを強制的に分割占領、搾取した英・ソを、怨まないのは理解し難いことであった。

「無理を通せば道理が引っ込む」という諺のように、老獪な英・ソの行動は絶対的に許されず、イランの歴史教育に疑問を抱くのである。

昼食は現大統領ラフサンジャン氏の出身地である、「ラフサンジャン」のホテルで撮ることになった。不毛の砂漠の真ん中でありながら出された白身の魚は美味しく、テヘラン以来ほどほどの満足感を味った。

又、この街はピスタチオの産地として有名らしく、ガイドのアリー氏は一行を引き連れて案内した。トルコでもピスタチオは店頭に並んでいたが、シルクロードの沿線には何処でも産地らしく、独り買い物は女性本能をくすぐっていた。

満腹を抱えて再び悠久の世界に入って突っ走っていると、宇宙と我との区別さえ忘れさすような忘我の境地に陥り、自然に白河夜船を漕いでいた。

3月のカビール砂漠の気象は午前中は晴天、午後は曇りがちのようで、今日の午後もし砂嵐に見舞われ驟雨も沛然と降ってきた。しかし、一日として欠かせない太陽と水は草木を温かく育てており、砂漠は自然の偉大さを感じさせていた。

右手に迫ってきた連山の頂きは白雪に覆われ、昔も今も変わらないラクダ草の生えた砂漠を呆然と眺めていると、突然ケルマンのセメント工場が見えてきた。日本人にとっては貧弱な工場に見えてもイランでは第2位の工場らしく、そこを通過して市内に入ってしまった。

ケルマン

カビール砂漠の南にある同名州の州都であるケルマンは人口約40万（郊外を含め200万）、キルマーンとも呼ばれ、古代ではカルマニアとも称していた。標高1750mの高原にあって冬は厳寒となり、市内の各家屋には煙突が目立っていた。

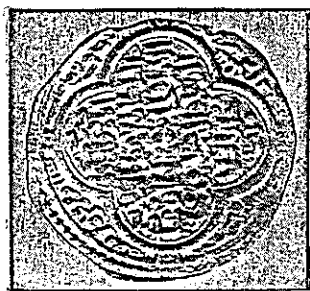
小麦を中心とする農業や絨毯の生産が盛んで、銅の精錬工場が建設中にイラン革命に遭遇した。それが先刻見たセメント工場になったのかも知れない。

歴史的には7世紀にアラブの手中に落ち、10世紀以降はブワイフ朝、セルジューク朝、モンゴル、ティムール朝、アフガンなど、諸民族が侵入してその支配を受けたのであった。（4頁年表参照）

ケルマンの市内観光は先ず金曜日のモスクから始まった。広い大通りに面した門前町は殷賑をきわめ、珍しく金魚売りの露天まで出ていた。後日判明したことだが、3月21日の彼岸はイスラム世界の正月で、金魚売りもそのためである。

モスクの門をくぐるとシーア派らしいイラン建築様式の池があり、その向こう側に14世紀に建てられた豪華なモスクが燦然と輝いていた。タイルはサファビー朝、カジャール朝時代の美しい図柄であったが、このモスクは残念ながら外国人の参観は許されなかった。

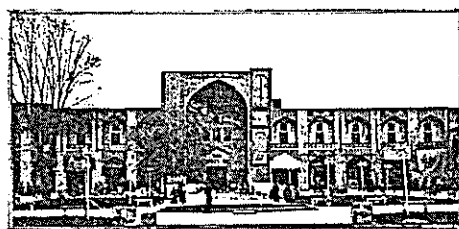
礼拝堂の入り口の右手に置かれた箱の中に、彫刻された小さな石が山のように積まれていた。それを物珍しそうに見詰めていると、モスクの人であろうか、五つほど私に進呈してくれた。



この簡単な彫刻をした素焼きの陶器は、礼拝の時に跪いてメッカにひれ伏す際、この小さな陶器を額に当ててアラーの神に祈る道具であった。

(右上の写真は礼拝のとき、下に置いて額を当て、お祈りする時の陶製の石)

金曜日のモスクから再びバスに乗車し、40年前に建てたバザールの正面で下車した。正月を迎える準備であろうか、狭い通路に全市民が押し掛けたような混雑ぶりで、足の踏み場もないバザールの中を迷子にならないように、懸命にガイドの後を追っていた。



(右の写真はバザールの正面)

砂漠の住民の千万無量の生活必需品が主な商品として店頭に並び、数軒の貴金属品店だけが近代的に見えていた。しかし我々観光客が触手を伸ばすような物は全くなく、バザールは雑踏ぶりの感触に触れただけで、人ごみは我々の神経を苛立たせ辟易していた。

群衆に押されながら汚い空気のバザール内を歩いていると、親子連れの父親が拝むようにして私の手を引いて放さない。再三振り切っても強引に連れて行った。それは写真を撮ってくれという行動である。

彼の望みに応えて写してやったが、アドレスを書いて送ってくれと依頼するわけでもなく、写される瞬間の快感に満足するだけのようであった。

バザールに接続しているイランで最も美しい公共浴場に入った。この浴場は一度は廃棄されたが今は修理され、公衆浴場博物館として観光の目玉となっている。

内部には大小さまざまな浴場が設けられ、それぞれの浴場には蝸人形から昔の民俗衣装、その他装飾品が飾られている。(右はマッサージの蝸人形)



公衆浴場は一般庶民の慰安の場として発達し、熱い風呂、水風呂、蒸し風呂、そしてマッサージを楽しみながら、友人同士が裸のつきあいで語り合い、何時間も過ごすのが慣わしだったのである。

公衆浴場の一隅に設けられていたチャイハネ(紅茶を飲むところ)に入り休憩した。

イランでは市内や街道の至る所にチャイハネがあり、日本のお茶を飲む習慣と同じで紅茶が愛用されている。

中国戦線に従軍していた50数年前の、支那の共同浴場を懐かしく思い出すのであった。

風呂に入ってアンマをとり、散髪して支那料理を食べ、最大のサービスは支那クーニャンだったが、シルクロードの沿道には何処にでも、旅人を慰める施設が設けられていたのである。



チャイハネでは初めて水タバコを喫ってみた。しかし要領が悪いのか煙になって出てこない。このとき「人とタバコの良し悪しは煙になって始めて判る」、という名言が脳裏に浮かんで来た。即ち、世に言う人生の達人は、決して目先の欲や現象に動じないのである。（上の左の写真は水タバコを吸う私、右は水タバコを吸う蠟人形）

公共浴場やチャイハネで砂漠の旅の情緒を味わい、そこから廃墟の家屋が多い町並を通過し、今日の宿場であるツーリスト・イン・ホテルに到着して、重なる旅の疲労を癒すことになった。

今夜もまた昨夜と同様、テレビ画面はホメイニ師令息の死を悼む、「不禁悲涙盈臉」（盈=イ）というか、臉に悲涙が一杯で押さえることが出来ない映像の連続であった。

これから花を咲かせようとしていた人物を慕って号泣慟哭する光景は、異宗教の我々まで涙に顔をゆがめ、感懐胸に迫るものを感じるのであった。

偉大な父の威光だけでなく、息子の彼も十目の視るところ、十手の指すところ、多くの人が一致して聖者と認めているのは間違いないようで、イスラム教シーア派では殉教によって、宗教が成立しているのであった。

ここでバザールとモスクの関係について考えてみたい。

「バザールとモスクの関係」

一般に古い市街はバザールを中心にして居住区が周囲に広がり、バザールはそれ自体が一つの町を形成している。建物は常に密集して建ち、街路は屋根で覆われ、冬の寒さや夏の暑さを避けている。

今世紀の初めには人口の3分の1は、バザールに関係の深い遊牧民であったと言われているが、現在では遊牧民は減少を続け、潜在的な政治力も減っている。

これは街の中心をなすバザールも悲劇的な影響を被った。歴史的にはバザールは金融、商業の中心であったが、今や新しい金融機関（銀行）、企業、会社の発生によって弱体化してしまった。

バザールは伝統的な商工街で同業者が軒を連ね、組合組織の団結が強く、そのためボスや親方は大きな力を持ち、自治的な同業団体を代表してきた。そしてバザールは街の主要なモスクと結びつき、商人たちは信仰に熱心であった。

宗教的に熱心なバザールの商人・職人は、伝統的に自己の所得の一部を宗教税としてモスクに上納し、国家に納める税金と二重に支払っている。このためバザールとモスクの関係は緊密であった。

モスクは貧民の味方であり、モスクに上納された金の一部は常に貧民救済の目的に使用された。その点、モスクは組織に締めつけられた縦型の宗教組織とは違っている。

イラン革命の成功は、国家の権力に不当な取締りを受けたバザール商人が、宗教指導者にその不当な扱いを訴え、宗教指導者はこれを取り上げて反国王運動に立ち上がったからである。

このようにバザールの社会は宗教的な雰囲気の内にもち、又それだけ反権威的であると言えるだろう。

3月20日

(月) 晴

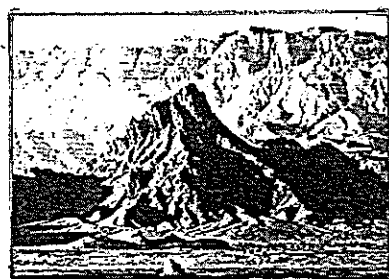
ケルマン～バム

(2頁地図参照)

夜が明けたケルマン盆地の山は美しく朝の陽を浴びて映え、空気も澄み切って小鳥の声もはずんでいた。

今日は200km東方のバムの日帰り観光のため8時に出発した。煙突が立つ円屋根の建ち並ぶケルマンの街は碁盤の目のように整理され、弔旗がはためく街路から盆地の中を貫く直線道路を東進した。

山を越え谷を渡り、敵を越えて迫ってくる感じの連山は白雪をいただき、その手前に突兀として独立した山が見えてきた。



この山は遠い昔から遊牧民が、ケルマンのシンボルとして眺めてきた山ではないだろうか、と我々の目を釘付けにしていた。(上はケルマン郊外の突兀とした独立山)

広大な砂漠と高い山々の荒涼とした空間を、住民は巧みな灌漑技術を使って植物の育成に成功した結果、果樹園が延々と広がっていた。

ガイドのアーリー氏の所属するイランの観光社は、時々バスの中でチャイ(紅茶)のサービスをしてくれたが、今日は珍しく果物のジュースのサービスであった。恐らく果樹の産地のケルマンの宣伝であろう。

山頂の白雪を背景にして麦工場のサイロが見えてきた。刻一刻と千変万化する四周の景観は俗塵を離れた気が充満し、羊の大群は2000年来のシルクロードの姿を再現していた。

「マーハン」

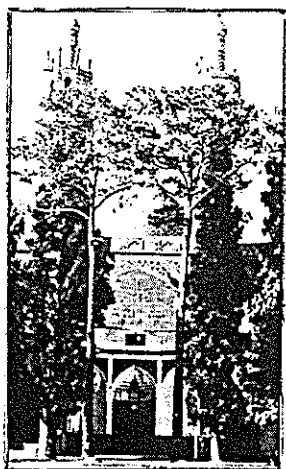
後部座席のオバタリアンが絶え間なく喋りまくる喧噪に苛立っていると、両側から迫っていた連峰が忽然として開けてきた。ここがマーハン(32頁地図参照)という集落で、「シャネマトラバリ廟」の参観となった。

この廟は17世紀の初頭、サファウィ朝のシャー・アッパースが、聖職者の組織の基礎を固めた「シャネマトラバリー」(1439年没)を祀ったのが始まりで、陶器を張り付けた円屋根と2本のミナレットは荘厳を極めていた。

廟の前の方はカジャール朝時代、奥の方はサファウ^ィ朝時代に造られと言われている。門を入ると黄金色の大きな喜捨のための入れ物が置かれ、その前にチャドルを着た黒装束のイラン婦人が屯していた。

（喜捨とは、進んで金銭や物品をモスクや困っている人に施すことで、コーランでは義務づけているイスラムの戒律）

金銀は美しいけれども黒装束の美も格別だと見惚れながら、奥へ進んだ処にモスクと神学校があり、学校の2階は学生の寄宿舍となっていた。更に奥へ進むと、そこに聖職者シャーネマトラバリーの墓が安置され、その後方にカジャール時代の神学校の跡が見えていた。（右は廟の正面の景観）



神秘的な感じの霊廟の参観が終わって乗車したバスは9時に出発した。テヘランからコムを経て南進してきた1000kmの縦貫道路は、所々に点在するオアシス以外は外界と隔絶した不毛の地で、横道や分疑点もないカビール砂漠からルート砂漠へと受け継がれていった（2頁地位参照）。バスは苛酷な広がり味の無味乾燥した中を更に東へと驀進を続けた。

円屋根の小さな集落を中心にした風光の中に、時折、崩壊した古い隊商宿の残骸を見つめていると、一段と周囲の連山が迫ってくる不気味な灰色の世界は、死の世界に通じるようであった。数千年前のアーリア人がイランに移動してきた状況を、想起させるに十分な懐古の地である。

人為が及ばぬ自然と対面しながら110kmの猛スピードで走る前方に、ナツメヤシの茂みが見えてきた。寒いと予想してきた標高1700mの高原にナツメヤシとは驚きで、昨春訪れたアラビア半島のナツメヤシを思い出していた。

尻無川の河床の彼方に聳えるテレビ塔は、「バム」に接近してきた証拠だと欣喜雀躍していると、街路のナツメヤシの並木は花盛りで、胸騒ぎしながら鵜の目鷹の目で凝視していた。

廃墟のアルゲ・バムの遺跡（2頁地図参照）

ルート砂漠の南端の果てに來たという感じのするバム一帯は、沈黙の泥の世界と形容したい様相を呈し、街道の左手に灰色の城塞の厚い城壁が見えてきた。これが約150年余前に長い歴史を閉じた城塞都市「バム」の廃墟の姿であった。

アフガニスタンやパキスタンとの国境に近い辺境のため、古来から度重なる異民族の侵入を受けて疲弊していたが、1722年頃、サファウ^ィ朝を倒したアフガン軍がイスファハーンを目指して進撃する途中、途上にあるバムを襲撃し、住民は離散して無人の死の街と化したようである。

不毛の砂漠では生活必需品から軍需物資に至るまで補給は困難で、孤立無援の地形は長期間の戦闘継続を望めず、城塞都市を守備することは至難の業である。バムを放棄した原因は数多いと思われるが、ボスを始め住民が苛酷な自然条件に嫌気を指した

のが第一で、それに戦争の被害が輪を掛けたのではないだろうか。

アルゲ・バム城塞の「アルゲ」は「砦」という意味で、バムは2000年近い前から砦を構えていたと伝えられている。辺境の防備のためだろうが、ペルセポリスのような詳しい歴史は判っていないようである。

正面約3 km、奥行約2 km、面積6 km²の廃墟となった城塞都市は、ササン朝ペルシア(226~651)が創建したもので、無人の死の街と化しながら今に残されていることは、貴重な存在価値がある。

城塞の前の広場で下車した一行は厚い壁の城門を通り、先ず城門の上に登って全貌を眺めた。正面の奥の小高い城廓が王城の跡で、その下の少々低いところが役所や軍隊と家族の居住地、それ以外の低いところは一般人の居住区となっていた。

(上の写真は死の街と化したバム城塞都市の王城、役所、住民居住区的全貌)

城門の上から下りた我々はガイドに連れられ、人気の全く絶えた廃墟の中を歩いた。城内は殆ど壊れて崩れ落ちた干乾煉瓦が道路をふさぎ、亡霊の街は日中でも幻覚に捕らわれない方が不思議なくらいであった。

観光客のために広大な街の中で中央の通りだけが整備され、モスクやバザールはそれらしき姿を留めていたが、一人では薄気味悪くて歩けないような恐怖を感じるほどであった。

真上に昇った強烈な太陽の光を浴びながら進むと、自然に我が青春時代に戦った支那戦線が重ね合わせたように思い出された。城壁攻撃から城内掃討戦に移り、敵中に身をおいて戦った一喜一憂の夢の跡のような感じである。

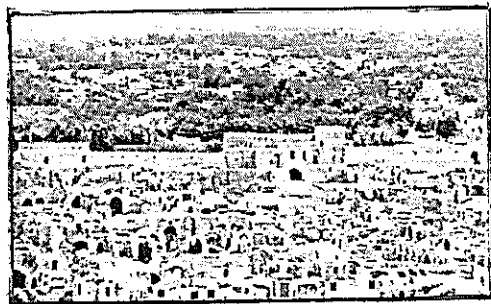
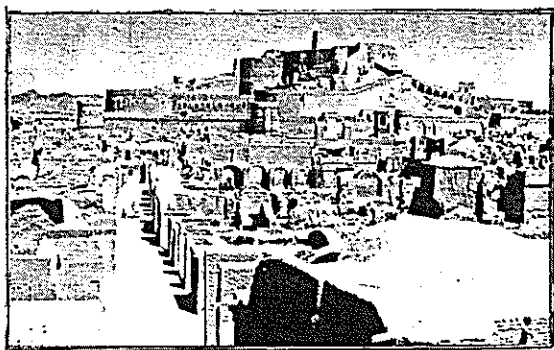
アルゲ・バムの中は階段、迂回路、地下道が迷路のようになっていた。犬の子一匹見えないこの城も往時には11万5000人もの人が住んでいたが、今ではラマダン(断食の月)の時期だけ、昔を偲んで人が集まってくるらしい。

曲がりくねった道を突き当たって王城(王宮)の急坂を登った。そこには兵舎や馬小屋、井戸、倉庫などがあって金城湯池の面影を残し、危機に人生の意気を感じたペルシア兵が偲ばれた。

城塞の要である王城に挑戦するように石段を登った。心身の疲労は可級数的に増し、幾度となく休まなければ体力が続かない。そこで涼気に蘇生の嘆息を吐き出して上を見上げていた。

悩悶苦悶しながら凹凸の激しい王城の頂点を極めると、アゲル・バムは灰色の海の上に浮かぶように見えていた。それは城塞を取り巻くナツメヤシの緑が、魔術のように浮かび上がらせているからであった。(上の写真は城を囲むナツメヤシの林と城内)

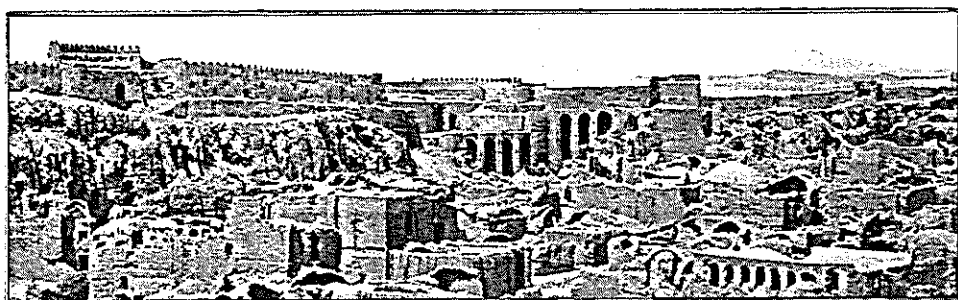
城壁の裏側には広い川床に帯のような清流が流れ、この涼しそうな景観を展望する最高の場所に、四つの王の部屋が設けられていた。



夏期には50度にも上昇する砂の大地で、夜の来るのを待ち侘びていた王たちは、空一面にきらめく星群を眺めて涼をとっていたのであろう。しかし硝煙弾雨の兵荒馬乱の戦いとなつた時の、孤立無援の王の心境が察しられるのであった。

王城の上に立った私の脳裏に浮かんだのは、武将の三勝という言葉であった。我に勝ち味方に勝ち敵に勝つことだが、大将ひとりで戦うことはできず、常に不安の影が付きまとして身を寸断に切られる思いがするものだ。

危険
に直面
する人
生を選
び、家
を忘れ
親を忘
れ我が



身を忘れ、破れ靴を引きずり、或いは靴の代わりにボロ布を巻きつけ、足を引きずって戦った私には、城塞は胸に波を打たせる特別な感動を与えたのである。

(上の写真は34ヶ所の見張り台と、銃眼をもつ城壁と廃屋のパノラマ)

見学の時間が終了し王城を去って来た道を引き返した。何時かは城塞も砂漠の中に消化され、崩れ落ちる日が来るだろうと思いながらバスに乗車した。

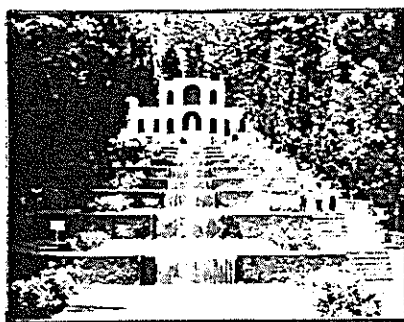
ナツメヤシに囲まれた中に建っていた、干乾煉瓦に漆喰を塗ったレストランで昼食となった。ここで印象に残ったのはナツメヤシの実で、午後2時に発ってケルマン街道をまっしぐらに快走して北上した。

「シャーザーデ・ガーデン」(王の庭)

疲れ果てた身をバスの座席にかけると、陽だまりに安逸をむさぼるように睡魔の虜になってしまった。そして安眠を妨げるようにバスが停車したところは、「王の庭」と言われる夏の離宮であった。

マーハンにあるこの庭園は、18世紀・カジャール朝の王子であったザーデのガーデンとして造られた。高く伸びた糸杉の樹間に桜や梅、りんごの木が美しい花をつけ、緑と樹花の咲き誇る五彩の世界は砂漠の中の別天地であった。

朝鮮カラスの鳴き声が樹間に飮(コタ)する中に、階段状になった水路を濃紺の水が滔々として流れ、世を避けて住む人の楽園の感じが充満していた。



(右は噴水と滝のように流れる王の庭の階段)

白雪をいただく山に囲まれたマーハンには水が豊富で、羊の群れも木の実を食べるように草を食んでいたが、アルゲ・バムの廃墟と対照的に、心のゆとりが感じられるのであった。

しかし、心のゆとりは身を置く環境もさることながら、先ずもって心の持ち方で決まるのではないかと思いながら、最も高い所の奥の宮殿へと足を運んだ。

奥の宮殿はチャイハネ（喫茶）となっていて、壁にかかった昔の草薺きの農村の風景画や、キャラバン隊を描いた絵画を眺め、思うままに自由に飛び回る小鳥の姿を気にしながら、紅茶をすすって一時を過ごしていた。

小鳥は枝の茂った安全なところに集まってくるようで、古今東西を問わず、徳を積みめば人々は徳を慕って集まってくるという、深遠な計画で王子は造ったのであろうか。

薄暗くなった午後6時に「王子の庭」を発った。イスラム社会では彼岸の日が正月ということで、ケルマンの街にはイルミネーションが飾られ、ホテルも正月を迎える家族連れで賑わっていた。

夕食が終わって夜が深々とふけていくと、イランでは初めてコーランの響きを耳にした。砂漠の中で聞くコーランの声は寂しさと安らぎを感じさせ、自分と自然が一つに溶け合っているような錯覚を覚え、今日も無事に送ることが出来たと感謝しながら床についた。

3月21日 (火) 雨 ケルマン～シラーズ (下の地図参照)

今日の天候が気になって目を覚ますと直ぐカーテンを開けた。まだ暗さが残る回りは漠として煙霧に包まれ、微かに空に浮かんだ稜線が視えるだけであった。

ロビーに出るとガイドのアリー氏は「ハッピー・ニュー・イヤ」と丁寧に挨拶してきた。年に2回も新年を迎えることは私にとって有難いことなのかと、微妙に思案させられるのであった。

本日の行程はバーレズ山脈とザーグロス山脈を踏破して、シラーズまでの550kmの長距離コースであった。7時に連泊したホテルを出発し、昏々然としているケルマン市街に別れを告げ、バスは未知の世界へとスピードを上げて突っ走った。

イスラム世界の新年ということで、街道を走行する自動車の数は閑散としていた。3000名級の山越えも道路は開けた平坦で、円屋根の小集落も点在して高い山脈を通過しているとは感じられない。

ラクダ草の生えた砂漠の高山の土壌は鉄分が多い性か赤く染まり、その中に生命力の旺盛な小麦と白樺の木が我々の目を慰めていた。小降りとなっていた空模様はバーレズ山脈の峠を越した10時頃から、再び大粒となってきた。

無線の塔が立っている平坦な稜線に差ししかかった。そこには白い樹花が殺伐とした景観を彩るように花をつけ、放牧された羊の群れが近づくと、バスはオアシスとなっている小さな部落で停車した。(10:30)

ここはSIRJANという山間の集落で、トイレ休憩のため小休止となった。森の中には小さな遊園地が設けられ、チャドルを被った母親たちが子供を遊ばせていた。



山間僻地の正月を祝う一家団欒のようで、チャイを入れたポットが並んでいた。

イスラム世界では見知らぬ人を厚遇せよという掟があり、若い母親たちは満面笑みを浮かべて私にチャイのサービスをしてくれ、顔に冷雨を浴びながらご馳走になった。

(前頁の下の写真はチャイのサービスをしてくれた若い母親たち)

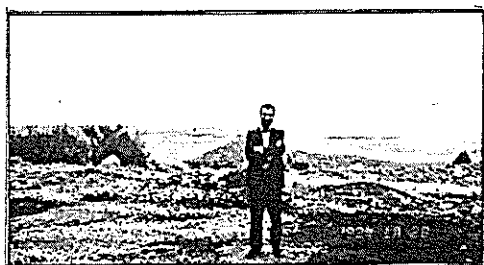
そのお礼というという意味ではないが、思い出の一齣(コマ)としてシャッターを切り、再び人影のない辺境の街道を走行した。そこには道路と平行して一本の鉄道線路が走り、地図を開いて確認するとヤズドとペルシア湾を結ぶ鉄路であった。

人口希薄な地帯を通過する鉄道は恐らく貨物専用鉄道だと眺めていると、右手前方に湖水が浮かんでいるように現れた。無聊を紛らわすような天然の造形はネイリーズ湖で、バスは見え隠れする湖畔の千変万化の景観を楽しみながら走行を続けた。

雨上がりの稜線が雲間に顔を出し、冷たく澄んだ大気が霧となって谷を覆い、突兀として突き出た断崖の下を走る街道から眺めるネイリーズ湖の景観は、浩然の気を養うのには最適であった。

停車したバスを降りてネイリーズ湖を背景にしたアリー氏の記念写真を撮ると、彼は私を横に長く伸びた奇麗な断層を背景にしてシャッターを切り、イスラムの正月の記念写真としたのであった。

(右はネイリーズ湖を背景にアリー氏)



茫然と煙る湖上から吹いてくる風は小さな波を立て、葉のない湖畔の木の枝は岸辺に揺れていた。この光景を後にしてバスは再び行雲流水のように地形に順応した街道を走り先を急いだ。

昼食は人影の少ない田舎町・ネイリーズ部落のレストランで撮ることになった。食事はご飯と少々のカレーに玉葱の粗末なもので、このようなことを予想して持参してきた「フリカケ」を周囲の人たちに配り、何とか腹ごしらえをしたのである。

食卓の前の席には東外大生のスペイン語専攻の二人の娘が着席していた。彼女等は耳にピアスを吊していたが、田舎に住む私にとっては初めて見る姿である。私の臨席の千葉県高校教師OBの式田氏は、今では女子高校生でもピアスを吊す穴を開けていると話したが、実際、私には信じられないことであった。

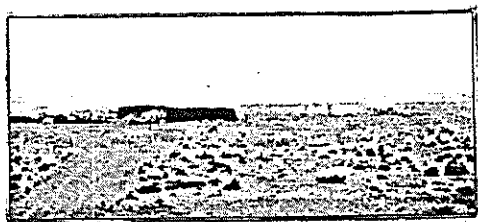
日本の女性はイヤリングしか使用しないと思い込んでいた私には驚きで、彼女等は「身体髪膚受之父母、不敢毀傷孝之始也」(身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり)という孔子の言葉も知らないのである。

高学歴化が進んで一億総知識階級の観がするが、教育水準のお寒いことは甚だしく、戦後教育の「修身」も教えない日本の将来を考えると慨嘆に堪えない。物質文化ばかり推奨して精神文化をなおざりにする教育界に、警鐘を鳴らしたい。

食事が終わって2時に出発し、4374mの最高峰が聳えるザークロス山脈を踏破することになった。予想に反し、ペルシア湾に接近した南部地方は高地にかかわらず温暖で、山の斜面にはアーモンドや無果実(仔苺)などか花盛りであった。

山肌は柱状節理や横状・斜状の断層が奇麗に変化に富み、2時半過ぎから雲が切れて青空が顔を出してきた。陽光が斜めに照射した草原には羊の群れも現れ、遠くにはベトウィン(天幕生活する遊牧民族)の黒い天幕も視界の中に入ってきた。

文明社会から隔絶した彼らベトウィンは、降雨の少ない砂漠の乾燥地帯で羊やラクダの草地を求め、果てしない遠距離の遊牧を続けている。（右の写真はベトウィンの黒い天幕）



定住生活者からすれば財を作る可能性は少なく苦勞も大きいだろう。華奢な生活になじんだ我々には彼らの生活は貧困そのものに映るが、自然を相手にした生活も亦、氣樂でのんびりして楽しいものようである。そうでなければ続けられない。

声を大にして慰めんとしても声は届かず、草の根のように死を待つ生活かもしれないが、質実剛健な彼らには幻想も悲感もなく、確かな長い視野を持っている。これは私がモンゴルの遊牧民と生活を共にした感想であった。

アラビア半島諸国ではベトウィンの定住化政策を盛んに進めていた。中東屈指の石油成金のイランは何故定住化を推進しないのだろうか。国土の大部分が砂漠であっても、道路網は驚くほど完備している現状からすれば、ベトウィンを救済することは可能であり、急務と考える。

イランの3月は雨季の末期で天候は変わりやすく、車のワイパーは大粒の雨をはじくために激しく動き出した。「また降るか天幕をなおすベトウィンの宿」、と彼らに同情を送りながらシラーズへと急いだ。

道路標識はシラーズまで55kmと標示していた。この辺りは一面に青々とした畑が拡がり、菜の花は蕾が膨らんで黄色い花が咲き始め、ペルシア発祥の地となったファルス地方の豊かさを印象づけていた。（3頁の記事参照）

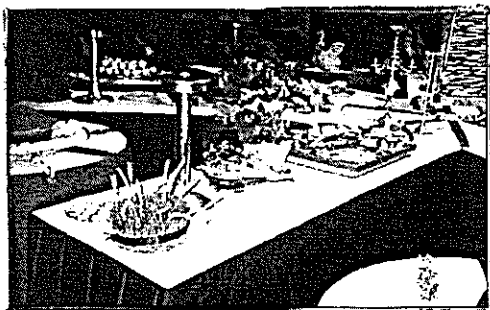
先刻から微かに浮かんで見えていた、塩湖のバーテガン湖（48頁地図参照）が接近した。何の目的であるか突然アリー氏はバスを止め、一目散に高く積み上げた塩湖へと走り出した。それは我々に自慢の塩の味を提供したかったのである。

ツアーの連中も彼に引きずられるように、雨の中を強風について湖畔に走った。この光景は私の目には皮肉だが、日本人は金持ちというだけで、心の持ち方は貧弱だと映っていた。

バスは17時を少々過ぎたところ漸くシラーズの市内に入った。重く垂れ下がった灰色の煙霧の中に、珍しく松の木の並木が延々と続き、街は日本に似た風情で好感をもつて我々を歓迎していたのである。

人口97万のシラーズの街は濃い緑の公園が多く、高層建築の少ない市街の中心部へと入った。重畳として暗雲が重なり合っていた、約10時間の山間道の踏破を回顧すると、シラーズ盆地は暗室から明るい世界に来了ような感じがしていた。

イラン航空の子会社のホテル・ホマは、ロビーにシンボルマークのホマを中心にして正月ご馳走を飾り付け、我々を心から歓迎した。



しかし3月20日、東京の地下鉄サリン事件発生のニュースを耳にすると、世界一平和で金持ちの日本のイメージは台無しで、脳天にハンマーの一撃をくったショックであった。

（右は正月を祝うホテルの飾り付け）

シラーズの概要

イラン人の祖先であるアーリア人がイラン高原に定着したのは、シラーズを州都とするファールス地方で、当時はパールサと呼んでいた。これがギリシア風になまってペルシアとなったことは、前記した通りである。

ザークロス山脈（48頁地図参照）の中の盆地にあるシラーズは標高1505㍎、テヘランまで919㍎、ペルシア湾の港ブーシェフルまで約300㍎で、年間降雨量は385㍎である。

シラーズの北東約50㍎にあるペルセポリスが、アケメネス王朝の王宮であった頃には小村に過ぎなかったが、684年にアラブの将軍・ムハンマド・ブン・カーシムによって町が作られた。

サッファール朝のヤークーブ・ブン・ライスはここを征服し、その弟がアティク・モスクを建てた。ブワイフ朝下で栄えて934年には首都となり、周囲12㍎の市壁や病院などが造られ、用水もつくって用水源となった。（4頁年表参照）

現在のシラーズの概観はほとんどブワイフ朝時代に形成されている。

12世紀中頃から140年にわたりファールス地方を治めた諸王は、町の発展に努め、マスジェデ・ノウ（新しいモスクの意）など多くの建造物を残している。

ムザッファール朝の将兵の防戦によってモンゴル軍の攻撃を免れたが、1393年にティムール（帖木児）によって占領され、サファウイー朝のアッパース1世ノ時に多くの立派な建造物が造られている。

13～16世紀にかけてシラーズは、サーディー、ハーフィズなどの有名な詩人や哲学者のモッラー・サドラーを生み、イランの文芸・学問の中心となった。

1725年、アフガン族の侵入によって甚大な被害を被ったが、1750年にサンド族のカリーム・ハーンがサンド朝（1750～94）を建て、シラーズを都とした。30年にわたるこの王の治下でシラーズは繁栄を回復し、イラン第1の都市となった。

彼はワキール（摂政）の名を冠するバザールやモスク、浴場などのほか、立派な内城を建設して石畳の道路を造っている。

カジャール族とサンド朝の戦いでは、サンド朝の市長の裏切りによってシラーズはカジャール側に落ち、大虐殺が行われてシラーズは再び荒廃した。

19世紀の後半にはペルシア湾のブーシェフル港に最も近いこの町は、ケルマン、イスファハーンとともに対イギリス貿易の拠点の一つとなったが、1891年の推定人口は3万余に過ぎず、ヤズド（4万）より小都市であった。

パーレウイー朝のレザー・シャーの時期になって市域の拡大が行われ、繁栄を回復して現在のシラーズとなったのである。

ホシュク川流域に開けたシラーズの町は標高が高いため夏も冬も凌ぎやすく、町の周辺には葡萄などの果樹の栽培が盛んである。昔の風情を残す田舎町だがオアシス・ガーデンの町として有名である。

3月22日 (水) 小南

古代ペルシアの栄光の地の観光 (下図参照)

イランは太古に溯ってその姿を見出すことができる、世界の中でも類いまれな国の一つで、今日は今次旅行の圧巻であるペルセポリス、パサルガダエ、ナクシェ・ロスタム遺跡の参観であった。

「金銀は美しいけれども世を利すること鉄鋼に如かず」と言うが、ツアーの女性たちはイランの掟に従って、真っ黒いチャドルに身を包み、沛然として降りしきる雨の中をバスは8時に出発して、シラーズ～イスファハーン街道を北進した。

シラーズ郊外に立っているコーラン・ゲートは、雨幕を張ったようにぼんやりとして街道の左に見えていた。反対側の高台は昔の見張台の跡で、1000年このかた「居安思危」(平時にあっても危難に対して備えを忘れないこと)と言ったように聳え立っていた。

山を越え谷を渡たる山間道に沿って細流が流れ、白樺の林が続く中に可憐な白い花や赤い桃の花が咲き誇り、春を思わせる情景を見つめながら、アレキサンダー大王が通った街道を旅情をかき立てながら進んだ。

低く垂れ下がった雨雲は行く手の稜線を曇らせ、微かに見える沿道の小さな部落は干乾煉瓦の支那町のように、正月でありながら簡単な店も開いていた。

バスは右手のペルセポリスには寄らずに直進して、そのままイスファハーン街道を北上した。見渡す限りの岩山と土砂漠の世界の中で動いているのは、時々見かける羊の群れだけで、景色が単調で穏やかだと心まで眠ったようになってくる。

走行すること約1時間半、バスが峡谷や山間を抜け出すと広大な草原が開けてきた。この平坦な原野がペルシア人の土地という意味の、「パサルガダエ」であった。

アケメデス朝ペルシアの創始者キュロス2世が、この周辺には水も流れ平原は遊牧に適した盆地で、当時の族長としては金城だと判断し、ここに都したのであった。

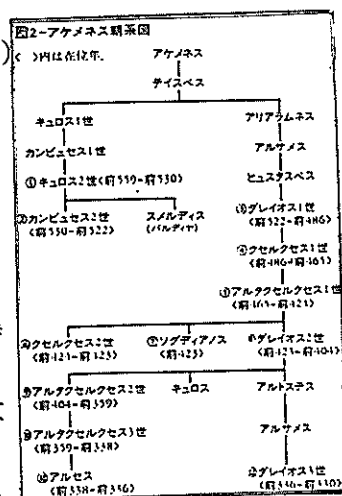


パサルガダエ (右のアケメネス朝系図参照)

パサルガダエはシラーズ北方約130kmに位置する、アケメネス朝ペルシア帝国の王都の遺跡で、同帝国の創設者キュロス2世(在位前599～前530)が造営したものである。

キュロス大王(2世のこと)が前550年に、メディア王国(イラン高原西部の最初の王国)とて戦って最初の勝利を得たのがパサルガダエで、ダリウス(ダレイオスともいう)1世がペルセポリスを建てる以前には、キュロス大王、カンビセス2世がこの地を都としていた。

キュロス大王はパサルガダエに二つの宮殿(謁見宮殿と



王の住居)と大庭園、拝火壇、王墓、倉庫などの石造りの建築物を造った。

これらの建築物とそこに施された彫刻には、アケメネス朝が征服した先進文化(アッシリア、メディア、バビロニア、イオニアなど)が適当に摂取されている。

例えば屋根を支える石柱はメディアなどの建築を模範とし、建物の壁面にはギリシアの切石加工法を用いた切石が使用され、王墓はイオニア(ギリシア)の石造り建築を模している。

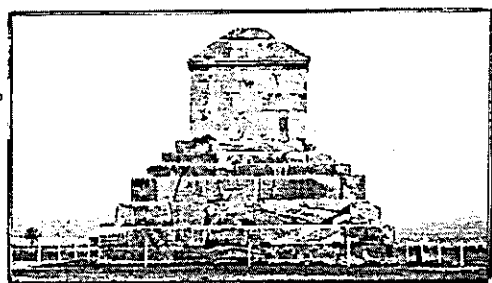
一方、彫刻は壁面装飾に用いられ、アッシリア、バビロニアの浅い浮彫を採用し、それにエジプトの図像を加味している。

このようにパサルガダエに残された造形は極めて折衷的であり、帝国創建当時の質実な風気がしのげられ、ペルセポリスで開花する新しい宮殿様式の前段階と解せられる。

「キュロス大王の墓」

パサルガダエの大平原の小麦畑の中を走るバスの車窓から、ホテルで購入した絵はがきにあるキュロス大王の墓が視界に入ってきた。

降雨の中を参観に移ると墓は創造していたよりも大きく、ピラミット型の六段の基壇の高さが5、25畝という切石積みの大墳墓であった。(右はキュロス大王の墓)



イラン東北方の異民族との戦いで戦死したキュロスの遺体はパサルガダエに運ばれ、この墓所に葬られた。基壇の上に置かれた石棺は切妻家屋式の北方系家屋の伝統によって造られている。

墳墓の外観は、イラン高原に移住してきた最初のイラン人の墳墓を思い出させ、彼らが以前、遊牧民であった当時の家屋を想起させるのであった。

今は遺体はないが、当時は妻とともに墓の上部に安置され、石棺形の墓石の高さは5畝の堂々としたものである。往時は誰の墓か分からないから「ソロモンの母の墓」の名で呼ばれていた。そのためイスラムが侵入してきた時にも破壊を免れ、付近にモスクまで建てられたと伝えられている。

キュロス2世は、父のころからスサを中心とする地方の首長であったが、エジプトなどと強盛を争ったメディア王国に藩属していた。しかし前記した通り、前550年に独立の軍を起こしてメディアを征服した。

次いで小アジアを手に入れ、バビロニア、シリア、パレスチナを征服して大帝国を建設した。この頃から大王と言われたのである。

彼は征服地住民の風俗や宗教を尊重して寛大な政策をとったから、被征服民から解放者として尊敬され、新バビロニアに捕らえられたユダヤ人(旧訳聖書のバビロン捕囚)を帰国させ、エルサレムに神殿を造ることを許した。

しかし、これはエルサレムの位置するパレスチナが、これから征服すべきエジプトに通じる路上にあるから、その戦略的な狙いがあったのである。

キュロスはバビロニアの住民に対しても征服者としてではなく、解放者、王位の合法的な継承者として臨み、新領土を併合したという重要性を強調するため、キュロスは「バビロン王、バビロンの地の王」と称した。

彼はまたバビロニアの属国、とくにシリアの国王ともなり寛大な政策をとった。このような占領地住民への寛大な融和策は、のちにアケメネス朝ペルシアを滅ぼしたマレドニアのアレキサンダー大王によっても模倣され、彼の占領地異民族の同化政策となったのである。

一行はアーリー氏の説明を聞きながら創業者の遺徳を偲び功績を称え、約10分ほどの見学を終えてバスに戻り移動した。

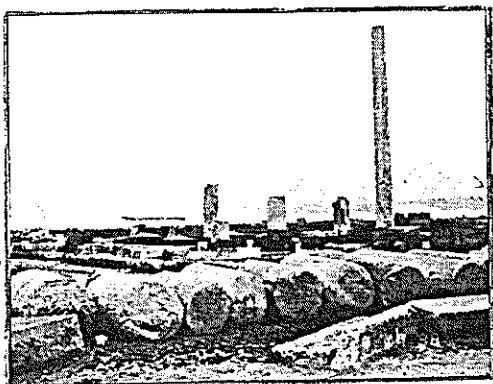
「二つの宮殿跡」

いづれの国の歴史を繙いても、人間の本質は勝負する動物だと思いながら、移動したバスは3、4分で直ぐ停車した。

平坦な大平原に見えるものは聳え立った1本の石柱と、地面の上に転がっている折損した数十本の石柱で、これがキュロス大王が建立したパブリック・パレスの宮殿跡であった。

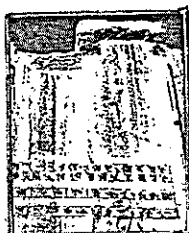
(右はパブリック・パレスの全景)

2500年前の王都に触れる感動を味わいながらパレスの跡を進むと、ガイドのアーリー氏は王宮の門と思われる石碑の前で降り、碑の説明を始めた。



この「有翼の精霊」と言われる前6世紀の彫刻は、不思議なことに四枚の翼をもっている石造りの薄肉の浮き彫りであった。(左の写真が有翼の精霊)

波乱万丈、犬牙錯綜の戦闘を経験したキュロス大王は、この時から早や気宇壮大で空中を飛翔することを夢みていたのだろうか。驚くべきことである。



そして「精霊」の上に「我はキュロス国王にして余がこれを作る」という、バビロニア語の銘文を刻んだ石があり、19世紀の初めまで読むことができたと言う。現在はその石は別な所に置かれてあり、その痕跡は見ることもできた。(右上の写真は銘文の石)

有翼のレリーフの頭には羊の角をつけた冠を被っているが、この羊の冠はエジプトのプトレマイオス王朝のコーム・オンポ神殿壁画浮き彫り「ファラオ」にある、ネオス・ディオニュソス王が頭につけているものと同じだという。

精霊の彫刻の下にあった台石も別な所に置かれていたが、そのレリーフには右側に神(人魚)、左側に悪魔の足が刻まれていた。勿論、右側の足はキュロス王の足で善人を表現しているのであった。



土台の石のつなぎとして鉄製の楔が打ち込まれ、或いは石柱に沢山な小さい窪みを設けて重量を軽くするなど、創意工夫した跡を見ると当時の文化の進度が窺えるのであった。(右上の写真の右側はキュロスの善人の足、左側は悪魔の足)

有翼の精霊を通り過ぎた宮殿の敷地には、一本の石柱が栄華の夢の跡を想起させるように聳え、胸が波打つ思いでキュロス大王の優れた才気煥発の働きを眺めていた。

パブリック・パレスの雨中の参観が終わり、眉目の距離にあるファミリー・パレスの見学となった。若い人たちの健脚の者は雨上がりの中を徒歩で移動したが、膝の痛む私はバスに乗り込んで王の家族の宮殿跡へと進んだ。

下車すると宮殿跡の敷地に可憐なタンポポの黄色い花が、偉大なキュロス大王を称えるように、2500年前と同じく咲いていた。

この宮殿跡には途中で折損した石柱の下部だけが並び立ち、キュロス大王の足跡などが刻まれていた。それにしても当時としては絢爛豪華な生活宮殿だったことは、想像できるのであった。（上は家族の宮殿跡）

その時、私の脳裏に浮かんだのは司馬遷史記の「武士の三忘」である。「命を受けては家を忘れ、戦場では親を忘れ、戦いに際しては我が身を忘れる」と言う、この三つを忘れなければ、功なり名を遂げられないということである。それには後顧の憂いがないようにしなければならないのであった。

完全燃焼して人生を送ったキュロス大王の生涯を羨みながら、未来永劫まで宮殿跡の保存を期待し、ペルセポリスの原型と言われる宮殿を去った。



「拝火壇」

二つの宮殿跡から2kmほど北西にバスは移動し、何もない草原の道端にぽつんと一つだけ立っていた、古ぼけた石造りの残骸が見えてきた。これが拝火壇である。

長い歳月を風雨に曝され崩れかけた石灰岩の拝火壇は、ほぼ正方形だったと思われるが、今は正面の部分のみを残して後方は鉄製の櫓で補強されていた。

ガイドの説明によると、キュロス大王時代に造られたこの拝火壇には、神殿の中で敬虔に守られた聖火から移した火が点火されていたと言う。（右の写真は高さ12㍎、幅7㍎の拝火壇）

今我々が見ている拝火壇の基礎は石で造られ、元はこの上部の平らな所に聖火を燃やす建造物があり、聖火はその建物の中で燃えていたのである。



ゾロアスター教（39頁の説明参照）にそれほど興味を持たなかったキュロス大王が、拝火壇を造ったのは奇異と思われるが、北方遊牧民族出身の王は新しい版図を統治するため、原住民の宗教に進んで帰依したのであった。

また彼は新バビロニアの神殿には何ら関心がなかったが、その神殿に額づいて敬虔な礼拝をした。そのため彼は原住民の支持を得て「バビロニアの王」を称し得たのであった。

新都のパサルガダエに拝火壇を設けて土地住民の信仰を尊重したのも、キュロスなら少しも不思議なことではなく、遠大な思慮があったのである。



拝火壇の西方の平原の中に独立した高地があり、一行は徒歩の者、バスで移動する者に分かれてその丘に向かった。

頂きが平らな丘の上まで、杖を頼りに喘ぎながら泥んこの山道を登ると、丘の上の一角は煉瓦で築いた城塞のようになっていた。ここはゾロアスター教の祈りの場・神殿のあった所で、拝火壇の聖火も恐らくここから運ばれたのであろう。

雨で濡れた赤土の泥土の丘の端から、気宇壮大なパサルガダエの平原が手に取るように瞰下され、王墓や宮殿跡、拝火壇が箱庭のように見えていた。

四周の展望が終わって再び急坂を青息吐息で下山した。するとガイドのアーリー氏はバスに積んできた昼食の弁当を、散り散りに分散したツアーの人達に配っていた。今回の旅行で初めて経験する弁当だが、雨上がりで腰を下ろす場所もなく、斜面に転がっている岩を見つけて昼食を摂った。

場所を捜しているとき私の目を楽しませてくれたのは、白と赤の花弁が奇麗に入り交じったラクダ草であった。世の中では、外見は良いが中身が悪いことを見掛け倒しと言っているが、ラクダ以外の動物には見向きもされない棘(トゲ)だらけのラクダ草は、気品のある奇麗な花を咲かせていた。

人間社会に於いても、肩書きと中身は無関係のように思える。「人生は芝居の如し」と言われる通り、大根役者が殿様にもなれば名優が乞食にもなる。ラクダ草の花は蓋(タガ)しこの名言のように見えていた。

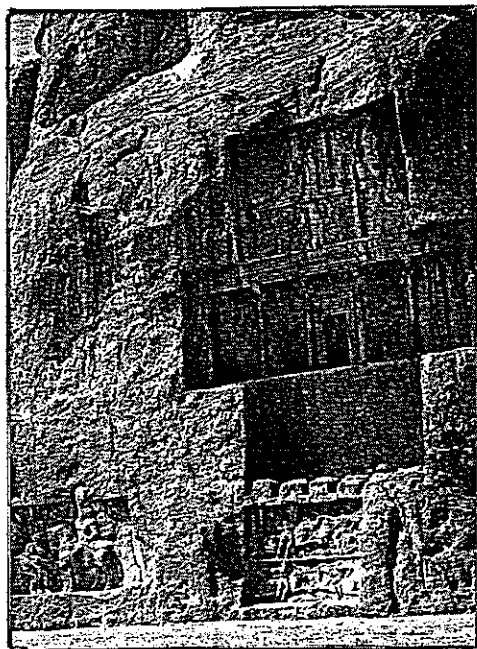
ナクシェ・ロスタム (52頁地図参照)

乗車したバスはコル川に沿った街道をペルセポリスの方に向かって走り、途中、羊が放牧された平坦地の中に見えた岩山の方向に右折し、屏風のような巨大な岩石が連なる山の手前で停車した。

気宇壮大な岩山の全景は眼前一杯に拡がり、ファインダーに収まらない崖壁に近かざくと、如何にもペルシア帝国の四王の墳墓の地に相応しい偉観が、参観する者を圧倒するような雰囲気を充満させていた。

ここが所謂、ナクシェ・ロスタム(ロスタム(伝説的英雄)の絵という意味)で、高さ150㍎の巨大な断崖に彫り込まれたアケメネス王朝の四人の帝王の墓が祀られていた。(各王の墓の高さは23㍎、幅は18㍎)

墓は右側の側面に一つ、正面に三つ並び、向かって右から順にダリウス2世(ダレイオスとも言う、前423～前404)、ダリウス1世(前522～前486)、クセルクセス(前486～前465)、アルタクセルクセス(前465～前424)の墓であった。



「52頁のアケメネス朝の系図について説明すると、ダリウス1世はもとキュロス大王の子・カンビュセス2世の家来だったが、キュロス大王（2世）がイラン東北方の異民族討伐に行き、逆に戦死した時、エジプト戦線に赴いていたカンビュセス2世の槍持ちとして従っていた。

カンビュセス2世が戦場で発狂し、本国ペルシアではゴウタマというゾロアスター教の怪神官が自ら王と称し、キュロス大王の墓をあばき、副葬品の財産を奪ったから、ダリウスは同士7人と決起し、ゴウタマを捕らえてその首をはねた。そして同士が彼を王に選出したので、ダリウス1世が生まれたのである。」

（前頁の写真はダリウス1世の墳墓）

墓の様式は同じで、断崖の途中の地上約50㍍のところに墓の巨大な入口が黒く口を開け、その中が数個の石室になっていて、王の棺が安置されていた。しかし現在は盗掘されて石室は空っぽだと説明された。

自然の岸壁を利用した墓だが、石柱に木造の梁をのせた宮殿建築の姿を、浮き彫りのように表している。そして帝国に服従する28の民族が頭上に捧げている王座に、墓の主がゆったりと座り、拝火教（ゾロアスター教）の善神アフラ・マズダが、祝福を与えている図も浮き彫りになっていた。

何の墓の下部にも戦う騎士などのレリーフがあるが、これは時代が下ったササン朝（226～651）のもので、特に馬上の騎士とその前にひざまづく男のレリーフは、ササン朝の王シャプール1世と彼に破れて捕虜となった、東ローマ皇帝バレリアヌスのものである。

特に有名なレリーフはササン朝のアルダシール1世の、王権神授式を示す岩刻画であった。これはレイに都してイランを支配したパルティアを、さらに征服したササン朝ペルシアの始祖・アルダシールが、224年に行った王の認証式を刻んでいる。（右の写真）



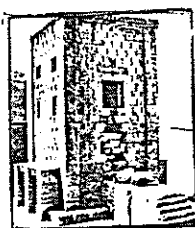
これは馬上の「火の神」のアフラ・マズダ（右側）が、馬上のアルダシール1世に王権を認証するリボンのついた輪を渡しているところで、輪は太陽を表している円盤である。（右下は右上の写真の図解）



アフラ・マズダ（拝火教の善神）の乗馬は、前足で蛇の悪神アーリマンを踏みつけている。アーリマンは暗黒の神で光明の神アフラ・マズダと対立し、闘争している邪悪の神である。

アルダシール1世の乗馬の前足は、彼が滅ぼしたパルティア王国の最後の王・アルタパノス5世を踏みつけている。

目を見張るような大墳墓を見上げながら右から左へと脚を運ぶと、断崖の墳墓の反対側に方形の古い建物が残っていた。これは高さ11㍍、幅7㍍の拝火神殿で、パサルガダエのものと同じ形式である。石灰岩の切石で積まれた神殿は、長い年月に耐えて破損されずに原形を保っていた。（右は拝火神殿）



墓群の場所から去った一行は崖岩の左側を回って少し歩いた所に

ある二基の小さい石の祭壇の見学に移動した。

これは聖なる「火の神」アフラ・マズダの拝火神殿と組み合わせた、「水の神」アナーヒターを祀る水の岩とも言うべき祭祀用の石で、高さ約1、7㍎、奥行1、5㍎ほどの石であった。（右は水の神の石）

火の神はゾロアスター教のシンボルだが、水の神アナーヒターを祀る祭壇は珍しい。一行の中に歴史に詳しい人が駆け登って石の上部に窪みの穴を確認したが、雨水を穴の中に溜めるものであった。

超乾燥地帯のこの地方では水は貴重なもので、緑をうるおす水に捧げる儀式のための石であろうか



ナクシェ・ロスタムの奥深い静寂な地に眠っている諸王の墓は、現代人の我々に何を語っているのだろうか。「創業は易く守成は難し」と言われるが、7世紀のアラブ侵入までの1200年の間、黄金時代を築いたペルシア民族の偉大さを、改めて認識させられるのであった。ナクシェ・ロスタムを3時に出発した一行は、今次紀行の圧巻中の圧巻であるペルセポリスへと、胸を弾ませて疾走したのである。

ペルセポリス（52頁地図参照）

ナクシェ・ロスタムの四王の崖墓を去ったバスはシラーズ街道を南下し、山間の国道を左折すると一帯は薄墨のように茂った森林が続き、なぜか寂しい孤独の影がまわりついていて、冷雨が車窓に吹きつけていた。

薄暗い街道を通過して開豁した世界が展開し始めると、そこには明るい平坦地が忽然と開け、バスや人の群れが見えていた。これが古代ペルシアの栄光の跡・ペルセポリス前の大広場であった。

この世界的な遺跡を訪れることができた感動に胸を波打たせ、こみ上げてくる歓喜のあまり降雨も気にならず、思わず「手の舞い足の踏むところを知らず」といった境地で、広大な広場を歩いて城塞の遺跡へと接近していった。

1971年10月、キュロス2世（大王）によるペルシア建国を祝う2500年記念式典が、パーレウイ朝最後の王（シャー）によってこの地で盛大に行われ、それから以降、ペルセポリス遺跡は世界的に有名になったのである。

紀元前550年、アケメネス朝ペルシアを建国したキュロス2世は、その支配を小アジア全体に拡大した。寛大で教養の豊かな君主であった大王は、確固たる国家を打ち立てて華麗な文明を創造した。

その後、後継者のダリウス（ダイレオス）1世は、東はインド北辺から西はエジプト、エチオピアにまで及んだ大帝国を支配するため、行政組織を整備するとともに、紀元前520年頃からペルセポリスの建設を開始した。

アケメネス朝の首都は「スーサ」にあったが、この地に新たに祭祀用の都を造った

のである。その規模は古今未曾有の雄大なもので、平野を見下ろす高台を切り開いて城塞を造った。即ちペルシア湾に近い首都のスーサは冬の都とし、海拔1800㍎で夏も爽快なペルセポリスに夏の都を造ったのである。

このペルシア帝国の都であるペルセポリスはギリシア人の呼称で、古代ペルシア語名はパールサである。そして現在のイラン人はこの遺跡を「タフテ・ジャムシード」（ジャムシードの王座の意）と呼んでいる。

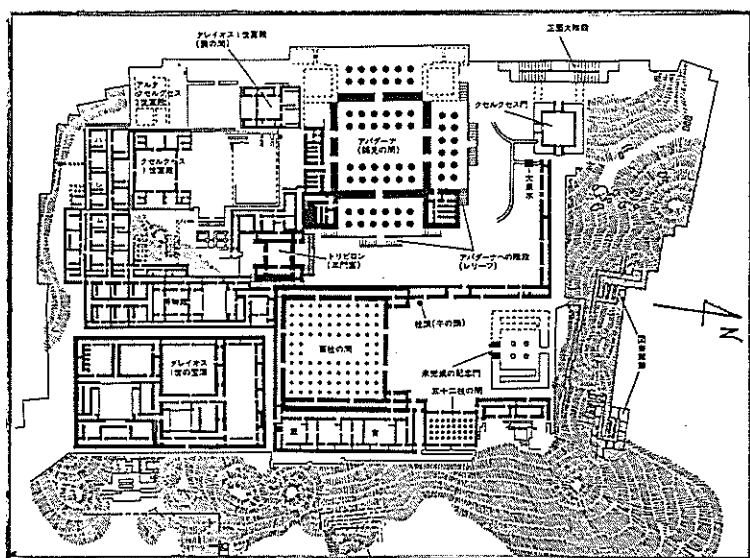
ジャムシードはイラン神話上の黄金時代の王で、その治世には死も早魃も寒さも老齢もなかつた、とされている。（前2000年初めの人と言われている）

ダリウス1世、クセルクセス1世の2代にわたって造営されたペルセポリスは、クーヘ・ラフマト（慈悲の山の意）の西斜面の自然の岩盤に、一部は切石積を施して西側455㍎、南側290㍎のほぼ平行四辺形の大基壇をなしている。

その上に謁見の間（アパダーナ）、ダリウス宮殿、クセルクセス宮殿、中央の間、百柱の間、後宮（ハレム）、宝庫などが建てられた。

（右はペルセポリス要図）

この建設工事にはギリシア、シリア、エジプト、アッシリア、バビロニアのほか、西アジア諸国の帝国各地から多くの労働者が動員され、20以上の民族に及んでいた。



ペルセポリスの建築、

彫刻、工芸、装飾には古代芸術の諸要素が単なる折衷でなく、世界の支配者ダリウスの統一的意思をもとに、総合された新しい様式の創出を示している。

ペルセポリスは世界帝国の都を意図して建設されたことは明らかである。しかし、実際にはスーサが行政の都として使用されていたから、アケメネス朝後期に王がここを訪れることは稀となり、僅かにアルタクセルクセス3世の建築活動が知られているに過ぎない。

アケメネス朝最古の王ダリウス3世（前336～前330）は、ギリシア・マケドニアのアレキサンドリア大王の追撃から逃走の途次、前330年に味方の裏切りによって殺害された。

アレキサンダー大王がアケメネス帝国の祭都ペルセポリスに入ったのは、前330年2月初めのことであった。ペルシア軍によるギリシア・アテネの破壊とアクロポリス神殿（アテネ）の焼き討ちに対する報復であろうか、このペルセポリスは前331年にアレキサンダー軍に放火されて灰燼に帰し、正しく「兵どもが夢の跡」となってしまった。

現在、我々が目にすることのできるのは、十数本の石柱や一部の回廊、基壇、そし

てレリーフで、屋根を覆っていたレバノン杉の灰に深々と埋没した遺跡となっている。

「クセルクセス門」

(これ以降は前頁の要図を参照のこと)

バスから降りてペルセポリスの参観となった一行は、城塞の大基壇の西北部(要図の右上)にあった大階段(高さ11、7段)を登ると、最初に目に止まったのはクセルクセスが完成した石門であった。これは「万国の門」と呼ばれるクセルクセス門である。

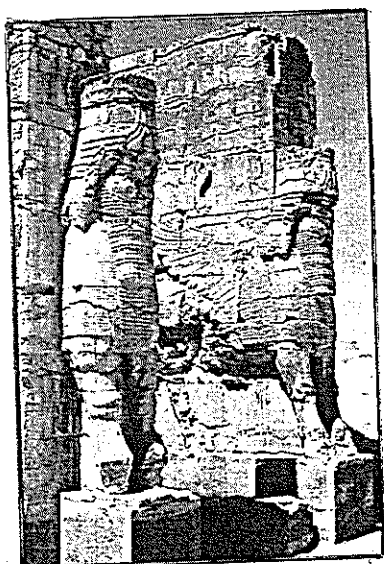
ここには朝貢を持ってきたペルシア帝国に服属していた28ヶ国の使節が、ここで王の謁見を待っていた控えの間となっていた。(要図の右上の門)

門の壁面には人頭有翼獣身の巨像(2つの牡牛と2つの翼のついたライオン)の浮き彫りが遺っている。

捲き上がった翼の形は華美を好んだクセルクセス1世の、気に入ったもののようである。そしてこれが法隆寺金堂の鳳凰の翼に流れていると言われている。

門には「この万国の門は私が建てた」という、クセルクセス1世の碑文が刻まれていたが、偶像崇拜を禁止するイスラムによって人頭部分は破壊されていた。しかし2400年も経過した現在も彫刻の粋をとどめ、当時の文化を誇っていた。(上は人頭有翼獣身の巨像)

門はペルセポリスに入る人と出る人で大混雑を呈し、ゆっくり写真を撮るチャンスもない状態で、押されるように次へと進まなければならなかった。



「柱頭飾りのグリフィン」

(要図の中央より少々右)

クセルクセス門を通り過ぎて東(要図の下側)に進み、右折したところにグリフィンが据えられていた。

(要図の柱頭と書いた所)

グリフィンとはペルシアの空想上の霊鳥と霊獣で、ペルセポリス宮殿の柱の上部には、胴体が一つで顔が二つという動物を彫刻した柱頭飾りが乗っていた。

(右は「ホマ」という想像上の動物で、イラン航空のマークにもなっており、表紙の絵も同じである)

胴体が横に長いのは、その中央に上から梁を受けるマスがあるためである。動物は牡牛、獅子などが鷹のグリフィンもある。羊がないのは対象を逞しい動物に限ったからであろう。

二つの顔は向かい合うことはなく、両方は必ず外へ向いている。これは中央が大きなマスで遮られているためであった。

宮殿の軒を支える柱頭についた飾りの役目は、ナクシュ・ロスタムにあったアケメネス朝諸王の崖墓の入口の浮き彫りと同様、この宮殿建築の特徴である。(下の写真は牡牛のグリフィン)



グリフィンの高さは1、2 呎、長さ3、8 呎で、柱頭を含めた柱の高さは約19 呎にも達し、ペルセポリスの建築の豪華さを偲ばせてくれるのであった。

「アパダナ」 (アパダーナとも言い要図の中央の上)

柱頭飾りのグリフィンを過ぎると右手に謁見の間の大宮殿(アパダナ)の遺跡が見えてきた。(右はアパダナの全景)

ペルシア人が築いた大帝国「アケメネス朝」は前記したようにギリシア、イラク、シリア、トルコ、エジプトを支配下に置き、その領域は広大を極めた。しかし、特筆すべき事はペルセポリスが行政機能を持たず、新年祭の祭儀場としての機能しか持たなかったことだ。

ダリウス王は新年祭を行う場として、それまでのバビロンの代わりにペルセポリスの離宮と祭儀場を建設した。

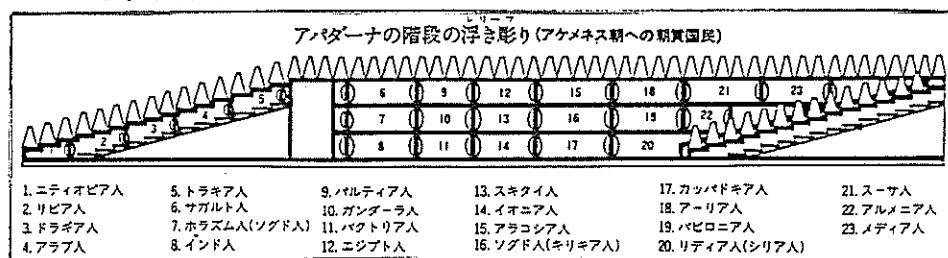
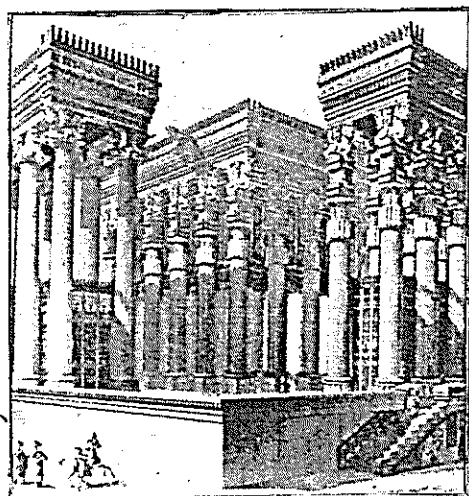
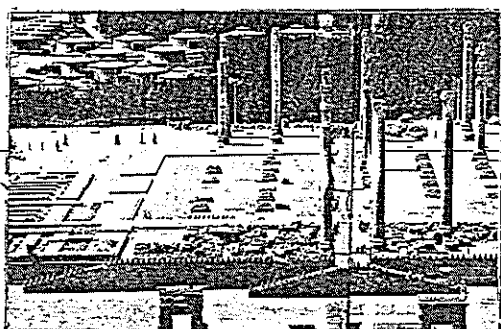
今、我々が訪れた遺跡は往時の荘厳さを見えていないが、王の権力の偉大さを図るには十分で、このアパダナは一際人の目を引き付けるのであった。

我々を睥睨するように直立する高さ19 呎の石柱は、現在13 本しか残っていない。この宮殿が建築された当時は大石柱は36 本、東、北、西のそれぞれの回廊に12 本ずつの柱が立ち、合計72 本の柱がレバノン杉で覆われた屋根を支えていた。

しかしながら、満つれば必ず欠けると言われるように、マケドニアのアレキサンダー大王によってペルセポリスは陥落し、大王が入城して宴会を開いて浮かれているとき火が放たれ、瞬時にして灰燼に帰してしまったのである。

上の下段の写真は、イラン国際観光協会発行のパンフレットに掲載されていた、当時のアパダナの想像図で、正月を祝う僅か13 日間のために造ったものとしては、他に例を見ないのではないだろうか。

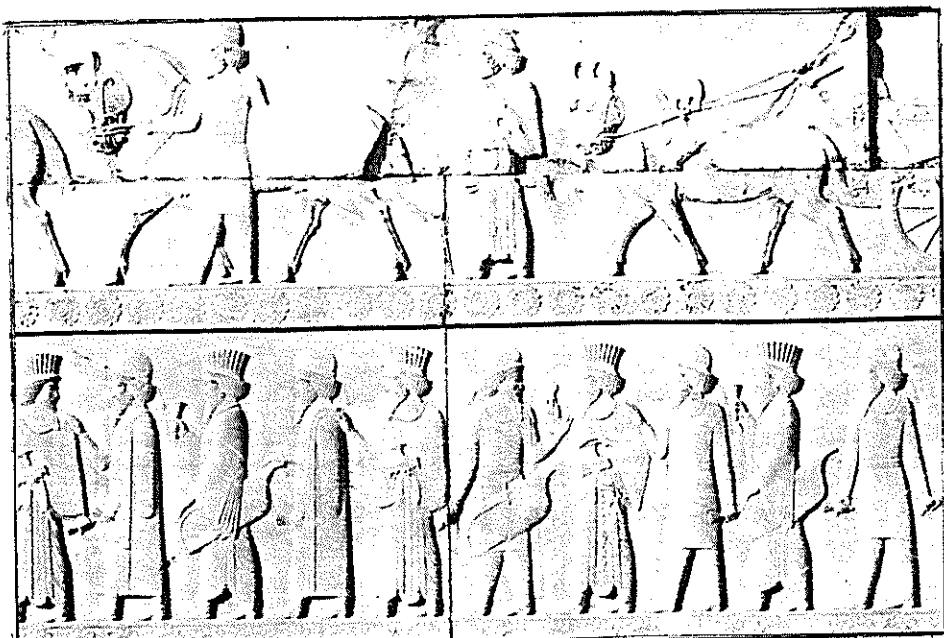
謁見の間・アパダナに上がる階段と基壇は、ペルセポリスの紹介には必ず出てくるレリーフがあり、非常に興味深いものがある。(前頁上の写真の下部分が階段)



アパダナに上る幅4、8呎のゆるやかに傾斜した石段を一步一步進むと、31段も

ある階段の横の石壁には、世界中とも言える服属国からの使節団の行列のレリーフが描かれていた。

前記したように「新年の祭」の儀式を執り行うため



に造られた、実に贅沢な浪費の宮殿である。それは属国にペルシアの権威を誇示するセレモニーで、造営工事には長い年月を要し各地方の粋を集めている。

この階段の壁面に刻まれているレリーフから、当時のさまざまな民族の様子を伺い知ることができる。階段の正面のレリーフには新年祭のために貢ぎ物を持ってきた、ペルシア帝国支配下の23の民族の行列が描かれていた。(前頁の下の方参照)

基壇の朝貢図の浮き彫りは(上の写真)、各地の動物を連れ、或いは特産物を捧げ持った朝貢者の列が弁別できるように克明に描き出されている。

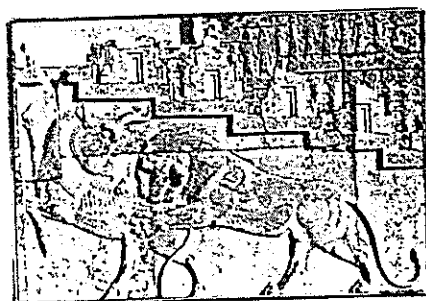
このレリーフを眺めながら私は、眩い栄光も一日にして成らずと思って階段を更に上った。

牛と織物を持ったエジプトの朝貢団、象牙を運ぶエチオピアの朝貢団、とんがり帽子をかぶったスキタイ人などが次々と現れ、我々にも描かれている人々の服装や手にしている物によって、何処の国の使節かが分かり、当時の百科辞典のように表現されていた。(右上の写真はレリーフの一つ)



もちろん貢税として収めさせたのは名産品ばかりではなく、多くの香料や金銀、馬なども捧げられていた。

中には右下の写真のように、ライオンが牡牛に噛みつく獣の闘争場面もあり、メディア人の高官たちが謁見のために長い行列をつくり、手に恭順の象徴である蓮の花を持って階段を上るレリーフも見えていた。



これらのレリーフを眺める私の目は応接に暇がなく、驚嘆したのは今日まで完全な形で残されていることであった。

階段を上り詰めたところに見えてきた大宮殿の「謁見の間」アパダナは、階段に彫刻されたレリーフから判断して、国際貿易見本市のようだっただろうと想像していた。

(右はアパダナの石柱とクセルクセス門)

世の中を収め民衆を救うことを「経世済民」というが、古代ペルシアの経済成長は中継貿易の結果であった。

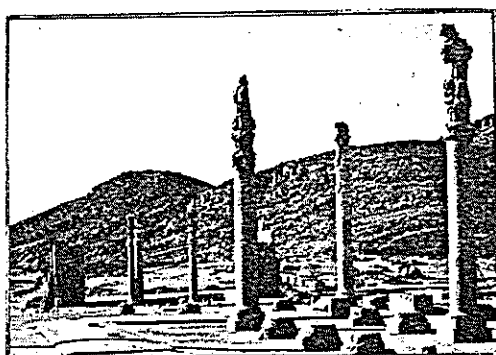
東西交通、交易路の要衝に位置し、そのうえ周辺諸国を隷属させたから、謁見の間は王の貢上物を閲覧する展示場であり、貢上物はそのまま諸国の商品であった。

西のレバノン杉、トルコのトルコ石、ガンダーラのカヤの木、シリアの金、エジプトの銀と黒壇、エチオピアの象牙など、みな宮殿の建築材料に朝貢されたが、それはそのまま東西各地の交易商品であったのである。

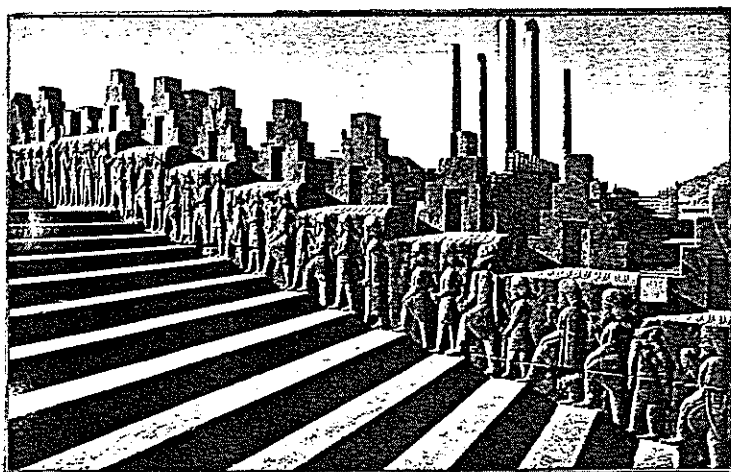
このように「諸王の王」と称した王は、その権力の絶大さを誇示した。彼らがそれだけの力を持ったのには、それなりの理由すなわち、当時としては画期的な統治組織があったからである。

自由民出身の軍人や祭司たちが遠い属州の隅々まで入植し、腰を据えて地方の統治を円滑に進めた。又、王の道と称する道路や宿駅を整えたことも、東西の世界との交易の一助となったのであった。

彼らはそれまでの歴史で隆盛を極めたメソポタミアの王よりも、遥かに絶大な力を誇った。しかし前記した通り、若干26才のマケドニアのアレキサンダー大王の手によって、ペルシア帝国は終焉を迎えた。今は主をなくしたアパダナの謁見の間は、ひっそりと昔を懐かしんでいるように佇んでいた。



(下の写真はペルシアの親衛隊を彫刻した行列と、アパダナの石柱)



「ダリウス1世宮殿・クセルクセス宮殿」

アパダナから南（59頁地図の左側）に出た直ぐ右手がダリウス1世宮殿であった。表面が鏡のように磨いた石が残っていたことから、「鏡の間」と呼ばれている。ここはダリウス1世の私室のあったところであった。

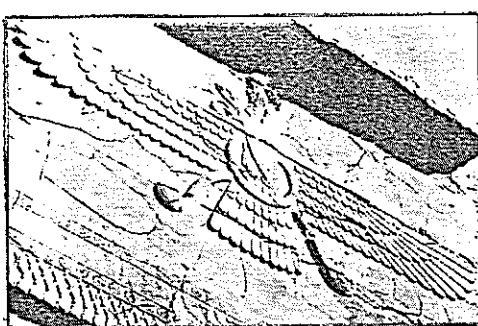
ダリウス1世宮殿の南がクセルクセス1世宮殿で、その後方が「ハレム」となっていたが、現在は若干の背の低い柱を残すのみであった。

その当時の王は「袞衣（コイ）玉食」（袞衣は天子の着る礼服、玉食は美味しい食事）をほしきままにし、艶やかな官女たちの歌舞で酔い痴れた宮殿であったが、今は荒れ果てて諸行は無常である。天の采配は人間の知恵では到底図ることが出来ないのだと眺めていた。

「トリピュロン（三門宮）」（59頁地図参照）

ダリウス1世宮殿の東側でアパダナに隣接した所にあるのが、三つの入口をもつ建物のトリピュロンであった。

その東の入口の石の面にダリウス1世と、世継ぎの王子クセルクセスの浮き彫りの像が刻まれている。



ダリウス1世は28ヶ国の服属国民が担ぐ玉座に座し、クセルクセスはその後方に侍している。（右の右側の写真）

玉座は装飾の豊かな天蓋の下にあり、天蓋の上にゾロアスター教の主神であるアフラ・マズダの有翼円盤が浮かんでいた。これはペルシア帝国の象徴の図で、王がこれから被征服民族を引見するところを表している。

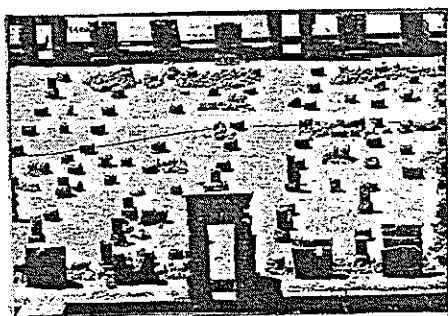
この天蓋は上から吊されているのではなく、左右の支柱の上に乗って蔽われている。天蓋の上下のふちには蓮華が開いた12弁をもつ円い花が並べられ、中央に有翼円盤が見えていた。（上の写真の左側がアフラ・マズダの有翼円盤、右側はダリウス1世とクセルクセス1世の図）

「百柱の間」（59頁の中央下）

トリピュロンを出た東側（地図では下側）のところが「百柱の間」であった。これはクセルクセス1世が建てた謁見の間で、100本もあった石柱は今では1本も残っていない。しかし柱の跡は歴然と残っていた。（右は百柱の間の柱の跡）

入口の脇柱に残された壁面には、翼と爪は鷲でサソリの尾をもち、ライオンの頭をもった怪獣と戦う王のレリーフがあった。

この怪獣はゾロアスター教の暗黒神アフリマンを表していた。

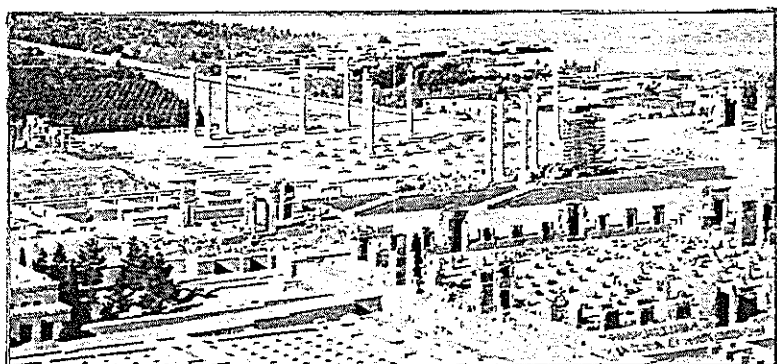


又、百柱の間の入口にある石の壁には、ダリウス1世の孫のアルタクセルクセス1世が真似をして作った、「玉座担ぎ」のレリーフも見えていた。この百柱の間は王と朝貢諸国の使臣との宴会場だったとの説があるようだ。

「ラフマト山からの展望と感想」 (地図下側)

百柱の間で一行は自由解散となり、17時30分にペルセポリスの正面に集合となった。

百柱の間の南にある女王の宮殿は現在、博物館となっていて足を運んで暫く見学した。しかし、ペルセポリスの出土品はテヘランの考古学博物館に展示され、ここには印象に残るものはなかった。



博物館東側のダリウス1世の宝庫も百柱の間と同じく、柱の跡を残すのみであった。ペルセポリスが陥落した当時、この宝庫には運び出すのに3000頭のラクダと、沢山なロバを要したと言われる財宝が蓄えられていた。貧弱な田舎の小国王アレキサンダーは、さぞかし嘆声を発して驚愕したことだろう。

添乗員の進言もあって厩舎の跡を通り、アルタクセルクセス2世の墓のある「慈悲の山」といわれるラフマトの丘に登ることにした。「慈」は人に楽しみを与え、「悲」は苦しみを抜くことであり、誰が命名したのか深慮のことだと思って登り始めた。

雨上がりの山道は泥んこの急坂で、靴の底が泥と恋をしているように、くっついて離れず、掉尾(ちようび)の勇を奮って這うようにして登った。

高所に立って一望すると広大無辺といった心境となり、暫く放心したような目でペルセポリスの全景を眺めていた。(上の写真はラフマト山からの眺望)

寸進尺略して領土を広め、財宝を恣にして栄耀栄華を極めた巨大な遺跡は、遙かな時を超えて今もなお、世界的な遺産の風格をとどめていた。

しかしながら私は、財産は物質ではなく人材だと感じながら眺めていた。

今日まで延々と続くイラン・ペルシアの最盛期はアケメネス朝で、就中、ダリウス大王の時代であったと思うが、不思議なことにイランの数多い遺跡で、ダリウスを始めアケメネスの王の名を冠したものがないようだ。

一方、アケメネス王朝を征服し、ペルセポリスの破壊者・アレキサンダー大王の名をつけた遺跡は、イランの各地に散見されるのであった。

一体なぜ征服者であり、イラン本来の宗教ゾロアスター教の伝承では、悪の権化とされるアレキサンダーの名前が、遺跡の名としてイラン各地に残存しているのに、ダリウスなどの名がないのであろうか。

遺跡などが残ることは、どういうことだろうか。残るためには先ず残そうと意図した者の存在が前提となる。何も残そうとする意欲がないのはイラン・ペルシア庶民の国民性であろうか。それとも日々の暮らしに追われた庶民には、そんな余裕がなかつ

たのであろうか。

歴史的に常にこのような存在であることを運命づけられてきた庶民の目には、自分たちの犠牲の上に、自分たちと全く無関係に完成した、ペルセポリスのような壮大なモニュメントは、どのように映ったのであろうか。

権力者は必ず形を要求するものだ。それは壮大な宮殿であり、神殿であり、文盲の庶民には読み取れない岩山に造刻された碑文などである。

いずれも王者の栄光である。王者の栄光とはその華々しさに反比例して、自分とは何の関わりもない栄光を実現するために、犠牲になった庶民の悲惨にほかならない。

このように考えると、本来ならば憎むべき征服者、宮殿の破壊者のアレキサンダーの名を残し、同じイラン・ペルシア人の王の名を残さなかったことは、時の権力に対する庶民の抵抗であらうか。勿論、私には解らないことである。

自国の王を悪玉とし、東征してきたアレキサンダーを開放者として名を残したのは、庶民の願望を次々と実現した英雄と映ったのかも知れない。

最も期待した「ペルシア人のポリス」のペルセポリスの見学が終わり、6時30分に帰途についたのであった。(ポリスは古代ギリシアの都市国家の意)

3月23日

(木) 晴

シラズ観光 (下図参照)

静寂な町の夜明けは昨日までと打って変わって晴れ上がり、シラズ盆地を囲む山々は陰陽をはっきりとさせて、その影は明暗を分け、糸杉の多い町並みを燕は早くから飛び回り、餌をついばんでいた。

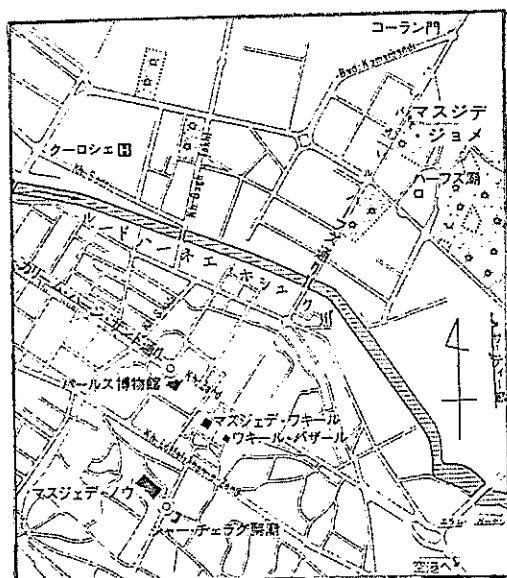
朝食時に、昨夜東京の実家に電話した東京外語大生から3月20日早朝、地下鉄霞ヶ関駅でサリン事件が発生し、死者12人、被害者5000人、警察機動隊がオーム真理教を急襲したというニュースを聞いた。

世界中で最も平和で裕福で勤勉な日本のイメージは台無しである。宗教は人を救済するのが目的であり、人を殺害するとは言語道断である。

地下鉄霞ヶ関駅は我が息子が通勤する駅で驚いたが、出勤時間の遅い息子は大丈夫だと一応安堵の胸をなでおろし、朝食を摂った。

宿泊した旧シェラトンのホマ・ホテルは、ホシュク川南岸の中心部に位置していた。1971年のイラン建国2500年祭が行われた時に、恐らく創建されたと思いながら、9時に出発してシラズ市内観光となった。

ホシュク川に沿ったカリム・ハーン・サンド通りを東に進み、マスジェデ・ワキールを右に見て更に直進した。「ワキール」とは「摂政」の意味で、サファウィ朝が



滅んで次に興った短期間のアフシャール朝の後に、イランを統一したサンド王朝が創設された。

その王朝の創始者・カリム・ハーン・サンドは一生シャーの称号を名乗らず、ワキール（摂政）と称した。このマスジェデ・ワキールはねじれた48本の円柱で支えられた丸天井が有名だが、時間の関係だろうか外観を眺めて素通りした。

空の青と土色の二色しかなかった昨日までの風土と全く異なり、都市のコンクリートの町並みを快走したバスは、鬱蒼と茂るエラムのバラ園の前で停車した。

「エラム・ガーデン」 （前頁地図の右下）

ゲートを入った庭園は、外部と遮断するように青空に高く伸びた糸杉が印象的で、その中で最も高い糸杉が世界一だということであった。

広い園内を歩いた。ナツメヤシから松、梅のほか、桜や白い花をつけたアーモンドの木、赤く染まったように花に覆われた桃の木などが整然と並び、その下に三色スミレが奇麗な彩りを見せているなど、田舎街の情緒を残していた。

（右上の写真は糸杉を始め樹花の景観）

清水の流れる正面の白亜の建物は、オアシス・ガーデンらしい波打った屋根を乗せていた。そこには王の生活風景や乗馬姿、女性の入浴風景が美しいモザイクで描かれ、130年前に建設されたカジャール朝の風俗を表現していた。

（下の写真は白亜の建物と庭園の一部）

イランでは美しい女性を糸杉にたとえていると聞きながら、白亜の殿堂の裏側に脚を運んだ。花の時期には未だ早いが、そこに広がる庭園には300種類以上のバラが植えられていた。

イランはバラの原産地で、古代にはこの国からヨーロッパ諸国にバラが運ばれたと言われている。古代のシラーズは文字通りバラの海に沈む町で、通りの端から端まで、そして家々の前にも、公園にもバラの花が塊になって咲き乱れ、世界屈指の美しい都であったという。

バラの花は特に、これから訪れる二人の詩人を祀る廟の周囲にも咲き誇り、サーディーとハーフズの両詩人は何と幸せなことだろうと、芽を吹いたばかりのバラの木を見詰めていた。

時期的にバラの花に詩的感興を求められないことを残念に思いながら、バラ園から遠くの丘を望むとそこには葡萄園が広がっていた。丘の上の国立法科大学の美しい建物を眺め、正月で賑わうエラム・ガーデンの爽やかな一時を味わって園を辞すことになった。

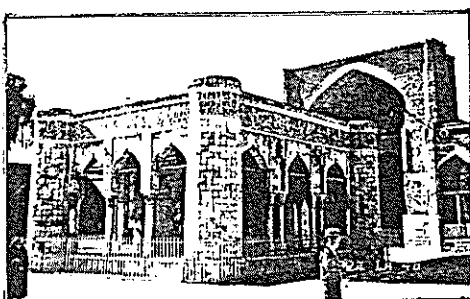


「モスジデ・ジョメとバザール」 (66頁地図右上)

ホシュク川を渡って北上したバスは所謂、金曜日のモスクといわれるモスジデ・ジョメのモスクの前で停車した。

このモスクは875年創建というシラーズ最古の歴史を持っているが、創建当時のものは一部だけで、あとの大部分は後世の再建であった。

14世紀に王がメッカのモスクを真似て建てた四角い建物は、神の家を想像して建てたものであった。(右の写真は神の家を想像して建てたシラーズ最古の建物)



王は酒を飲みすぎた時に神の家を夢見て建てたが、理由は知らないが禁酒したのであった。しかしシラーズはワインの産地だからであろうか、再び酒を飲み始め、それが原因で他の王によって殺されたと言う伝説がある。

伝説というのは貴重な歴史的文献だと、私は興味深く四角い建物を眺めて早速、カメラに収めた。

四角い建物の後方はモスクになっていて2本のミナレットが聳え、卵型をした碧いタイルばりのドームがあり、モスクの外壁は白壁で少々異様な形のモスクであった。

ここも男女の入口は別々で男は左、女性はや右から入った。丁度大群衆がメッカに向かって敬虔な祈りを捧げる時に遭遇したが、熱心な信者であろうか、壁や柱にキスをしている光景も見られたのである。

モスクに隣接した一帯はアーケードになっているバザールであった。正月のために殷賑をきわめて足の踏み場もない雑踏状態で、食品、衣類、金属といった店が業種ごとに集まっている中を、ただ素通りして外に出た。

(右は大混雑のバザール風景)



続いて「マシュラル・モスク」の参観となった。これはマシュラルという大財閥が110年前に建てた個人所有のモスクで、タイルの美しさが印象的である。

シラーズのガイドは、我々がイスラムの祈り方を知らないと思ったのか、彼は祈りの広場で祈りを捧げる作法を披露した。しかし彼が自分の寸尺で我々を見ることは、世間知らずと言わなければならない。

モスクの見学が多いイスラムの紀行であり、次にモスクについて若干記述する。

モスクの様式

43頁のケルマンのところで「バザールとモスク」に就いて記載したが、それ以外の事を記してみたい。

イスラム世界では小さな村にも礼拝堂であるモスクがあり、訪れる熱心な信者は跡

が絶えない。わが国の神社仏閣以上に信仰の祈りの場となっている。

モスクといっても何れも同じ形をしているわけではなく、その土地独特の様式があるようだ。大小のドームもあれば半ドームのもの、目も眩むばかりの華麗なタイル張りのものから、簡単な煉瓦造りのものまで様々である。

モスクはイスラム教徒の礼拝の場で神を祀る所ではない。彼らは個々に礼拝を行うが、金曜日の正午に行われる集団礼拝にも参加しなければならない。

イスラムの初期の時代にはモスクは単なる礼拝の域を出て、公的な告示、徴兵、徴税、教育の場となっていた。したがって大きな集団を収容できる中庭やホールを持つことが、都市のモスクに要求される第一条件であった。

モスクの起源は、メディーナ（サウジアラビア）にあった預言者マホメットの住まいにあったと言われている。それは中庭とその二面に建てられた干乾煉瓦造りの建物からなっていた。

モスクの内部には祭壇のようなものは全くない。モスクの唯一ともいえる必須条件は、内壁に設けられたアーチ状の凹みの壁龕（*ニッチ*）（ミヒラブ）である。

イスラム教徒は礼拝に際しては、必ず聖地メッカの方向に向かなければならない。その方向を示す役割を果たしているのがミヒラブと言われる壁龕で、必ずメッカに面する側の壁面に設けられている。

これがモスクの中枢部にあたるため、自然にこの部分に装飾が集中している。そしてタイル、漆喰、大理石等のさまざまな材料と技法によって、抽象的な幾何学文字やアラビア文字による銘文などが表されている。

ミヒラブの右側には、木材ないし大理石などで出来た説教壇が置かれている。ここは上段にイマーム（指導者）が座って説教を行い、コーランを朗唱するためである。

この始まりは、預言者がその住まいで何時も同じ所に立って教えを説いていたから、その場所を記念するために造られたと言われている。

モスクの調度品としては以上に挙げたものに加え、為政者や一般の信者から寄進された絨毯などの敷物が、床一面に敷き詰められたり、特に最近では吊りランプやシャンデリアが使用されたり、大小のコーラン台が副次的に備えられることもある。

以上のような内的要素に対して最も重要な外的要素は、ミナレット（尖塔）である。これには様々なタイプがあるが、塔の上から朗唱を専門とする者が、信徒に対して祈りの呼びかけを行うという機能は、どの場合も変わらない。

しかし遠くからでも人目を引く高いモスクの塔は、開教当時には周辺に住むユダヤ教徒やキリスト教徒に対して、新しい宗教イスラムの存在を印象づけるために、象徴的な役割を果たしたこともあったようである。

ミナレットの設けられる位置と数は必ずしも一定していない。数は通常は一基だが最も多いのはメッカの聖モスクの七基である。

モスクの装飾はイスラムの極く始めのころには、イスラムの勝利、栄光、楽園などを象徴的に表現したと解釈されている。しかし長い年月の間にそれは忘れ去られ、現在では幾何学文字、銘文などがモスク装飾の主体をなし、偶像と混同されやすい人物や動物の表現は全く見られない。

モスクの装飾には特に定まった法則はないが、モスクの外壁よりも内部が飾られる傾向が強く、工匠の美意識を理解するうえに興味深いものがある。

続市内観光 「サーディー廟」 (66頁地図中央右側)

昼食が終わって午後の市内観光にホテルを3時に発ち、再びホシュク川を渡ってハーフズ通り北上し、右折してサーディー廟に向かった。

ゲートを入ると糸杉やココヤシ、ナツメヤシを背景にした美しい庭園が広がっていた。バラの名園らしい景観の正面に、高い柱に支えられた屋根の上に半円形のドームが見え、その左に白いテラスが伸びていた。

1191年生まれで100才まで生きたサーディーは、日本の鎌倉時代初期の人である。

彼の墓は青いモザイク・タイルの爽やかな円屋根の廟中にあり、墓に刻まれた碑文は彼の辞世の句であった。(上の写真はサーディー廟の正面)



毎日細君にたたかれて夜逃げするようにしてシラズを去り、ダマスカスで勉強してエジプト～インド～イラン～トルコを旅し、60才でシラズに帰って生涯を過ごした。それから良い伴侶を得たが娘が彼より先に死亡したことが嘆きであった。

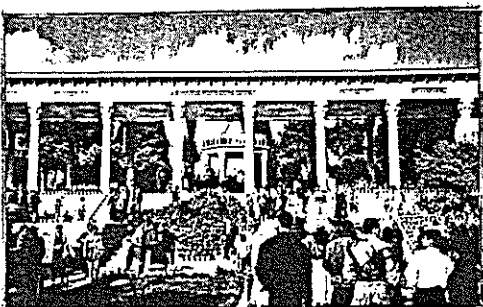
サーディーの代表作の一つである「薔薇園」を、旅立つ前に一通り読んできた関係から一入愛着を感じ、1953年に完成した建物の中央に安置された遺体に頭を垂れ、大詩人の眠るペルシア式庭園の辞したのであった。

「ハーフェズ廟」 (66頁地図の右上)

サーディー廟を去った一行は道を反転して市中心部に戻り、広大な公園の一角にあるハーフェズ廟を訪れた。

門をくぐると、花壇が美しく広がる庭園の中央奥にテラスが伸びていて、その後方の真ん中に六角形の石造りの建物が見えていた。

6本の柱の上部に鍾乳石状の飾りが付いている建物の中に、シラズが生んだ偉大な国民的詩人のハーフェズが眠っていた。(上の写真の中央奥がハーフェズの墓)



ハーフェズは1300年に生まれて89年に没したが、その生涯の殆どをシラズで過ごしており、日本では南北朝から足利時代初期である。

木々や花を讃えた彼の詩は多くの人に愛唱され、イラン人の心の中に生きている。特に彼の詩は美しいリズムと音楽性で知られ、イランで字の読めない人でも3つや4つの彼の句を知っているとされている。

18世紀末に祀られた彼の大理石の棺の蓋に、次のような辞世の句が刻まれている。「夕べにわれを抱けかし われ老ゆれども 朝には変若(若)かえるべしきみが傍ら われ逝く日汝を見ん時を与えかし ハーフェズがこと暇を告げんこのうつし身に」即ち、我が身は滅びても末永く我が身は現れるだろう、と言う意である。

「コーラン・ゲート」

(66頁地図の右上)

二人のイランの生んだ叙情詩人の廟を参観した一行は市内を北上し、昨日ペルセポリスに行く途中、雨の中で眺めたコーラン門へと快晴の中を快走した。

昨日とは見違えるほど美しく映えるコーラン門は、薄い黄色の輝きを見せていた。門の東側の高台は市民の憩いの場の公園で、西側の丘はゾロアスター教の霊地のように赤土を剥き出しにしていた。

バスから下車した一行は正月休みで行楽地に早変わりした高台の公園に案内され、そこで1時間の自由解散となった。しかし年老いた私などが遊ぶ場所ではなく、丘の端に立ってシラーズの市街を展望し、パノラマ写真を撮影して下山した。

コーラン・ゲートを通り抜けたところの日陰となった道端にカーペットを広げ、休憩していたイラン人一家は、通りがかった私を見つけて声を掛けてきた。疲労と時間を持て余していた私にとっては渡りに船で、好意に甘えて和気藹藹の中に入って腰を下ろした。(上の写真の上段はコーラン門、下段は歓待してくれたイラン人一家)

日本語で話し掛けてきた主人(写真の右から3人目の髭の人)は、東京の熊谷組で運転手をしていた人で、早速、婦人はチャイをサービスしてくれた。

見知らぬ人にでも持て成すことは根強いイスラムの教えで、出合を大切にする習慣は彼らには完成しているのであった。これは私がイスラム諸国で体験したことで、我々日本人も見習うべきことである。

この微笑ましい習慣は恐らく、苛酷な風土や状況に生きてきた人達の昔ながらの知恵であろう。喉の渇きや空腹を抱えて遊牧民のテントを訪れた者は、めったに彼らの期待が裏切られることはなかったのである。砂漠の民の偉大な慣習が今も生きていた。

応接した主人は必ずしも直接の見返りを期待しているわけではない。客として持て成しを受けた人は、いつかまた主人として、その時の客に向かって自分が何処かで受けたのと同じように、できるだけ振る舞いをすればよいという思想であった。

このような温かい人間関係の力学に感謝し、付き合いの原理を教わった喜びを噛み締めながら、バスの集合時間まで御世話になっていたのである。



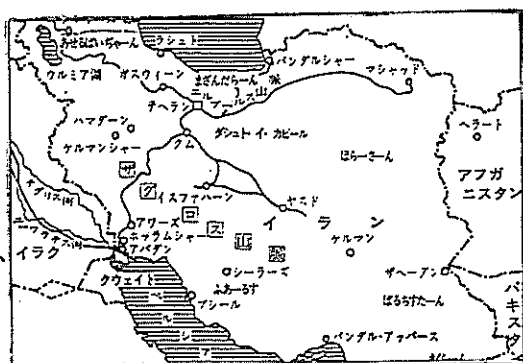
シラーズ～イスファハーン

薔薇と葡萄と詩人の街として人々に歌われてきた古風なシラーズの観光は終了し、チャイハネ（御茶屋）や眼光炯々としたホメイニ師の肖像が氾濫した街道を通り、庶民の心優しさを思い出しながら空港（66頁地図の右下）へと向かった。

赫々とした巨大な太陽は西空に傾き始め、涼気を伴った夕暮れ時の空港の中は閑散としていた。ターミナル内の男女別々になった祈りの広場を覗くと、カーペットの上に横になって寝そべっている老人の姿が見られ、のんびりした雰囲気であった。

時間が切迫するにつれて乗客の数も多くなってきた時、退屈まぎれに小さな売店を覗いてみた。ここにはシラーズ周辺の山岳に住むトルコ系の少数民族の民芸品が並び、独特な趣に釣られてイランで最初の買い物をした。これは珍しい記念品となった。

19:50発のイラン航空328便は定刻に飛翔し、サファビー王朝の首都として「世界の半分」と呼ばれるほど隆盛を極めたイスファハーンへと飛行し、1時間後に着陸して夜遅くコウサル・ホテルに入り、旅の疲れを癒すことになった。



イスファハーンの概要

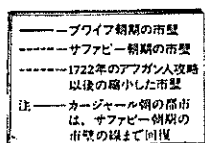
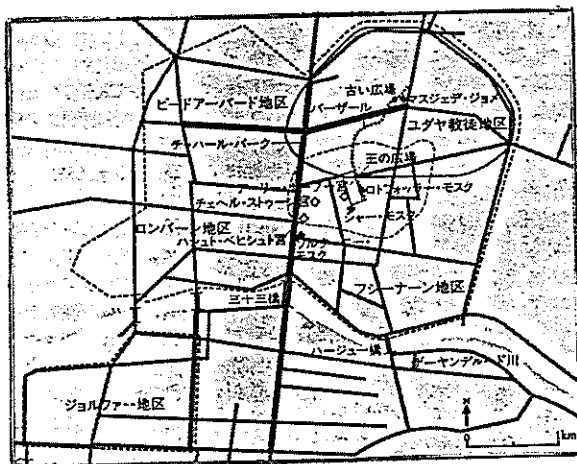
イラン高原の中部の都市で人口約120万（市内は52万）で、ザグロス山脈とその支脈の連山に囲まれた標高約1600mの盆地状の高原に位置している。

町の南にザグロス山脈に源を発すザヤンデルド川が西から東に流れ、その豊かな水によってイスファハーンはイラン屈指のオアシス都市として古来から繁栄してきた。

町の歴史は7世紀を境にして、古代オリエント時代とイスラム時代に分かれる。

町の起源は伝説によると、バビロン捕囚（前597～前538、バビロニア王のエルサレム攻略）で、イラクにいたユダヤ人の一部が現在の市街地の東北部に移住し、居留地を作ったことに始まる。

アッシリア、メディア、パルティアの支配のあと、228年にササン朝のアルダシ



ールに征服された。総督が駐屯する城塞は、現在の市街から川に沿って8km南東にいったジャイイに独立の町が作られたが、今は廃墟となっている。

7世紀にアラブによる征服後、この町はイスラム都市の時代に入る。しかし本格的な町づくりが行われるのは、アッバース朝(750～1258)期の767年にルード川の北のフシーナーン地区(前頁地図参照)にアラブ戦士の軍営地ができてからである。

この軍営地とその北東にある昔からのユダヤ人居留地との境目あたりに、古い広場が作られ、これを中心に市街地ができた。(現在の王の広場付近)

ブワイフ朝(932～1065)のアドッド・アッダウラ(在位949～983)はアラブ支配期の都市計画を継承発展させ、町を取り囲む市壁を建設した。

セルジューク朝期(1040～1157)に一時、首都にもなったが、1244年のモンゴルの攻略、1387、1414年のティムール(中央アジアの帖木児)の来襲によって灰燼に帰した。

1597年、サファビー朝(1502～1722)のシャー・アッバースは首都をカズビーン(イラン西部)からイスファハーンに移し、全く新しい町づくりを行って黄金時代を迎えた。

古い広場の南西に町の核になる、512×160mの矩形の王の広場(メイダーネ・イマーム又はシャー)を建設し、ここに政治、経済、宗教などの主な都市機能を集中させた。

広場の西側に王宮と官庁街、東側と南側に壮麗な二つのモスク(シャー・モスクとロトファッラー・モスク)、北側にバザール、キャラバンサライが配置された。またブワイフ朝時代に比べて4倍の規模の市壁も建設された。(前頁地図参照)

さらにルード川に橋が架けられ、川の南部地域が開発された。シャー・アッバースは遠征で捕虜にした多数のアルメニア人を強制的にそこに集団移住させ、ジョルファの居留地区(前頁地図参照)をつくった。

最盛期のイスファハーンの人口は70万といわれ、当時のロンドン、パリに引けを取らない大都会であった。このためこの町を訪れたヨーロッパの外交官や商人は、世界の半分と讃え、その栄華の様子を賞賛した。

しかし1722年、アフガン系遊牧民がこの町を攻略すると、徹底的に破壊されて再び元の状態に戻らないまま、近代を迎えることになった。

カージャール朝(1794～1925)ができて首都がテヘランに移っても、この町は19世紀前半までダブリーズと並ぶイランの二大都市の一つであった。しかし1869～72年の大飢饉、イギリス、ロシアの綿製品の輸入増加による伝統産業の衰退により、経済的な重要性は低下した。

市域はサファビ朝期に比べて3分の1に縮小し、人口は1870年代には5万人にまで落ち込んだ。

19世紀後半のこの町の特徴として第一に指摘できることは、織物などの貿易に従事している商人が、商品作物として栽培が行われるようになったタバコ、ケシの利益の多さに引かれ、資本を土地に投下して地主化したことである。その結果、荒廃したまま放置されていた市街地が農地に転用されるほどであった。

第二にイスファハーンの南西部に遊牧していたバフティヤール族との関係が緊張

になったことが挙げられる。この部族の有力な族長層は町の西部の土地を購入して地主化するものが多かった。

このような関係からイラン立憲革命に於いて、1908年末にはこれらの部族は、反革命によって壊滅の危機に瀕していた立憲革命組織の要請によって、イスファハーンに武力進駐した。

パーレウイ朝の成立後、この町はレザー・シャーによつて行われた都市改造計画で現代都市に変わった。道幅の広い大通りが市内を貫き、それに沿ってバザールに代わる近代商店街がつけられた。

衰退した伝統産業に代わって近代的な繊維工業が興されたが、これは立憲革命期に活躍した進歩的な人々が設立した織物工場（イスラム会社）を母体にしていた。

美しい自然と歴史的な建築物が残っているイスファハーンは、気候は温和で伝統工芸が盛んなため芸術の都とも呼ばれ、又、イラン最大の工業の中心地でもある。

イ・イ戦争でイラク軍に爆撃されて建物に被害を被ったが、現在は修復し繁栄を取り戻している。

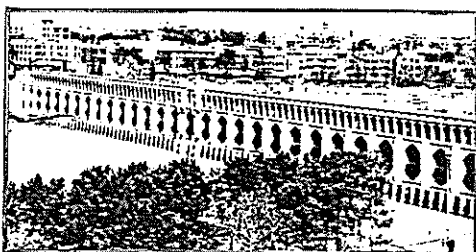
3月24日

(金) 晴

イスファハーン市内観光

ザーヤンデ・ルード川（ルード川と略す）の南岸に建つ8階建のホテル・コウサルからの眺めは、早朝の最上階ということもあって大パノラマが展開し、空の青さと山の緑が明瞭に分かれて、天地は白黒の世界から五彩の世界に移り変わっていった。

昨夜は見えなかったルード川は白銀の帯のように流れ、君子の心事は天青く日白しといった形容を想い浮かべながら、眼下に架かったシオセ・チェシュメ橋（シオセボル橋）に、私の視線は引き付けられていた。



シオセボルとは「33のアーチ」のある橋という意味で、イスファハーン最大の橋である。長さ295㍎、幅14㍎の橋は実用と芸術性を兼ね備えた驚嘆すべき建造物で、16世紀末にアッバース大王の時代に造られたまま、今なお町の名所であった。

（上の写真はホテルから眺めた早朝の33のアーチ橋のシオセボル橋）

この橋を一つ見てもイスファハーンは「安居楽業」（世の中がのんびりしていて平和で楽しく仕事に励むこと）の地という印象が強く、アッバース王のもとでペルシア文明が大きな花を咲かせたことが理解できるのであった。

ザーヤンデ・ルード川の水はよどむようにして対岸の景色を川面に映し、二つのモスクのドームも朝日に照らされ、朝の涼しい爽快な空気を部屋の中に引き込みながら、今日の見学の予習に努めていた。

「アルメニア教会」 (下図のケリセイエ・バンク)

ホテルの位置するザーヤンデ・ルード川の南岸地区は、前記した通りジョルファ地区と呼び、アッバース王が戦争で捕虜にしてきたアルメニア人を、強制的に集団移住させた地区であった。

8時に出発したバスはホテルの南側へと違法駐車が多い道路を進み、円形ドームの上に十字架をのせたモスク風の建物の前で停車した。良く見ると土色の壁に点々と碧いモザイク・タイルを張った奇麗な建物で、これが幾つかあるアルメニア派教会の一つであるバンク教会であった。

(右はイスファハンの市内地図。アルメニア教会のバンク教会は左下)

ジョルファ地区の住民は、元はアゼルバイジャン(カスピ海西岸)地区に住んでいたアルメニア人で、ギリシア正教系のキリスト教徒であった。

(右の写真はアルメニア教会の一つのバンク教会で、ドームの上に十字架が見える)

彼らは優れた石工、大工、商人たちであったから、アッバース1世は彼らの信仰を続けることを条件にこの地区に入植させ、現在でも約3万人のアルメニア人が住んでいる。

1606年に創建された教会は1655年にモスクの形に修復され、外観だけではキリスト教の教会と判別することは出来ない。

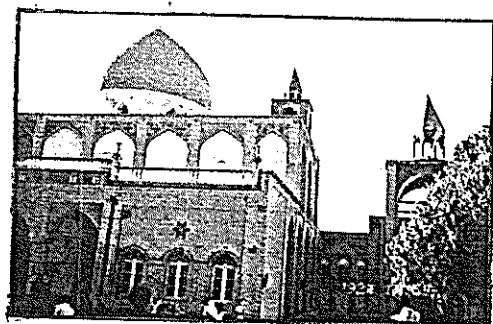
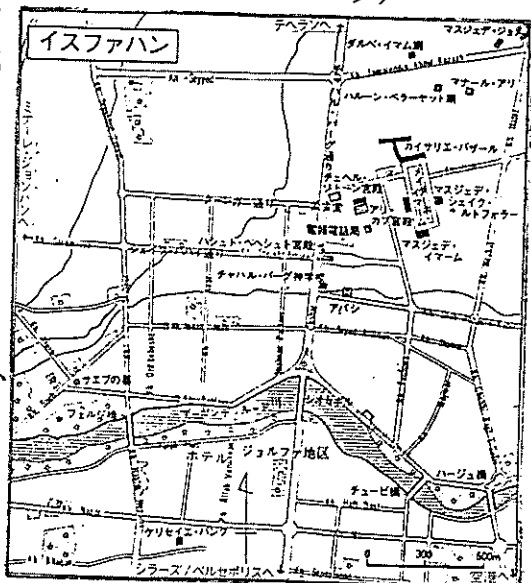
教会の中に入るとイラン風のモザイク・タイルの祭壇があり、ペルシア様式で描かれた聖人のキリスト教の宗教画が壁面を飾っていた。しかし故意か修理中か分からないが、キリスト像は幕で覆われて拝観することは出来なかった。

教会内には小規模ながら付属した博物館が設けられ、天国と地獄の絵を始め興味深い古い展示品がたくさん並んでいた。

「チェヘル・ソトーン宮殿」 (上の地図の中央右上)

ケリセイエ・バンクを離れたバスはシオセボル(33アーチ橋)を渡り、町の中心部を南北に貫くチャハル・パール通りを北上した。数々にわたって真っ直ぐに延びる道路は、中央分離帯にポプラの大木が並んで幅広い散歩道が設けられ、17世紀に造ったとは思えないものであった。

このような立派な通りの両側には、かつては国王や廷臣たちの宮殿が並んでいたが、現在はホテルや商店が櫛の歯のように続き、イスファハンの商業活動の大動脈になっていた。



アッバース王はこの町を世界で驚くようなものにしようと決心し、西欧世界でも未だ狭い広場や曲がりくねった道路しかなかった時代、即ちウエルサイユの大庭園が造られる1世紀も前に、アジアの一角のイスファハーンに左右対称の大通りを実現させたのであった。

大通りの右側のフェンスで囲まれ鬱蒼として茂った森のところでバスは停つた。ここが40本の柱をもつ離宮という意味の、チェヘル・ソトーン宮殿であった。



正月休暇を利用して訪れた大群衆で溢れるように混雑している庭園の中央に、アッバース1世が建立した木造建築の宮殿が見えていた。

これはアッバース1世が創建し、1647年、アッバース2世のときに完成したという、外国の使節を謁見する儀礼用宮殿で、古代ペルシア宮殿の伝統的様式を伝えていた。



高さ14、6mの細い木の柱で平らな屋根を支えているが、軒がゆがんでいるほど老朽化していた。(上の写真の上段がチェヘル・ソトーン宮殿、下段の左は木柱の台石のライオン像、右は当時の復元図)

かつては鏡が飾られていた宮殿の、入口の左右にある鍾乳石で飾った4本の木柱の台石はライオン像で、4頭のライオンの口から噴水が出るようになっていた。しかし今は水は出ていない。(上の下段左の写真)

宮殿の迎賓館のホールには肖像画、絵画、フレスコ画が飾られていた。アッバース1世・2世を始めとした王たちで、その外は宴会や戦争の状況を描いた絵画であった。フレスコ画は雅やかな男女の姿を描いたもので、ペルシアの叙情性を表していた。

イスラム教では人物を絵に描いたり、像に刻むことを禁じているが、ここでは公然と人物画が描かれていた。シーア派のイランではスンニ派よりも戒律が厳しくないからであろう。

18世紀にイスファハーンに侵入してきたアフガン王朝は、厳格なスンニ派だったから、これらの人物画はすべて泥で塗り潰した。しかしその後、泥は取り除かれて公開されている。

宮殿の前に噴水が吹き上がる長方形の泉池があり、私は急いで宮殿の反対側の泉池の淵まで足を運び写真を撮った。(上の写真)

40本の柱の宮殿と言われるが、実際は20本しかない。この泉池に映る柱の影を入れて40本に見えるから、この名が付いたのであった。この優雅で清浄な水に映った40本の柱の影を、私は暫く立ち止まって眺めていた。

泉池や噴水などは、砂漠の中のアアシスの発想であろうと想いながら、350年前に栄えたアッバース時代の宮殿建築の粋に驚嘆を感じ、ゲートを後にした。

ゲートを出ると、此处でも木陰のベンチに腰を掛けた一家が私を呼び止め、早速チャイのサービスであった。主人は極めて親日家の人で水タバコを差し出し、笑いの中で暫くの間の憩いを楽しんだ。本当にイラン人は戒律を守る心の美しい人達である。

昔はアリ・カブ宮殿から此处まで一連の宮殿が建ち並んでいたが、今はこの二つの建物を残すのみで、あとは後世の戦乱で破壊されたのであった。(前頁地図参照)

「ジョンバン・ミナレット」 (揺れる尖塔)

気温は時間の経過とともに暑くなってきた。街路樹の多い市街にはイ・イ戦争の戦火の跡は見られず、バスは新設の街道を通過して西郊にある「揺れるミナレット」・(ミナレット・ジョンバン)へと進路をとった。(75頁地図の左側)

郊外の田舎町一帯は平原の中のオアシスといった感じで、バスは青い空の広がった市の西南約5kmにある灰色の部落に入った。そこには煉瓦の塙で囲まれた敷地内に尖塔が聳え、庭の隅々まで人の波で溢れ、後に入ってきた我々は人込みを掻き分けて、奥へ奥へと一寸刻みで進まなければならなかった。

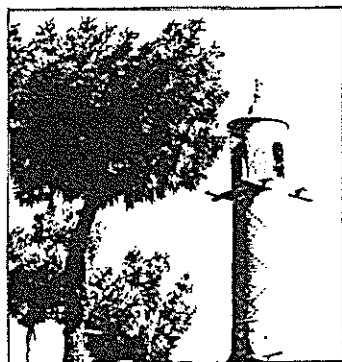
敷地の中には「アブドウル・アラール」という聖職者の廟があり、12世紀に彼が建立した2本の煉瓦造りの塔が廟の両側に聳え立ち、群衆の全ての人々は空を見上げるようにして、尖塔に注目していた。しかし樹木の枝葉が視線を遮り、中々適当な場所が見つからない。

高さ17mの尖塔の上部にある窓から人が顔を出した(右の写真で窓に小さく人物が映っている)。

すると窓に手を掛け渾身の力を振り絞って塔を動かし始めた。信じられないようだが塔は揺れ動いた。そして一方の塔を揺さぶると他の1本の塔も自然に揺れ出したのであつた。

倒壊するのではないかと気が気でなかったが、笑顔で揺り動かす彼は5分に1回程度の間隔で、繰り返して見物する我々に披露した。これは文字通りの「揺れるミナレット」で、私も始めてみる光景で興奮させられたのである。(上が揺れる尖塔)

これを立てた建築当時の技術の高さは魔術のようで、今もなおこの建築の技法は秘密と云われ、ここでもアッバース朝の偉大さが証明されているのであつた。



「拝火神殿跡」 (75頁地図の左上)

奇跡とも云うべきミナレットの余韻を感じながら、バスは少し先に見えていた茶褐色の山の麓で停車した。

独立して聳えるこの山には数本の登山道があり、頂上に挑戦する人影が点々として続き、天空を透して頂きに建物があるのが目に留まった。



古いこの煉瓦造りの建物は1500年前のもので、ゾロアスター教の拝火神殿の跡であった。ガイドのアーリー氏は、ここは「アテシュカーの遺跡」として有名だと説明した。そのためか、山の麓は延々と鉄条網が張られていた。

遙かな時を超えて人類が残してきた遺跡は、少しも動かず泰然としていた。これを「鉄心石腸」と言うのか、鉄石のように固い意思と、他からの誘惑に動かされない心の養成を、喚起しているように見えていた。

神殿跡を取り巻く付近の農村は米や麦、とくに西瓜とメロンの特産地で、イランに入国以来、デザートのなかった我々は、物欲の虜になったように眺めていた。

(上の写真はアテシュカー遺跡の拝火神殿跡の山)

「スール・ハーネ」 (ズルハネとも呼ぶ)

郊外から市街地に戻る途中の町外れにあった狭い道に入り、外観では普通の住居のような建物のドアを潜った。

ここが昨日、入場料として5ドル支払ったスール・ハーネという、ユダヤ系住民の身体を鍛練する道場であった。

「スール・ハーネ」とは「力の館」の意味で、昔の騎士たちが宗教的な精神に則(ノット)り、苦しい肉体の修行をしたことが今もお受け継がれていたのである。

六角形になった鍛練道場を囲むように階段状の観覧席が設けられ、我々はその客席に案内されて着席した。すると20人近い習練する者か、或いはショーを演じる者か知らないが、それぞれのユニホームを着用して道場内に入ってきた。

先ず入口の真上の2階に陣取った人が美声を張り上げ、その人が叩く太鼓の音に合わせて、一人づつ真ん中に出て体操を始めた。その体操と言うのは、道場に描かれた円形の中央に立って太鼓のリズムに合わせて、腕を水平に拡げて竹トンボのように回転する体操であった。(上は腕を水平にして回転する人と、円陣をつくる人たち)

観覧する我々までが釣られて目が回ったが、機械体操の着地のようにぴったりと停止すると拍手喝采であった。しかし大半の人は完全に停まらず、酒に酔ったようにふらつき、周りの人垣に倒れかかる状態であった。最後に83歳の老人が演技したが、年に似合わず元老は嬰鑠(カシク)ぶりを披露した。

この鍛練は500年以上前から伝わる、ユダヤ民族の伝統的体操であった。土の中から現れて土に戻るという働きを讃えたもので、日本の忍者の修行と同様、重い十字架を背負ったユダヤ人が、戦闘に備えるためだったのかも知れない。

イスラエルを訪れた時にも見られなかった、ユダヤの珍しい競技の見学も30分程度で終了し、昼食のためにホテルに引き返した。ホテルのコンクリート壁に、鋭い目付きのホメイニ師の肖像が壁一杯に描かれていたのは印象的で、想い出となった。



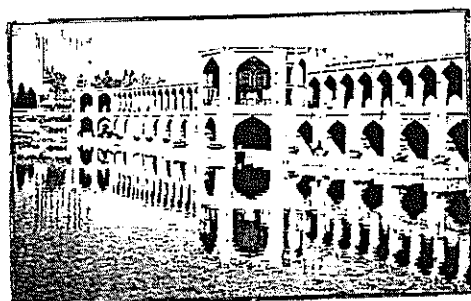
「ハー ジュ 橋」 (75頁地図の右下)

碧空緑野を流れるルード川を眺めていると、霧が晴れて青天が見えるような爽快な気持ちになり、期待を胸いっぱいにして2時半にバスは出発した。

33アーチのシオセボル橋を左に見てチュービ橋を過ぎ、バスはハージュ橋の河畔の広場で停車した。(右はハージュ橋の美観)

イスファハーンの橋は歴史的な意義と構造上の美しさで知られており、このハージュ橋は16世紀のアッバース2世の時代に建造されている。しかし残念ながら橋を渡る時間がなく、橋の一部分の見学にとどまった。

橋の基部はダムになっていて、ここから水を市内の各地区に供給していた。ダムの



上には2層のアーケードの橋があって、夕涼みが楽しめるように見晴らし台も設けられ、水上で行われる祭りやショーが見られるのであった。

イラン暦の一年が終わる春先の3月の始め頃になると、このダム付近の川は絨毯洗いで賑わったらしい（今は機械洗い）。大小さまざまな各種の絨毯が大きな石で押さえられ、川の中に並べられたその絨毯を見ていると、町の人がルード川に敬意を表しているように見えたと言われている。

このような自然の流水で洗ったあと絨毯は堤の上に引き上げられ、目を立てるために丹念にブラシが掛けられた。この光景は傍目（ハヅレ）には色とりどりの美しい眺めであったが、働く人にとっては重労働であったことだろう。

絨毯洗いや仕上げ作業を見ているイラン人はまた、自国特産の絨毯に対して大きな誇りと、深い愛着を持っていたのであった。

橋の上流の河川敷は遊園地となっていて、大勢の子供連れで賑わっていたが、私はバスに戻るために杖をつきながら川の流れから離れていった。その時また私を嬉色満面で呼び止めたイラン人一家に遭遇し、親日的な心に感謝してお茶のご馳走になった。

彼らイラン人男性は顔全体が鋭角的で精悍な顔つきだが、「心気は和易（ワイ）なるを要す」といった和気を絶やさない。そして細君は蛾眉柳腰の典型的なイラン美人であった。

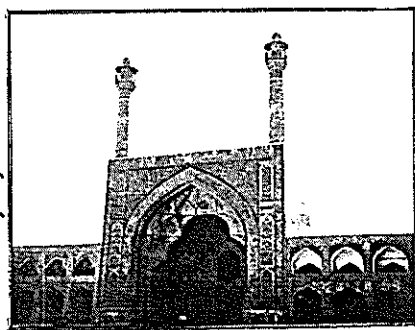
「マスジェデ・ジョメ」（金曜日のモスク）

ハージュ橋を去ったバスはルード川を渡って大通りを北上し市の中心部を通過した。

イスファハーンはサファヴィー王朝の英主アッバース1世（1587～1629）によって建設された町である。強敵トルコを撃破して領土内の交通路を整備し、13世紀にモンゴルの来襲で廃墟となったイスファハーンを、首都として繁栄させたのである。

そのような歴史を脳裏に浮かべながら、黙然と私は市内の美しい景観に眼を注いでいた。

17世紀中期のイスファハーンは162のモスク、48の学院、182のキャラバンサライ（隊商宿）、173の公衆浴場があったと、当時のヨーロッパ人旅行者が記している。これだけでも繁栄が窺えるのであった。



私はイスファハーンの「世界の半分」と言われた町の印象を、克明に脳細胞に刻み込みたいと、応接に暇がない状態であった。

バスが停車したところは金曜日のモスクと言われる「マスジェデ・ジョメ」（75頁地図の中央右上）で、入口の両側に尖塔が聳えるペルシア様式のモスクであった。勿論、イスファハーンで最も古いモスクである。

（上の写真はマスジェデ・ジョメのペルシア様式建築の前室とミナレット）

金曜日のモスクの最初の建物は8世紀に創建されたが焼失し、現在残っているもののうちで最も古い部分は、11世紀のセルジューク時代のものである。

モスクの中に入ると、四つの前室に囲まれた長方形の広い中庭があった。これらは何度も改修され装飾が加えられたから、各時代の建築技術の特色が残っていた。

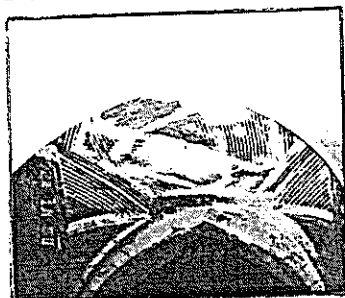
先ず11世紀の技術の特色として正面入口の隣の広間の円天井は、石片の自然の色を生かした星や薔薇、菱形を描き出していた。

12～14世紀の作品としては西側の前室に彫られた飾りであった。この時代になると漸く彩色技術が現れ、自然色の黄色い煉瓦の上に青と黒の釉薬（ウグスリ）をかけた煉瓦片を並べ、唐草模様を描き出していた。

15世紀になると彩色技術が更に発達し、多色タイルのモザイク装飾となり、南側の前室面その典型であった。

最も奥にある部分は創建当時のもので、メッカの方向を示すミヒラーブがあり、互いに向かい合ったペルシア様式の四つの間があった。この古い部分は干乾煉瓦で出来ていて、イ・イ戦争のときイラクの爆撃で破損し、昔の天井と修理された天井との色が完全に異なり、明瞭な境をつけて戦争の傷痕を残していた。

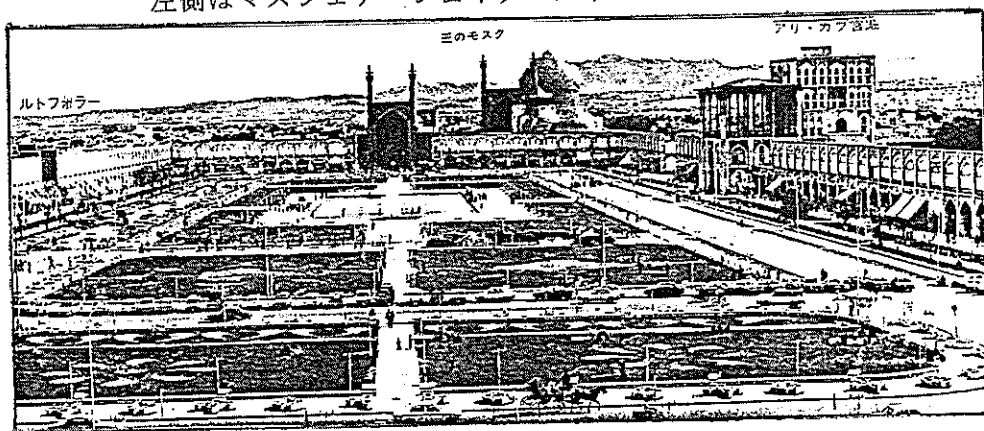
（右の写真の上部の白い部分は新しい天井の色、下部の黒い縞模様の部分は古い天井の色）



創建当時の古い建物の中で、壁に「中国文字」が彫られているのは珍しいことで、又その隣にイ・イ戦争の犠牲者の慰霊碑と慰霊文が彫られたいた。国家のために犠牲になった人々の霊に対し、国を挙げて慰霊の誠を尽くすことは当然の義務であり、日本のように慰霊を蔑（ハイガシ）ろにすることは慚愧に堪えない。

「イ・イ戦争」に就いては、イスファハーンの記事の後に参考資料として記述する。

「メイダーネ・イマーム」（王の広場 75頁地図参照）
（下の写真は王の広場の全景。正面は王のモスク、右側はアリ・カブ宮殿、左側はマスジェデ・シェイク・ルトフォラ・モスク）



金曜日のモスクから一行は、イスファハーン観光の最大の圧巻である「王の広場」へと向かった。バスは町の中心に位置する王の広場の中まで乗り入れた。そこには「世界の半分」とまで言われた荘厳華麗な建築群が、広場の周りを取り囲んでいた。

日本では戦国の世も終焉を迎え、徳川の江戸時代が幕を開けた時代にイラン王朝のサファヴィ朝は、世界の半分と言われたイスファハーンに首都を置いたのである。

サファウイ朝は現在のイラン国教となっているイスラム教シーア派を、初めて国教と定めた王朝である。彼らが作った町が世界の半分とまで称された理由は、我々が今見ている王の広場に基因するに違いないと眺めていた。

東西160㍎、南北512㍎の広場は、正しく世界の半分と呼ばれるのに相応しく、平面的な広さもさることながら立体的な建物が広場を彩り、空よりも澄んだブルーの丸いドーム（王のモスク）が正面に見えていた。

中央にある池には噴水が高く吹き上がり、縦横に走る広い道路には情緒豊かな幌を被った観光馬車が走り、王の広場を包む雰囲気は次元を超えて我々を誘っていた。

「アリ・カブ宮殿」（75頁地図中央右上、前頁の写真参照）

我々は先ず第一に前頁の写真の右側（西側）に見える、400年前に建てられたアリ・カブ宮殿へと足を進めた。ここはアッバース1世が創建したサファウイ朝を代表する宮殿で、前頁の写真で見えるように優雅な細い柱をもったテラスが目立っていた。

「アリ・カブ」と言うのは「アリの門」という意味である。敬虔なシーア派の信者であるアッバース1世が、現在のイラクのカルバラにあった4代目カリフのアリの廟から、移したものと伝えられている。アリは前述したようにシーア派の聖者でカルバラで殉教している。

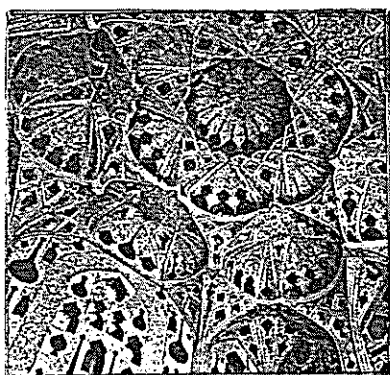
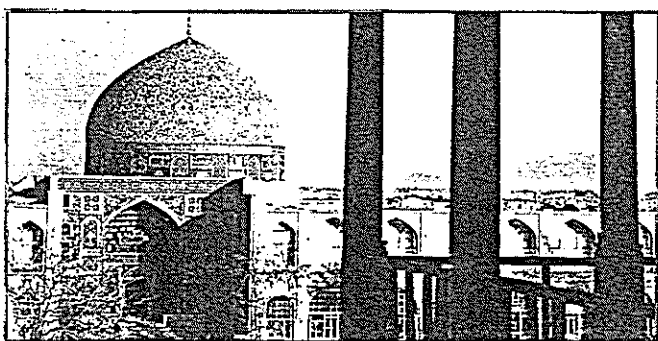
元は広場の門の一つだったので、宮殿に作り変えられたもので、我々が階段を登っていくと、どの部屋も天井に施された石膏の浮き彫りが見物であった。

1階は警護兵の屯所、2階はティハウス、3階は応接間、4階は王の妻たちの部屋、5階は王の寝室、6階は音楽室で、私も杖を頼りに細い階段を喘ぎながら登った。（右上の写真は宮殿のテラスの列柱と、対面するルトフォラ・モスク）

木製の列柱の並んだテラスに立つと、王の広場の向こう側にあるルトフォラ・モスクが手に取るように瞰下された。サファウイ王朝の王たちは、このテラスから王の広場で行われたボロ競技（乗馬競技の一種）を観戦したという。

6階の音楽の間の天井部分は蜂の巣のように、くり抜かれていた。こうすることによって音響効果が抜群となり、この広間でよくコンサートが開かれたと言われている。

（上の写真は模様のように所々、くり抜かれている天井や壁の様子）



「マスジェデ・シェイク・ルトフォラー・モスク」 (75頁地図の中央右上)

アリ・カブ宮殿を離れて、噴水が吹き上がる池を眺めながら王の広場を横断し、反対側に建つモスクに向かって歩いた。

茜色を基調とした優雅なアラベスク文様(アラビア式)で装飾されたドームが、広場の池にその影を投じ素晴らしい華麗な景観を呈していた。(右の写真はルトフォラー・モスクの正面とドーム)

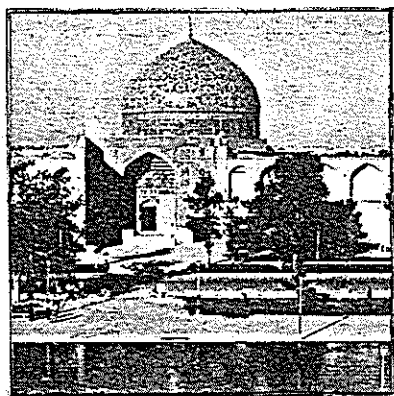
ここはアッバース1世が義父を祀る個人的な礼拝所として、17世紀に建てた王家専用のモスクで、説教師のルトフォラーの名をとって命名したのであった。

又、このモスクはドームの左右にミナレットがないのが特徴で、これは非常に珍しい不思議な構成だと眺めていた。

淡いグリーン色のドームのタイルは丁度太陽の光に照らされて美しく輝き、王の広場がペルシア芸術の粋を結集した最高の傑作だと言う、雰囲気醸し出していた。

王を取り巻く女性が集まったと伝えられるこのモスクの前で、我々一行は初めて記念写真を撮り、広場の南側に凜乎として聳える王のモスクへと歩を進めた。

泉池の淵を歩きながら、「水鏡の人」という東洋的な言葉を思い出したのであった。この人を見ると霧が晴れて、青天が見えるような気分になる人のことを言うのだが、果たしてアッバース王は、「水鏡の人」を意図して泉池を造ったのであろうか。しかし、それは心の持ち方一つで決まることであった。



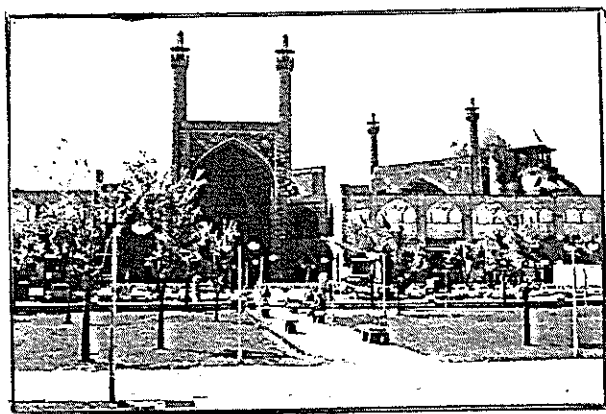
「マスジェデ・モスク」 (王のモスク、75頁地図右上)

王の広場の南側にある王のモスクは、アッバース1世がその最盛期の1612年に建設を始めたもので、サファウィ朝が誇るペルシア文明の最高傑作である。

モスクの正面がメッカの方向に向けられているから、王の広場の中心軸とずれているのが面白い構想である。(右は王のモスクの正面の全景で80の写真も参照)

青空に伸びる4本のミナレット、高さ45mにも達する巨大な円屋根、中庭の泉水、中庭を囲む四つの前室(イーワーン)、これらを飾る彩色タイルのモザイクは、正に天国のイメージを具現した建物である。

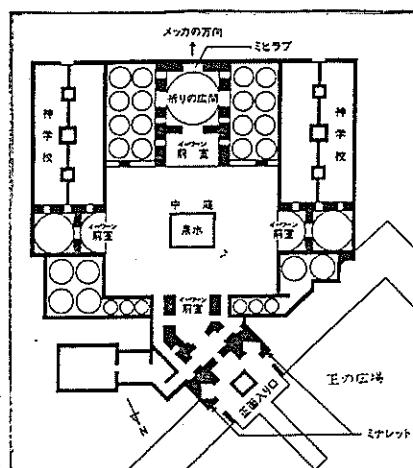
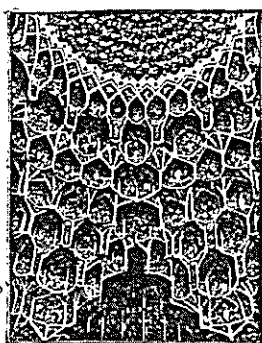
まず巨大な正面玄関に入った。その入口は独特であるということを強調するように、青い鍾乳石の滝が高い天井から落ちてくるような感じに造られていた。それは幾つもの同じ形をした花束のように分かれ、幾千もの相似形の小さな滴となり、青や緑、黄、



白の七宝で飾られた壁に沿って流れ落ちるようであった。

王のモスクは何とも云えない雰囲気漂い、鍾乳石の天井は、イスラム世界のプラネタリウムといった表現がびったりで、大きな宇宙を思っただけで造ったのかと想像していた。

(右の左側の写真は王のモスクの鍾乳石飾りの天井)



外壁まで彩色タイルで包まれたモスクの中を、静かに進んで中庭に入ると、各正面の壁や円天井は、トルコ石を思わせる青を基調にした色彩で覆われていた。これはイスラム教の宗教家たちが夢見る「永遠の都」の表現かも知れない

中庭中央の正方形の泉水には周囲のタイルの色彩が鮮やかに投影し、その南の前室の奥は祈りの広間となっていた。ここにはメッカの方向を示す聖龕（ミヒラブ）が設けられ、これに向かって礼拝するのであった。

(上の要図は王のモスクの配置図で、典型的なペルシア様式である)

その左右の建物は神学校となっていて、小人数で教育するため小部屋が多く、コーランの勉強に励んだ卒業生は将来、コムの神学校に進学するようである。

神学校のタイルの色は黄色であった。これは夕方の暗くなった時でも、字が読めるようにと考えたのである。建物を一巡して中庭に戻ると、北の前室の角に石の日時計があった。これは石の表面に全く影がない時が正午となっていた。

王のモスクの青空に聳える青い円屋根や、すらっと伸びたミナレット、その他の王の広場を囲む豪華な宮殿を眺めながら、神秘的な千夜一夜物語の舞台のような魅力に引かれ、魔力にかかった感じを抱きながら見学は終了した。

「ノミザール」 (75頁地図右上のカイサリエ・バザール)

王のモスクの前で1時間の自由解散となった。しかし今日一日の観光で我が足は棒のようになり、王の広場の北側にあるバザールまで足を運ぶ気力はなくなった。

イスファハーンの郊外の町村では絨毯造りが盛んだが、一方、イスファハーン市内は伝統手工芸技術を守り続け、絨毯以外の手工業は王の広場の北側にある、バザール一帯に集中しているのであった。

いろんな種類の職人たちが仕事をしている市場に、お土産品を探しながら職人芸を見るのも観光の面白さだが、くたびれた私は広場を取り巻く西側の商店だけを覗き、孫たちのお土産を買い求めてバスの駐車場に向かった。

街全体が文化水準の高い芸術作品のようであったイスファハーンは、イランの近代化に伴って、今では次第に過去のものになって行くようである。世界の半分だった街も、イランの半分で満足しなければならない状態ではないだろうか。

ホテルに帰る道すがら残照に輝く33アーチを見惚れながら、「宝は才能に存して財産に存せず」と再び文化の水準の昂揚を祈り、イスファハーンの観光は終わった。

イラン・イラク戦争の背景と真因

1980年9月17日、イラクはアルジェリアの仲介によって、1975年に結ばれたイランとの国境協定を一方的に破棄し、22日にはイランの10ヶ所の都市を一斉に爆撃し、シャットル・アラブ川を越えて侵攻を開始した。

こうして8年間に及ぶ戦争が開始されたが、戦争の経過は割愛して真因を考えてみることにした。

「イラクの開戦の3つの理由」

イラクは開戦の理由として次の3つを上げた。第1はイラクの領土権の承認、第2はシャットル・アラブ川の主権の承認、第3はホルムズ海峡の3つの島のアラブへの返還であった。

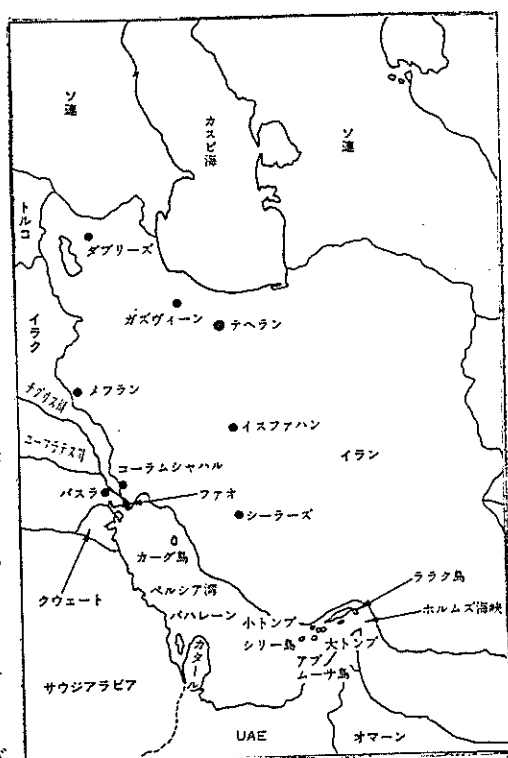
第1のイラクの領土権の承認とは、両国の国境の中部及び北部山岳地帯周辺で、イランが不法にイラクの領土を占領してきたというのである。この点は後述する。

第2も後述するが、ある意味ではこの戦争の真因となっている。チグリス、ユーフラテス両河がペルシア湾に注ぐところで合流し、シャットル・アラブ川となっている。従来からシャットル・アラブ川はイラクが領有していたが、アルジェリア協定で河川の真ん中が国境線に修正された。イラクはこれを元に戻せという主張である。

第3のペルシア湾のホルムズ海峡に近い3つの島（アブ・ムーサ島、大トンプ、小トンプ島）のアラブ側への返還問題は、次のような経緯がある。

これらの3島は元来アラブ首長国連邦（UAE）の領有であった。1971年11月、イギリス軍がペルシア湾から撤退するに及び、パーレウイ国王下のイランがペルシア湾の航行安全を確保するという名目で、この3島を占領した。イラクはこれを元の主権者のUAEに戻せと言うのである。（UAEはイラクの主張に賛成していない）

この3島の問題は、この戦争が単にイ・イ2国間の問題にとどまらず、イラクは湾岸諸国の「大義」を代表して、イランと戦っていることを示したものであった。



「オスマン・トルコ時代からの国境紛争」

前記の第1第2の領土と領有権の承認の件は、イ・イ両国の長年の国境紛争の問題点で昔から歴史的な係争が存在し、これを見逃しては問題点を理解することはできない。

この中東地域には3つの大きな民族、即ちアラブ民族、トルコ民族、ペルシア民族の3民族が生存している。

アラブ民族はアラビア語を国語とする民族（セム族）で、元来、アラビア半島の西南地域に古来から居住していた人々だと言われている。

しかし7世紀の前半にこの地域にイスラム教が興ると、アラビア語はアラビア半島のみならず、チグリス川とユーフラテス川流域のメソポタミアから、地中海に面するパレスチナ一帯～北アフリカ一帯を広く制した。今日いわれるアラブ諸国はこれらの地域で21を数えている。

一方のペルシア民族はペルシア語を国語とする民族である。ペルシア語はインド・ヨーロッパ系の言語で、歴史的にはアラブの勃興より遥かに早く、ギリシア、ローマと時代的にも勢力的にも相拮抗する一大文化圏を形成してきた。今日ではイランの外にアフガニスタンなど、かなりの地域に居住している。

最後のトルコ民族はトルコ語を国語とする民族で、アジア系の言語である。この民族は紀元6～7世紀にモンゴル高原から中央アジア一帯に「突厥」（トクツ）という大帝国を樹立し、10世紀から西へ移動を開始した。

14世紀の始めには現在のトルコ共和国のアナトリア（小アジア）に進出し、その後、オスマン・トルコ帝国を築き、16世紀にはアラブの大半を支配下に収めた。

今日のイラン・イラク国境周辺は、古来からこの3つの民族の交差する接点であった。その最も初期の戦闘がアラブ軍団とペルシアのササン朝との決戦であった。

預言者マホメットの死後、アラブ軍団はアラビア半島を越えて支配権を拡大していった。しかしユーフラテス川以东には当時、強大なササン朝ペルシア帝国が存在し、両者は激しくぶつかり合うことになった。

この両者の決戦は637年、チグリス、ユーフラテス両河の下流で行われた。これが有名な「カーディスィーヤの戦い」として知られている。そしてアラブ軍はペルシア軍を打ち破り、ササン朝ペルシアの首都クテシフォンは陥落した。

次いで14～15世紀にオスマン・トルコ帝国が成立して、ほぼアラブ全域を征服し、またペルシアにもサファウイ朝（1501～1717）が成立した。このサファウイ朝は今後のイランの基礎となる初の国民王朝で、オスマン・トルコ帝国と激しく対立した。

サファウイ朝イランの首都は当初、東北部のダブリーズ（2頁地図の左上）にあったが、オスマン・トルコによって再三占領されるに及び、首都を中部へ、更に南部のシラーズへと遷都した。

一方、今日のイラクの首都バグダッドや南部のバスラも、オスマン・トルコとサファウイ朝ペルシアの両者によって、熾烈な争奪戦の目標となった。

このようにしてオスマン・トルコとペルシアとの間に、初めて国境画定条約が締結されたのは1639年である。このときバグダッド～バスラ間の1200kmの国境が画定され、バグダッドとバスラがトルコへ帰属することが明記された。

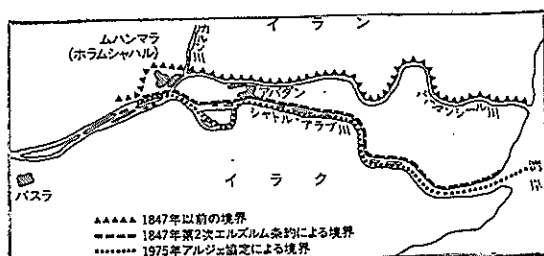
この国境画定条約は1746年と1832年にそれぞれ確認され、1847年のエルズルム条約によって、更にシャットル・アラブ川の領有権にも言及されることになった。（次頁地図参照）

シャットル・アラブ川の領有権が問題になったのは、イギリスとロシアが重大な関

心を持ち始めたからである。イギリスは東インド会社を1736年にバスラに、1795年にバグダッドにまで進出させ、チグリス、ユーフラテス両河を溯って東地中海に達する道の確保に専念した。

この川がオスマン・トルコとペルシア・イランのどちらに帰属するかは、重大な関心事であった。1847年のエルズルム条約によって国境線は同川の東岸とされたが、1975年のアルジェ協定によって国境線は川の中央となったのである。

(上の要図はシャットル・アラブ川の国境線の変遷図)



「宗教紛争も戦争の原因」

「シーア派の誕生」

イランとイラクは宗教的にも民族的にも相互に深く浸透し合っている。それだけにイランに起こったイスラム教シーア派を中心にした革命に、アラブが最も脅威を感じたことも不思議ではない。

国境紛争にも前記したような深い因縁がある通り、宗教紛争にも両国には深い因縁がある。

今日のイランの大多数はシーア派を信奉しているが、シーア派の発祥の地は、現在のイラク領であるチグリス、ユーフラテス両河の沖積平野で、イラン革命は両国の関係を微妙にしたのは当然である。

シーア派は元来、アリー一派を意味している。前記した通りアリーは預言者マホメットの死後、第4代カリフ（カリフとは後継者の意）に推された人物である。彼は預言者の従兄弟であり、また予言者の唯一の娘を妻にした人物であった。しかしアリーは不運な生涯を辿った。

アリーは第3代カリフのウスマーンの後の地位を争うことになった。当時のアラブの世界は非常な勢いで勢力を拡大中であった。占領地の軍事都市の戦士たちは、メディナの中央政府の政策に対して各種の不満を抱いていた。

中でもエジプトの戦士たちは大挙してメディナに押しかけ、第3代カリフのウスマーンを取り囲み、結局これを弑逆（シギキ）してしまった。そしてアリーはウスマーンの家系（ウマイヤ家）であるシリアの知事ムアウィーアと競って、カリフに就任したのであった。（656年）

（ウマイヤ家とは都をメディナからダマスカスに移したカリフ朝）

アリーを推したのはウスマーンを弑逆した不満分子である。このようにしてイスラム教団は内部から分裂した。しかしウマイヤ家のムアウィーアはすでにシリアに於いて大きな力を擁しており、アリーの叶うところではなかった。

アリーはこれに対抗すべく、自ら拠点をイラク南部のクーファに求めたが、アリーはモスクで礼拝中に暗殺されてしまった。

アリーの息子のホセインは代わってウマイヤ家に対抗したが、衆寡敵せず、ホセインは「カルバラ」の野の露となって消えたのであった。680年10月10日のことで、「カルバラの決戦」で有名な戦いである。

ホセインの憤死の日はイスラム暦の正月10日であった。だからシーア派教徒にとっては、この日は最大の服喪の日で、ここにシーア派が誕生することになった。

このようにシーア派は、その成立の歴史からみても特異で、独特な教義を持つことになったのである。

その特異性とは、何よりも預言者の死後のアリー以前の三代にわたるカリフを含め、一切のカリフの特権を認めず、アリー及びその子孫のみが、預言者の正当な後継者だと主張することである。

彼らはこれらの後継者を「イマーム」と呼び、イマームは神によって任命された現世の最高権威者としており、シーア派にとってはイマームは決定的な存在である。

シーア派にとってはイラク南部の平野は、切っても切れない因縁を持っている。初代イマームのアリー聖廟もこの地にあり、悲劇の地のカルバラもシーア派教徒にとっては神聖な地である。

これらイラク南部の人口密集地では、今日まで多くの人がシーア派を信奉してきたことも、上記したような事跡と密接な関係がある。そしてイラクの人口の6割以上がシーア派教徒であり、イラン革命がイラクに与えた衝撃の大きさを窺うことができるのである。

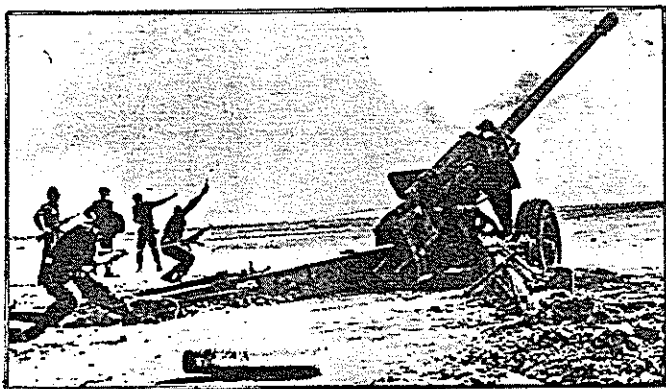
イラクのサダム・フセインが、中東の覇権とアラブの指導権の掌握を目指したイ・イ戦争は、7世紀にアラブ軍団がペルシア軍を破った、第2のカッディッシーヤの戦の再現だと賛美したものの、200万人の死者を出した勝者なき戦いであった。

今まで強力すぎて挑戦できなかったイランは、ホメイニ師の革命によって軍が崩壊したように見え、サダム・フセインは湾岸の強国として、イランに取って代わる時がきたと考えたのではないだろうか。

ホメイニ師も亦、彼がイラクに亡命していた時、パーレウイ国王の依頼を受けたフセインが、彼をフランスに追いやったという恨みがあつたばかりか、社会主義のイラクはイスラムに背く無神論の国であり、許し難い存在であつたのではないだろうか。

又、湾岸の親欧米諸国は、反欧米主義のホメイニ師のイスラム原理主義の波及を恐れ、陰から支援していたことも事実で、戦争の原因は一つや二つではない。古代からの民族的抗争が20世紀の現代に再現したのだと私は思っている。

(下はイラクのサダム・フセイン大統領とイラク軍長距離砲)



3月25日

(土) 曇天

イスファハーン～テヘラン

(下図参照)

願望久しかったイラン紀行もテヘランを残すだけとなった。何事も99を以て半ばとするという格言があるように、用心の上にも用心と心がけ、イスファハーンの想い出を味わいながら、昨夜は深い眠りで疲労を癒すことができた。

連泊したホテルを夜明け前の6時に出発し、市の南方6㌔にある空港に30分後に到着した。断層のように見えていた黒い雲も流れ、東の空は一面に赤く染まって美しい朝焼けであった。

空港ロビーはテヘランに行くビジネスの人が多く、ここにもホメイニ師の令息に対する弔旗と写真が大きく掲載されていた。

イラン航空254便は8時に離陸して飛行すること約1時間、粘土色の荒野に灰色の四角い家並が見え始めると、そこは首都のテヘラン空港であった。天候は快晴のイスファハーンと打って変わり、曇天の空模様で降雨が心配であった。

緯度はイスファハーンと3～4度しか変わらないテヘランは、北に聳えるエルブルズ山脈の高峰で寒気を感じ、久し振りに眺める白雪の景観は懐かしい。

テヘランの町は雄大なエルブルズ山脈の麓の高原地帯に位置し、世界でも高地にある都市の一つであることは入国当時にも感じたことで、その実感を新たにしながらバスは市内に向かった。直ぐ前方にテヘランのランドマークの自由記念碑が網膜に写ると、それより先は高層建築が林立する市街地であった。

日本の京都や奈良のような感じのイスファハーンの町並と違い、テヘランの近代的な都会の風景を見詰めていると、フロントガラスを濡らす小粒の雨をワイパーは拭いはじめ、本格的に今日の観光が心配となってきた。

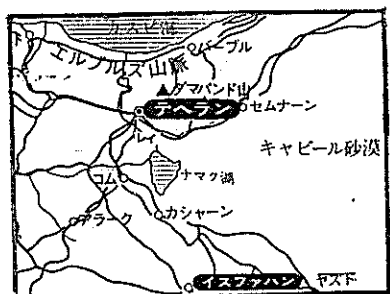
16日の深夜に入国して宿泊した同じホテルのアザデイ・グランドは、市の高台に建つ26階建(482室)の高層建築で、展望する白皚々(ハガイイ)の山並みは霊峰のような感じがしていた。

観光に先立ち簡単なテヘランの概要を記述する。

テヘランの概要

テヘランはその語源Tah-e-ran(山麓地帯の端の意)が示すように、エルブルズ山脈の南麓に広がる沖積扇状地に発達した町で、1796年、カジャール朝を創設したアガ・ムハマッドのときに首都となり、パーレウイ朝からイラン革命を経て、現在もイランの首都である。

テヘランの名が初めて歴史に出てくるのは、13世紀初めのモンゴルの侵入時代である。それ以前はテヘラン東南約8㌔にある「レイ」がセルジューク朝の都として繁栄し、ジンギス汗によって攻め滅ぼされると、住民は周辺の村々に難を避けた。テヘラ



ンもその一つであった。

その頃のテヘランは果樹園に囲まれた周囲4㎞ほどの村で、住民は半穴居式の住居に暮らし、1400年初期には城壁はないが大きな町であったという記録がある。

サファビ朝のタフマースプ1世（在位1524～76）は城塞とバザールを建設し、この町を周囲8㎞の不規則な六辺形の市壁が取り囲む城塞都市にした。

カジャール朝の創設者アーガー・ムハンド・ハーン（在位1779～97）は、テヘランが戦略、交通の要衝を占めることに着目して首都と定めた。第2代ファトフ・アリー・シャー（在位1797～1834）はゴレスターン宮、官庁、城門、モスク、公衆浴場、広場などを造り、首都としての体裁を整えた。しかし都市の大きさでは、ダブリーズやイスファハーンには及ばなかった。

19世紀後半、テヘランは地方の都市、農村からの流入者の増加によって大きく発展した。1868年の人口は16万人で、カジャール朝の王族、官僚、軍人が政治の実権を握り、商人、手工業者が伝統的な経済活動を支えていた。

1869～74年、人口の増加によって手狭になった市街地を拡張する工事が行われ、旧市壁を取り壊してナポレオン3世時代のパリをモデルにして、八角形の市壁が修築された。

周囲18㎞、面積20㎦に市域が拡大され、ガス、馬車軌道、電気、ヨーロッパ風の街路などの近代的な都市の装いが凝らされたが、この時期までは未だ城郭都市という中世的な都市景観が残っていた。

テヘランの近代化はパーレウイ朝のレザー・シャーが1934年から開始した、都市改造計画によって始まった。彼は伝統的なイスラム都市が、典型的な狭い小路が縦横に入り組む道路網を壊し、東西南北に規律正しく貫通する直線道路を建設した。

第2次世界大戦後、人口は急激に増えつづけ、都市化による社会問題が深刻になってきた。現在では人口700万のテヘランは、全国の人口の10%以上が集中する過密都市となった。

1973年のオイル・ショックの石油価格の高騰によって、イランの歳入が2倍に増えると、テヘランもこれによって消費都市から生産都市へと脱皮し、白色革命は酣（たけな）となっていった。

テヘランの地図を広げてみると、どれにも一番下（南）にテヘラン駅が書かれてあるが、駅はテヘランの南端ではない。その南にあるのは広大なスラム街で、地図に見捨てられたこの地域は、皇帝の威光が失墜する引き金となった所であった。

1978年1月7日、聖地コムでホメイニ師支持のデモが警官隊と衝突し、それが各都市に発展していった。テヘランでは9月4日に10万人デモ、7日には50万人デモ、8日には「黒い金曜日」となった100万人デモに膨れ上がった。その時の主力はこの南のスラム街の住民であったと言われている。

1960年代には十分に自給自足ができたイラン農業が、白色革命によって世界最大の食糧輸入国の一つになるまで改革された結果、農村では食えなくなった人々がテヘランの南に流れ込んだのである。

白色革命当時のテヘランの人口は約400万人であった。東西に走るシャー・レザー通り（現在のエンガラブ通り）を境にした南側に住む住民は約300万で、皇帝を始めとする石油成金は全て北側に住んでいた。

イラン全土で1万4000人の医者、殆どは北側に住み、広い清潔な街路に建ち並び、邸宅や近代的なホテルなどは、北側にオイル・マネーの威力を誇示していた。

上記したようにイラン革命で街頭に出たのは南の人たちであった。100万人とも200万人とも言われる、空前の反皇帝デモがテヘランの町を埋め尽くした時、北の人たちは家に閉じこもり、外国行きの航空券を握りしめていた人も多かったと言う。

スラム街の困窮する人々と、オイル太りした人々との貧富の差は想像に絶したと伝えられ、スト中のイラン中央銀行労働者はまた、皇族と政府高官は財産を国外に送金していたと暴露している。

皇帝自身ともなると金額は桁外れで、彼が国外へ出た時にはすでに4兆円にも達し、国内に残した財産は想像もつかないと聞いている。

70年前に彼の父がカジャール朝を倒した時は、一介のコザックの将校に過ぎなかったが、歴史は刻々と変化し、私の脳裏には放映された金の風呂桶が今も鮮明に刻まれている。

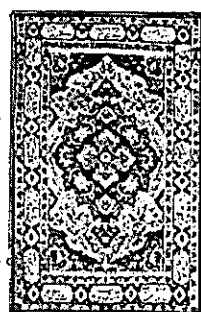
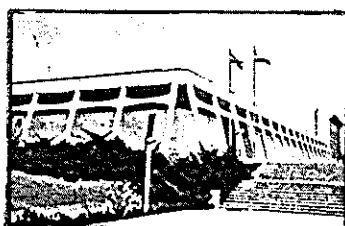
テヘラン市内観光

カジャール朝を創始したアガ・ムハマッドがテヘランを選んだ理由は、他と違って、それまで一度も首都になったことがなかったからである。新王は自分の王朝を新鮮な地盤の上に建設したかったからで、その伝統の薄いテヘランの観光が始まった。

「絨毯博物館」

ホテルで小休止ののち市内観光となったが、市の中心部までの道程は長く、先ず最初に案内されたところはカーペット・ミュージアムの絨毯博物館であった。

小高い大きな敷地に建つ美しい白亜の博物館の中に脚を踏み入ると、館内は整然とした通路で区画され、各区画に各時代の絨毯が展示されていた。



(右は絨毯博物館の白亜の建物と、展示された絨毯の一つ)

世界に名高いペルシア絨毯は、2500年前のアケメネス朝時代以来の物が飾られ、各種のデザインは何を意味しているのだろうか、とゆっくり歩きながら見て回った。

年老いた老人が絨毯を織る作業を見せていた。しかし、観光客は我々以外は全くなく閑散としていた。それは後刻判明したことだが、今日はイランの祝祭日で休日だったのであった。

幾何学模様の多いものの中に、イランに生息する各種動物の図柄も混じっており、珍しいものとしては「サソリ」の画まで織られていた。

偶像禁止のイスラムの世界ながら、皇帝や人物像を織った絨毯も展示されていた。これはイスラム以前のゾロアスター教時代の古い作品ではないだろうか。

イスラムは神の唯一性を説き生物を描くことも禁じたため、植物にしても具体性を持たず、抽象的な唐草模様へと発展したことが、展示品を通じて理解できたのである。

絨毯が凡ての人々に普及したのはイスラムの発展の後であった。モスクが建てられて床には絨毯が敷き詰められ、1日に5度の礼拝は清潔な場所を要求したため、絨毯が発達したのではないだろうか。

遊牧の各家庭へも次第に普及し、パオの天幕の入口の扉や壁としても用いられたように、富める者のものではなく、庶民の日常生活のための物となったのである。

絨毯博物館の見学が終わった一行は再びホテルに戻って昼食となり、午前の観光は終了した。(ホテルの位置は下図の中央上)

「テヘラン考古学博物館」 (米大使館占拠人質事件)

アザデイ・グランド・ホテルを午後2時に出発して市中に進み、テヘラン考古学博物館へと向かった。(テヘランにはイラン中央銀行の地下に国立博物館があり、他に民族博物館もあったが、祭日のため休館であった)

バスは大きい敷地の米大使館の前を通過した。思い出すのは「米大使館占拠人質事件」で、我々の記憶に新しい事件の様相を想起させてきた。

1979年10月22日、パーレウイ国王が米国に出国し、胆石と胆嚢の除去手術を受けたことが導火線になり、11月4日、テヘランで米大使館占拠人質事件が発生した。これは一連の革命イランの流れであったと思われる。

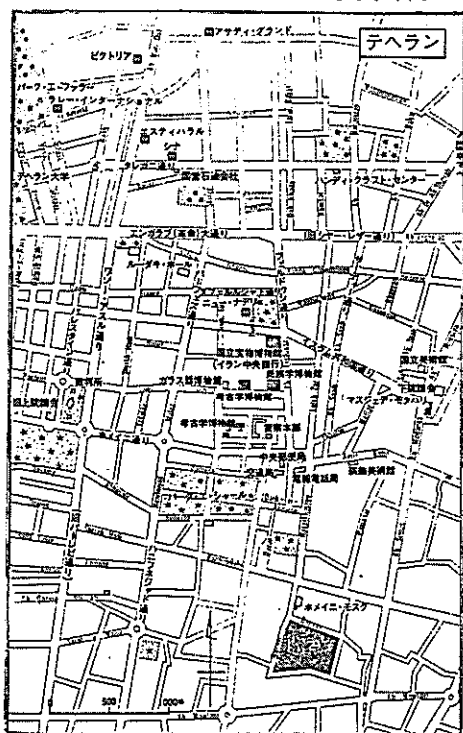
444日間にわたって続いた米大使館占拠人質事件は、対イラン経済制裁の発動、カーター政権の崩壊をもたらすなど、世界中にその波紋を広げた。勿論、これを引き起こした学生はホメイニ路線に従うグループであった。

当時、国王の政治に反対する国内勢力と死闘を演じていた学生たちは、ホメイニ師が「大悪魔」と叫ぶ米大使館を通じ、目的を達成しようとしたのである。占拠後、彼らはパーレウイ国王の引き渡しを要求しただけでなく、ホメイニ師の革命路線から逸脱しようとしていたバザルガン首相を攻撃した。これには学生達の指導者で強硬派のホメイニ師の意向が反映していたと思う。

このような事件の経過を想起して眺めながら、イラン考古学博物館(上図中央)に到着したが、混み合ったバスの群れのため暫く待機させられた。

テヘランの官庁街の一角にある博物館はイラン最大、最古の博物館で、フランスの都市計画家で考古学者のゴダールを初代館長として、1936年に開設した。

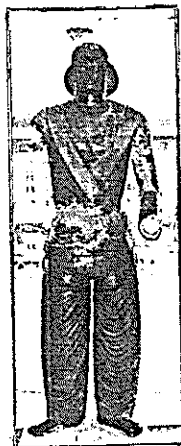
煉瓦建築の2階建の建物には、イラン2500年の文化遺産が一堂に集められ、1階には先史時代からササン朝ペルシア時代まで、2階にはイスラム時代の世界屈指の膨大なコレクションが展示されていた。



(上の写真は博物館の正面玄関)

先史時代の墳墓から出土した黄金製品、銀製品、青銅器を収蔵展示した部屋も設けられていた。

収蔵品にはイラン高原の彩文土器、青銅器、アケメネス朝の金・銀の容器、宮殿装飾



の彫刻、ササン朝の陶器、銀器、カットグラスなど、イラン美術を代表するものばかりであった。（上の左の写真はペルセポリスのダリウス1・2世のレリーフ）

イスラム美術では7～16世紀のペルシア陶器、ガラス器、細密画、絨毯、フレスコなどが展示されていた。

大きな人間像である「パルチア貴人像」は宣伝効果も抜群で、特に我々の目を引き付けていた。パルチア時代とはアルケサス朝とも呼ぶ古代イラン王朝で、前248～紀元後226年の間存続し、「レイ」に都していたがササン朝に滅ぼされた。中国名では「安息」である。（上の真ん中の写真はパルチア貴人像）

（上の右側の写真は3000年前の水差し）

約30分の見学時間では素通りのような状態で、その上、写真撮影は禁止で説明書の販売もなく、やむを得ず絵はがきを購入して館を出た。

「バザールとマスジッド・イ・シャー」

考古学博物館の見学に引き続き、直ぐ西側にある「ガラスと陶器の博物館」に立ち寄った。しかし、アケメネス朝以来の僅かなガラスや陶器の展示品を見学したものの、特に記事にするような価値はなかった。本日はイランの祭日のため殆どのところは閉館で、ガイド氏は時間つぶしに案内したのであった。

一行を乗せたバスは市内を南下してバザールに向かった。しかし、ここも当然の休みであったが、ガイドのアーリー氏は延々と広がる閉店したバザール街を案内した。

世界最大と言われるこのバザールは、カジャール朝（1794～1925）時代につくられ、ドームを連ねたようなアーケードはよく保存されていた。店を閉めたバザール内は薄気味悪い感じで薄暗く、何の目的で迷路のような街路を誘導するのかと、憤然と怒りを覚えながら痛い脚を引きずっていた。

バザールの中に「マスジッド・イ・シャー」と言う「王のモスク」があり、ガイドは我々の心中を理解する事なく案内した。幸いにも余り大きくないモスクであったから、私も我慢しながら殿を歩きバザール街を出た。

イラン革命では宗教指導者の政治的リーダーシップと共に、革命の中心となったバザールの役割が大きかった点を思い出し、閉ったバザールを歩きながら回顧していた。

イスラム社会では必ずバザールには、都市の主要なモスクが結びついていることを実感した。そしてバザール人は他の人たちよりも熱心なイスラム教徒であった。

宗教的に熱心なバザールの商人や職人は、伝統的に自己の所得の一部を宗教税として宗教指導者やモスクに上納し、その一部を貧民救済に使ったから、宗教家とバザールの関係は緊密であった。

国王の権力に不当に取締りを受けた商人が、宗教指導者にその不当を訴えると、宗教指導者はこれを取り上げ、反国王運動に立ち上がったのがイラン革命であった。

即ち、バザールは歴史的には金融、商業の中心地であったが、新しい金融機関の銀行や大企業の発展によって弱体化し、暴動が起ると商人たちは立ち上がったのである。

このようなことを脳裏に浮かべ、途中、貧弱な日本大使館を眺めて6時に帰館した。

イランという国自体は古代文明の舞台であったが、歴史の浅いテヘランは見るべき箇所も少なく、そのうえ祭日が重なり、本日の観光は実感として無意味であった。

3月26日

(日) 晴

続テヘラン市内観光

「レザー・シャーの夏の宮殿」(サーダバード宮殿)

白雪の連峰が窓一杯に映った外は曇天模様で心配していると、東の空の雲は途切れ始め、晴天に一縷の望みを抱いて出発を待っていた。しかしエルブルズ山脈から吹き下ろす雪下ろしの風は冷たく、骨身にしみる感じがしていた。

日曜日のためか早朝からテレビはコーランずくめで、イラン最後の日となった今日の観光は、ホテルと眉目の距離にあるレザー・シャーの夏の宮殿からはじまった。

次第に明るくなってきた陽差しが舗装道路を照らし、狭くなってきた坂道はほどよく茂った樹々に覆われ、辺り一帯は新鮮な感じが漂っていた。

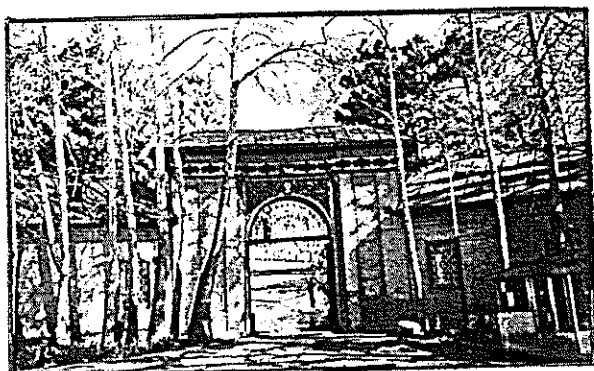
テヘランの町はエルブルズ山脈の麓に北から南へと広がっているため、森に囲まれた北部は上流階級や外国人の別荘が建ち並び、森閑として涼しさが聞こえるようで、バスは人里離れた山の中腹に停車した。

興奮気味にしばらく歩くと、そこに栄耀栄華を極めて夢の跡となった、宮殿の庭園が見えてきた。早速、鉄柵の囲いの隙間から数枚の写真を撮って、入館を待っていた。

しかし日曜日の今日は休館で、外部からの写真撮影も厳禁で監視の衛兵が立っていた。

肩を落として嘆息したが、警備の兵の知らぬ間に貴重な写真を撮った私は幸運で、撮れなかった人もいたのではないかと心配していた。(上は宮殿の正面玄関)

1979年に発生したイスラム革命によって、国外追放となったパーレウイ国王が、16年間もファラ王妃と住んでいた夏の宮殿は今は主はなく、鬼哭啾啾(キョクシュウ)とした感じの悲劇の跡であった。



山麓に位置する広大な敷地と建物は当時のままに残され、その絢爛豪華な造りや調度品を見ると、僅かな年月で世界有数の金持ち国となったイランの繁栄と富みを、偲ぶことが出来ると言われている。

現在、博物館となっているこの中には、国王の膨大な美術コレクションも展示され、ガンダーラの仏像、ストゥーパ（仏塔）の祭壇、ルノワールの絵、金製品など、見るべきものが多いと聞いている。

圧巻は天井が開閉する寝室で、寝ながらにして満天の星を眺めることができると言われているが、これらの大きな期待も夢となったことは誠に残念至極であった。

「奢る者は富みて足らず、儉なる者は貧なれども余り有り」と言う格言があるが、彼は財産は人材であることを忘れ、ごますりに囲まれて裸の王様になったのである。

法華経にも「もろもろの苦の原因は大欲をもって本となす」、と教えているが、贅の限りを尽くした彼は、地に足のついた忠告を聞く耳を持たなかったからこそ、革命を引き起こしたのである。

このことは昨秋訪れたルーマニアのチャウシェスク大統領と同じで、金権政治家の跋扈（バク）する日本の政治家も、他山の石として学ばなければならない。

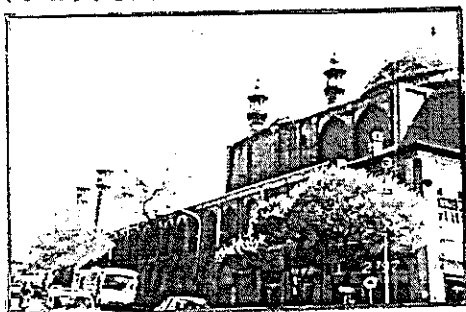
宮殿の北側に壁のように聳える連山の白雪が、朝日に染まった美しい景観を眺めながら、感慨深い感想を抱いてバスに乗車した。

バスの中で、賢い人を厚遇すれば立派な賢い人が集まると言う、「士を好めば士至る」の句を口ずさんでいると、「勸善懲惡」、「大利のある所は大禍の伏す所なり」、「創業は易く守成は難し」、というような戒めの言葉が次々と脳裏に浮かんできた。

「モタハリ・モスク」 （91頁地図の中央右側）

テヘラン北部は昔から有産階級の住宅地で、すずかけの並木道を通して今なお高級な邸宅が居る中を通過し、市の中心部へと進んだ。

大通りに沿って4本のミナレットが聳えるモスクの横でバスは停車した。ここが1830年、カジャール朝時代に建立したモタハリ・モスクであった。



テヘランでは祭日と日曜日が続き、万事順調に事が運ばず失望落胆の連続で、首都第2のモスクも閉門していた。そこで大通りの北側に見えていたエルブルズ山脈の美観にシャッターを向け、尖塔と壁面の見事なタイル細工を眺めただけで立ち去った。（上の写真はモタハリ・モスクの側面風景）

「レイのアリの泉」 （2頁の地図と16頁参照）

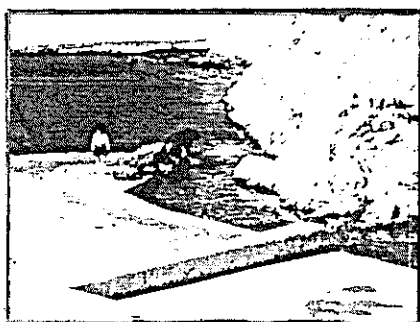
ガイドのアリー氏は市内の観光案内を諦めてバスの進路を南に向け、入国した翌日の17日に訪れた「レイ」へと走らせた。

レイは16頁に記述した通りテヘラン東南約10kmの古都で、アレキサンダー大王も東征の途上に滞在したことがあり、11世紀にはセルジューク朝（1040～1157）の都となって大いに繁栄した所である。しかし、1220年にジンギス汗に滅ぼされてしまった。

レイにはその当時の城壁や廃墟の跡が残っていると言われているが、我々はそれらの遺跡を見ることもなく、旧市街の中心部にある「アリの泉」へ案内された。

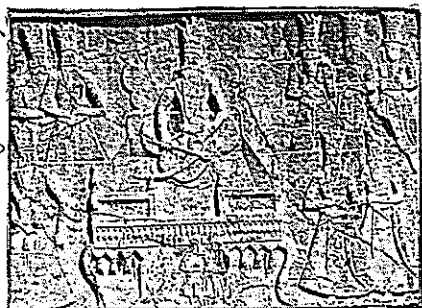
下車すると直ぐ目の前に小さな池が見え、背後に白い岩山の小さな丘があった。かつてこの岩山の斜面は泉で洗った絨毯を乾かす場所であったが、今では工場で洗濯乾燥するため使用されていない。

余り大きくない泉は水浴やチャードルを着た婦人たちの食器洗い、水汲み、洗濯に使用されていた。しかし、婦人たちの洗濯の姿を見ていると昔の日本の井戸端会議のような風景で、恰かも楽園の感じがしていた。（上はレイの泉）



辺りを見渡すと地下水が豊富で飲料水や灌漑用水の供給源となっていて、青い灌木も茂ってオアシスの標本のような風景であった。そのため都となったのであろう。

又、濃紺の水をたたえた泉の向こう側の岩壁には、ササン朝（226～651）最後の王で、7世紀の中頃にアラビア人の侵入によって滅ぼされたヤズドギルド王が、玉座に腰かけているレリーフがあった。（右の写真はあえない最後を遂げたヤズドギルド3世のレリーフ。在位632～650）



左右に侍臣がならび、王のすぐ傍らにいる人物は手に鳥を持っていたが、恐らく神官であろう。

これは17世紀のレリーフで、後世の人がササン朝最後の王を偲んでの彫ったものでないか。しかしオアシスの歴史の町の唯一つの引き立てる遺物であった。

レイの歴史によると古代には「ラガ」と呼ばれ、ゾロアスター教の経典「アヴェスター」や「旧訳聖書」にも出ているのであった。前5000年から紀元後12世紀の間繁栄したというから、大変長期間栄えた町である。

昨日・今日の観光ではレイが一番印象に残り、再びテヘランへと向かったのである。

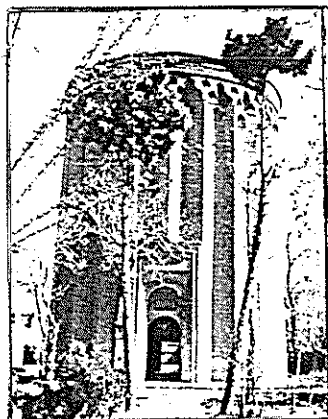
「トホロギ・タワー」

レイからテヘランに戻る途中バスは農村地帯の寒村の中に入った。ここは13世紀のセルジューク朝の王の一人である「トホロギ」を祀る墓地のある所であった。

寂れた田舎の片隅に土色をした円形の高い尖塔が聳え、敷地の中に入って見ると塔には天井がなく、珍しく開けて青空が見えていた。

ガイドのアーリー氏の説明によると王は天文学者で、この塔は天体観測用の王の天文台の跡であった。そして敷地の奥には王の墓が祀られていた。

（右の写真は天井がない円筒形のトホロギ・タワー）



現代数学の最重要な基礎部門の数学者の「トポロジー」ではないかと疑問を抱きながらバスに乗車したのであった。

「アザディ・タワー」

トホロギ・タワーの観光を最後にして午後1時にホテルに帰館し、昼食を済ませた一行は帰国のために3時半、思い出多いアザディ・グランド・ホテルを後にして空港に向かった。

懐かしい市内を通過して郊外の自由通り（革命前はアイゼンハワー通り）に差し掛かると、前方のエルプルス山脉の稜線上に、標高5671㍎のダマハンドの純白の頂きが、他を睥睨して鶏群の一鶴のように天空に聳え、その春の陽に照らされて美しく浮かぶ光景は、ペルシア芸術の最高傑作のように見えていた。

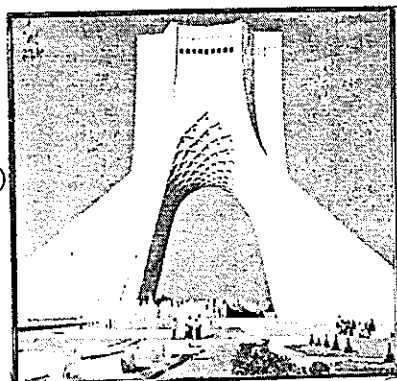
間もなくバスはアザディ・タワーの広場で停った。テヘランを訪れて以来何回となく拝見した白亜のタワーは、近くから眺めると実に大きい塔であった。

パーレウ^イ時代はシャー・ヤド（王の記念碑）と呼んでいた。革命後はアザディ・タワー（自由記念碑）と改称され、逆V字型の白いアーチの塔は自由を謳歌するように、青空を背景に眩く伸びていた。

この塔の設計は、イランの首都テヘランの新しい玄関口に相応しく、ペルシア帝国建国2500年記念事業として一般から公募され、25才の建築科の学生の設計が採用され、建設されたものであった。（上はアザディ・タワーの自由記念碑）

時間がなく中に入れなかったが、1階にはスライドでイラン2500年の建築美術を説明する、素晴らしい装置と博物館が設けられ、タワーの頂上からは雄大な眺望を楽しむことが可能らしい。

衆心帰一の目的で建設したこのタワーは、パーレウ^イ国王の人生を顧みて、人の長たる者は晩年は更に心を奮い起こし、有終の美を飾らなければならないと、教示しているように見えていた。言葉はその人の心の中に植えられた苗のようなものと、痛感しながら5時に空港に到着した。



テヘラン～北京～成田

「巡礼の帰り元の顔」という川柳がある。これは禅語の「無事は無事」と同じ意味で、出発時と同じように元気で無事であることが、何よりの土産だと言うことである。

幸いに病身な私が今回の12日間のイランの旅も、心ある人々の有形無形の援助により、楽しく無事に終わることができた。有難く感謝しなければならない。

空港では世話になったガイドのアリー氏に心ばかりの記念の品を提供し、嚴重だと噂されていた検査も無検査で通過して、搭乗待合室にはいった。

19:30に飛翔したイラン航空800便は空席が多く、横臥して「下り坂の車、順風の船」の言葉のように順調に空の旅を過ごし、北京空港に立ち寄って予定時刻よりも若干早く、3月27日の正午、成田空港に安着した。

あとがき

人間には欲のない者はいないが、その欲の質と働きが問題である。又、欲望は喝して塩水を飲むが如しで際限がなく、常に不満が伴うものである。しかし、願望が成就すると満足だったという喜びが湧いてくる。その点、今回のイラン・ペルシア紀行は満足の旅であったと確信している。

イランはユーロシア大陸東西の中間点にあって、陸上交通の十字路に位置するため、アジア、アフリカ、ヨーロッパを結ぶ要衝であった。そのため、あらゆる民族が移動する度に必ず通過しなければならず、絶え間のない侵略や血みどろの征服の対象となつて、幾度となく災禍に遭遇しなければならなかった。

しかし、ギリシア、アラビア、中央アジアなどからの侵略者、征服者たちは、破壊だけをした訳でなく、新しい文明をもたらしている。そして彼らはペルシアの習慣、生活、言語などを取り入れ、自らをこの地に同化させた。これは一大特色である。日本の植民地支配にも、この同化の着眼があったならばと悔やまれる。

このようにギリシア、ローマと相拮抗する、ペルシア的な独創的性格を持った文化が生成発展したことは、ペルセポリスの遺跡を始めとして各地で見聞した。この「独立自尊」の精神は今日まで受け継がれているのではないだろうか。

ペルシア帝国を建設したダリウス大帝が楔形文字で彫らせた、「余は王の中の王、ペルシア民族は太古より王であった」、という意識の強い伝統が、ササン王朝滅亡後（アラブの侵入）も民族意識として維持されたのであった。

これらの思想は中国の中華思想、日本の八紘一宇（日本書紀の「掩八紘而為宇」より出た言葉で、世界を一つの家とするスローガン）、ユダヤの選民思想（神に選ばれた民族）と似ている。

最後の王となったパーレウ^イ皇帝も自らを「シャー・ハン・シャー」（王の中の王）と呼び、即位後は米国を始めとする大国の干渉との闘争の中で、国民を一致団結させ、この伝統的精神を最大限に活用した。

しかし急進的な白色革命の皇帝派と、ブルジョワ及び中産階級を背景としたイスラム共和制派とは、結局は水と油で底流に相容れないものがあり、遂に国王は追放されてイスラム革命は成功した。

支那革命外史には、「革命とは順逆不二の法門があり、その理論は不立文字である」と記されている。即ち、革命運動というのは、良いとか悪いとか、道理に合っているとか合っていないとか、と言った見方はできない。革命の実体は人々の情動が激しく起こり、不断な行動へと駆り立てることだと述べている。全く同感である。

以上は私のイランに対する歴史的な回顧だが、今回のイラン周遊の旅で最も強烈に感じたことは、現在のイランは「ホメイニ帝国」だということであった。旧ソ連時代のレーニン像、少し前の中共の毛沢東像、現代の北朝鮮の金日成像と同じく、全国津々浦々までホメイニ師の肖像が掲載され、これを立証していた。

ホメイニ師の主張するイスラム共和制とは、コーランとイスラム信仰に基づく共和制国家の建設である。しかし全世界を眺めても、如何なる既存の憲法にもこのような先例がなく、私には理解に苦しむところであった。真の狙いは皇帝を追放するための

イスラム共和制革命であったと見るべきであろうか。現状を観察すると、そればかりではないようだ。毛沢東は全て銃口からだと言っていたが、私は銃口や宗教から国家が生まれてはならないと言う考え方である。

イ・イ戦争から今日の問題となっている「イスラム原理主義の脅威」など、国際社会のイランに対する懸念は消えてはいない。イランを誹謗した英人作家サルマン・ラシュディ氏が、ホメイニ師から死刑宣告されたことでも明瞭である。

しかし、私が一巡してイラン各地で接した一般の国民は、宗教には何ら関係なく親日的であった。個々の人間には宗教を超越した人間性があることを忘れてはならない。「春秋に義戦なし」の古語の通り、春と秋がどちらが良いかと優劣を争っても仕方がないのと同様、宗教戦争ほど始末に終えないものはなく、宗教を政治の場に持ち出すことには私は反対である。

木を見て森を見ることはできず、一部をみて全体を見ることもできないが、「自分を大切に思い、他人の立場と意見を尊重し、自分を愛する気持ちを隣人に広げていて欲しい」、とイランの人達に要望したのである。

ダライ・ラマ14世は、「愛国主義や宗教を利用して、人民の感情を操作する政治家に大きな問題がある。宗教が武器を持つのは間違いで、暴力で問題を解決するのは人間本来の姿ではない」と述べている。国を指導する政治家は他山の石として考えなければならない。

帰国後、この紀行文の作成に着手した途端、ワープロの打ち過ぎであろうか原因不明で、首が前後左右に動かず頸椎骨に激痛を覚え、入院加療の身となってしまった。結局、リハビリのために通院を続けて完成は7月末であった。

海外旅行の紀行文もイラン紀行が最終となるやも知れず、夢を追わなければ生きていけない私は、今後どうなることであろう。

